熊谷遺跡・要害遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書13

2001年3月

路公団中国支社
県教育委員会

正　　誤　　表

熊谷遺跡・要害遺跡

ページ／行数	誤		正
目次／2	図版 29	要害遺跡溝上層（南から） 要害遺跡溝上層（南東から）	要害遺跡トレンチ２土層断面 要害遺跡溝中層（東から）
目次／4	図版 30	要害遺跡溝検出状況（東から） 要害遺跡溝中層（東から）	要害遺跡溝検出状況（南から） 要害遺跡溝上層（南東から）
目次／18	図版 37	要害遺跡溝第２次遺構面検出土器 要害遺跡溝で画された丘陵斜面包含層検出遺物	要害遺跡溝で画された丘陵斜面包含層検出遺物 要害遺跡溝第２次遺構面検出土器
図版 29／上段 ／下段		要害遺跡溝上層（南から） 要害遺跡溝上層（南東から）	要害遺跡トレンチ２土層断面 要害遺跡溝中層（東から）
図版 30／上段 ／下段		要害遺跡溝検出状況（東から） 要害遺跡溝中層（東から）	要害遺跡溝検出状況（南から） 要害遺跡溝上層（南東から）
図版 37／上段 ／下段		要害遺跡溝第２次遺構面検出土器 要害遺跡溝で画された丘陵斜面包含層検出遺物	要害遺跡溝で画された丘陵斜面包含層検出遺物 要害遺跡溝第２次遺構面検出土器

熊谷遺跡・要害遺跡全景（北から）

熊谷遺跡・要害遺跡調査前全景

熊谷遺跡Ⅲ区と三刀屋町中心部（東から）

熊谷遺跡Ⅱ・Ⅲ区と木次町中心部（北から）

三刀屋熊谷２号墳出土重圏文鏡

三刀屋熊谷２号墳出土瑪瑙製勾玉

熊谷遺跡・要害遺跡

中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書13

２００１年３月

日本道路公団中国支社
島根県教育委員会

序

中国横断自動車道尾道・松江線は、「国土開発幹線自動車道法」に基づいて、均衡ある国土の開発に寄与する高速道路の一環として計画が進められ、このうち三刀屋～松江間につきましては、平成９年３月から鋭意建設を進めてまいりました。その過程で、路線敷地内にある遺跡について島根県教育委員会と協議し、記録保存のための発掘調査を進めてまいりました。本書は松江工事事務所担当区域である三刀屋町・木次町における熊谷遺跡などの貴重な遺跡の発掘調査の記録であります。

この記録調査が、はるかな過去に生きた先祖の生活や文化様式を時代を超えて現代に蘇らせ、また、現代に生きる私どもの未来への道しるべとなるとともに今後の調査研究の資料として活用されることを期待するものであります。

なお、この発掘調査および本書の編集は島根県教育委員会に委託して実施したものであり、ここに関係各位の御尽力に対し、深甚なる誠意を表すものであります。

平成13年３月

日本道路公団中国支社松江工事事務所
所長　村　田　一　廣

序

島根県教育委員会では、日本道路公団中国支社の委託を受けて、平成８年度より中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内に所在する埋蔵文化財の発掘調査を実施してきておりますが、このほど報告書第13集を刊行する運びとなりました。

本報告書は、飯石郡三刀屋町から大原郡木次町に所在する２カ所の遺跡での調査成果を取りまとめたものです。このうち、熊谷遺跡からは、古墳時代の銅鏡としては県内で最も小さな重圏文鏡や、山陽地方との関わりが推定される中世山城の石垣状遺構など、交通の要衝としての三刀屋町・木次町の特徴的な歴史を垣間見ることができました。一方、要害遺跡の調査では、弥生時代前期に遡る溝による区画を検出し、一般の集落と様相の異なる状況を垣間見たことから、弥生時代研究に新たな一石を投じることとなりました。

なお、調査にあたり御協力いただきました地元三刀屋町・木次町住民の方々、日本道路公団、三刀屋町教育委員会、木次町教育委員会をはじめ、関係の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成13年３月

島根県教育委員会
教育長　山　﨑　悠　雄

例　　言

1．　本書は、日本道路公団中国支社の委託を受けて、島根県教育委員会が平成11年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。

2．　本書に掲載した遺跡の所在地・調査年度は次のとおりである。

熊谷遺跡（飯石郡三刀屋町下熊谷・大原郡木次町下熊谷）

要害遺跡（飯石郡三刀屋町下熊谷）

3．　調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

平成11年度〔事務局〕　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）　秋山　実（総務課長）　今岡　宏（総務係長）渡邊典子（総務係主任主事）　川崎　崇（総務係主事）

〔調査員〕　林　健亮（調査課第１係文化財保護主事）　仁木　聡（同主事）　安達和隆（同教諭兼文化財保護主事）　名越顕秀（同教諭兼主事）　田中玲子（同臨時職員）　岡本育子（同臨時職員）

平成12年度〔事務局〕　宍道正年（埋蔵文化財調査センター所長）　内田　裕（総務課長）　今岡　宏（総務係長）　渡邊典子（総務係主任主事）　川崎　崇（総務係主事）

〔調査員〕　林　健亮（調査課第１係文化財保護主事）　仁木　聡（同主事）　田中玲子（同臨時職員）　岡本育子（同臨時職員）

4．　発掘作業（発掘作業員雇用、測量発注ほか）については、島根県教育委員会から中国建設弘済会へ委託して実施した。

社団法人中国建設弘済会島根支部

平成11年度　布村幹夫（現場事務所長）　原　博明（技術員）　永原正寛（技術員）　簾俊治（技術員）　栃木　忍（技術員）　馬庭明美（事務員）

5．　発掘調査、並びに報告書作成にあたっては、次の方々から有益な指導・助言を得た。記して謝意を表しておきたい。（敬称略）

田中義昭（島根県文化財保護審議会委員）　蓮岡法暲（島根県文化財保護審議会委員）　森下章司（京都大学大学院文学研究科助手）　渡邊貞幸（島根大学法文学部教授）

6．　挿図中の方位は測量法による第Ⅲ座標系Ｘ軸の方向を指す。

7．　本報告書に掲載した「遺跡位置図」は建設省国土地理院のものを利用した。また、第３・42・61図はアジア航測株式会社が、第４・29・51図は有限会社相互技研が作成したものを元に作成している。

8．　本報告書に使用した実測図は各調査員の他、遺物整理作業員河野真由美、小豆沢美貴、木谷久美子、広野節子、西郁子が作成した。また、本報告書に掲載した写真は航空写真、カラー図版３上段・図版28上段を除き、各調査員が撮影した。カラー図版３上段・図版28上段は、奈良国立文化財研究所牛島茂氏に撮影していただいた。

9.　本報告書の執筆は、林、仁木、名越が分担して行い、目次にその分担を記した。

10.　本報告書の編集は、埋蔵文化財調査センター職員の協力を得て林が行った。

11.　出土遺物及び実測図、写真は島根県教育委員会（埋蔵文化財調査センター）で保管している。

本　文　目　次

第１章　調査に至る経緯と発掘調査の経過 …… (林) …… (1)

第２章　遺跡の位置と環境 …… (名越) …… (3)

第３章　熊谷遺跡 …… (林) …… (11)

　第１節　熊谷遺跡の位置と周囲の状況 …… (11)

　第２節　調査区の設定とトレンチ調査の概要 …… (12)

　第３節　Ⅰ区の調査 …… (17)

　第４節　三刀屋熊谷１号墳 …… (26)

　第５節　三刀屋熊谷２号墳 …… (27)

　第６節　Ⅱ区の調査 …… (43)

　第７節　Ⅲ区の調査 …… (53)

　第８節　Ⅳ区の調査 …… (63)

第４章　要害遺跡の調査 …… (仁木) …… (71)

　第１節　調査区の設定とトレンチ調査の概要 …… (71)

　第２節　丘陵先端部の調査 …… (71)

　第３節　溝の調査 …… (71)

　第４節　その他の遺構 …… (77)

　第５節　出土遺物 …… (78)

　第６節　小結 …… (84)

第５章　まとめにかえて …… (林) …… (87)

　第１節　出雲地方出土の古墳時代の鎌について …… (87)

　第２節　三刀屋熊谷２号墳出土の重圏文鏡について …… (90)

挿　図　目　次

熊谷遺跡

第１図　熊谷遺跡・要害遺跡の位置 …… 3

第２図　熊谷遺跡・要害遺跡とその周辺の遺跡 …… 8

第３図　熊谷遺跡地形測量図（調査前） …… 13～14

第４図　熊谷遺跡Ⅰ区遺構配置図 …… 15～16

第５図　熊谷遺跡Ⅰ区遺構配置図 …… 18

第６図　熊谷遺跡Ⅰ区土層断面図(1) ……19
第７図　熊谷遺跡Ⅰ区土層断面図(2) ……20
第８図　熊谷遺跡Ⅰ区土層断面図(3) ……21
第９図　熊谷遺跡Ⅰ区土層断面図(4) ……22
第10図　三刀屋熊谷１号墳地形測量図 ……23～24
第11図　三刀屋熊谷１号墳主体部実測図 ……25
第12図　三刀屋熊谷１号墳出土遺物 ……26
第13図　三刀屋熊谷２号墳地形測量図 ……28
第14図　三刀屋熊谷２号墳第１主体部実測図 ……30
第15図　三刀屋熊谷２号墳第２主体部実測図 ……31
第16図　三刀屋熊谷２号墳出土重圏文鏡実測図……32
第17図　三刀屋熊谷２号墳第１主体部出土遺物実測図……32
第18図　三刀屋熊谷２号墳第２主体部出土遺物実測図 ……33
第19図　熊谷遺跡Ⅰ区溝５付近地形測量図 ……33
第20図　熊谷遺跡Ⅰ区Ｐ１実測図 ……34
第21図　熊谷遺跡Ⅰ区中央部実測図 ……35
第22図　熊谷遺跡Ⅰ区南側実測図 ……36
第23図　熊谷遺跡Ⅰ区出土石器実測図 ……37
第24図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(1) ……38
第25図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(2) ……39
第26図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(3) ……40
第27図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(4) ……41
第28図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(5) ……41
第29図　熊谷遺跡Ⅱ区地形測量図（調査後）……44
第30図　熊谷遺跡Ⅱ区土層断面図 ……45
第31図　熊谷遺跡Ⅱ区落とし穴状遺構１実測図 ……46
第32図　熊谷遺跡Ⅱ区落とし穴状遺構２実測図 ……47
第33図　熊谷遺跡Ⅱ区土壙１実測図 ……48
第34図　熊谷遺跡Ⅱ区北側、落とし穴状遺構を除く遺構配置図 ……49
第35図　熊谷遺跡Ⅱ区溝６実測図 ……50
第36図　熊谷遺跡Ⅱ区Ｐ９実測図 ……50
第37図　熊谷遺跡Ⅱ区Ｐ１０実測図 ……50
第38図　熊谷遺跡Ⅱ区Ｐ１１実測図 ……51
第39図　熊谷遺跡Ⅱ区Ｐ１２実測図 ……51
第40図　熊谷遺跡Ⅱ区溝７実測図 ……51
第41図　熊谷遺跡Ⅱ区出土土器実測図 ……52
第42図　熊谷遺跡Ⅲ区地形測量図 ……55～56
第43図　熊谷遺跡Ⅲ区土層断面図 ……57

第44図　熊谷遺跡Ⅲ区西側実測図 ……58
第45図　熊谷遺跡Ⅲ区溝８実測図 ……59
第46図　熊谷遺跡Ⅲ区東側遺構配置図 ……60
第47図　熊谷遺跡Ⅲ区加工段実測図 ……61
第48図　熊谷遺跡Ⅲ区石垣状遺構実測図 ……61
第49図　熊谷遺跡Ⅲ区土壙３実測図 ……62
第50図　熊谷遺跡Ⅲ区出土土器実測図 ……62
第51図　熊谷遺跡Ⅳ区地形測量図（調査後）……64
第52図　熊谷遺跡Ⅳ区土層断面図 ……65
第53図　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構３実測図 ……66
第54図　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構４実測図 ……66
第55図　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構５実測図 ……67
第56図　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構６実測図 ……67
第57図　熊谷遺跡Ⅳ区土壙４実測図 ……58
第58図　熊谷遺跡Ⅳ区不明遺構１実測図 ……69
第59図　熊谷遺跡Ⅳ区不明遺構２ ……69
第60図　熊谷遺跡Ⅳ区坑道状遺構 ……70

要害遺跡

第61図　要害遺跡調査区位置図（調査前） ……74
第62図　要害遺跡遺構配置図（調査後） ……75
第63図　要害遺跡土層断面図(1) ……76
第64図　要害遺跡土層断面図(2) ……77
第65図　要害遺跡土層断面図(3) ……78
第66図　溝、第２次遺物検出面平面図 ……79
第67図　溝完掘及び溝底部の礫検出状況 ……80
第68図　溝東端壁土層断面図 ……81
第69図　溝西端土層断面図 ……81
第70図　調査区東端壁土層断面図 ……82
第71図　溝中央部土層断面図 ……82
第72図　落とし穴実測図 ……83
第73図　要害遺跡出土遺物実測図 ……84

第74図　出雲・石見地方出土の古墳時代の鎌……90
第75図　小才１号墳出土鎌……91
第76図　隠岐地方出土の古墳時代の鎌……91
第77図　御津中の井古墳出土鎌……92

表　目　次

第１表　周辺の遺跡一覧……9
第２表　要害遺跡出土土器観察表……85
第３表　礫計測表……86
第４表　要害遺跡検出礫……88
第５表　県内出土の古墳時代の鎌……93
第６表　県内出土の古墳時代の鏡……95

図　版　目　次

巻頭カラー図版
1　熊谷遺跡・要害遺跡全景(北から)
　　熊谷遺跡・要害遺跡調査前全景
2　熊谷遺跡Ⅲ区と三刀屋町中心部(東から)
　　熊谷遺跡Ⅱ・Ⅲ区と木次町中心部(北から)
3　三刀屋熊谷２号墳出土重圏文鏡
　　三刀屋熊谷２号墳出土瑪瑙製勾玉
熊谷遺跡
図版１　熊谷遺跡調査前近景（Ⅰ区付近・南から）
　　熊谷遺跡調査前近景（Ⅱ区付近・南から）
図版２　三刀屋熊谷１号墳主体部検出状況（西から）
　　三刀屋熊谷１号墳主体部土層断面（東から）
図版３　三刀屋熊谷１号墳主体部遺物出土状況（南から）
　　三刀屋熊谷１号墳主体部完掘状況（北から）
図版４　三刀屋熊谷１号墳主体部完掘状況（北東から）
　　熊谷遺跡Ⅰ区トレンチ２土層断面（東から）
図版５　熊谷遺跡Ⅰ区トレンチ２土層断面（東から）
　　三刀屋熊谷２号墳第１主体部遺物出土状況（北東から）
図版６　三刀屋熊谷２号墳第２主体部遺物出土状況（東から）
　　三刀屋熊谷２号墳完掘状況（北から）
図版７　三刀屋熊谷２号墳完掘状況（南から）
　　熊谷遺跡Ⅰ区溝５付近検出状況（南から）
図版８　熊谷遺跡Ⅰ区頂部完掘状況（南から）
　　熊谷遺跡Ⅰ区完掘状況（南から）
図版９　熊谷遺跡Ⅱ区落とし穴状遺構２完掘状況（北西から）
　　熊谷遺跡Ⅱ区落とし穴状遺構１完掘状況（北から）

図版10　熊谷遺跡Ⅱ区土壙１完掘状況（北西から）
熊谷遺跡Ⅱ区溝７土層断面（西から）
図版11　熊谷遺跡Ⅱ区溝７完掘状況（西から）
熊谷遺跡Ⅱ区溝７完掘状況（北から）
図版12　熊谷遺跡Ⅱ区加工段完掘状況（北から）
熊谷遺跡Ⅱ区北側完掘状況（南から）
図版13　熊谷遺跡Ⅱ区加工段付近完掘状況（北から）
熊谷遺跡Ⅱ区南側完掘状況（北から）
図版14　熊谷遺跡Ⅲ区西側・遺構検出状況（東から）
熊谷遺跡Ⅲ区西側・完掘検出状況（東から）
図版15　熊谷遺跡Ⅲ区トレンチ28土層断面(北から)
熊谷遺跡Ⅲ区トレンチ107土層断面（北から）
図版16　熊谷遺跡Ⅲ区溝８付近完掘状況（西から）
熊谷遺跡Ⅲ区溝８土層断面（南から）
図版17　熊谷遺跡Ⅲ区溝８土層断面（南から）
熊谷遺跡Ⅲ区石垣状遺構検出状況（南から）
図版18　熊谷遺跡Ⅲ区石垣状遺構検出状況（東から）
熊谷遺跡Ⅲ区東側完掘状況(東から)
図版19　熊谷遺跡Ⅲ区石垣状遺構・石除去状況（東から）
熊谷遺跡Ⅲ区縦堀１完掘状況（北から）
図版20　熊谷遺跡Ⅲ区縦堀２完掘状況（北西から）
熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構４完掘状況（北から）
図版21　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構３完掘状況（南東から）
熊谷遺跡Ⅳ区土壙４調査状況（東から）
図版22　熊谷遺跡Ⅳ区土壙４完掘状況（南西から）
熊谷遺跡Ⅳ区完掘状況（西から）
図版23　三刀屋熊谷１・２号墳出土金属器・勾玉
熊谷遺跡Ⅰ区出土石器
図版24　熊谷遺跡Ⅰ区出土縄文土器
図版25　熊谷遺跡Ⅰ区出土弥生土器・土師器
図版26　熊谷遺跡Ⅰ区出土土師器・須恵器
図版27　熊谷遺跡Ⅱ区出土遺物
熊谷遺跡Ⅲ区出土遺物
図版28　熊谷遺跡出土墨書土器
熊谷遺跡出土墨書土器赤外線写真

要害遺跡

図版29　要害遺跡溝上層（南から）
　　要害遺跡溝上層（南東から）
図版30　要害遺跡溝検出状況（東から）
　　要害遺跡溝中層（東から）
図版31　要害遺跡溝完掘状況（西から）
　　要害遺跡溝完掘状況（東から）
図版32　要害遺跡溝西端土層
　　要害遺跡溝東端土層
図版33　要害遺跡溝南東部土層
　　要害遺跡道状遺構（東から）
図版34　要害遺跡落とし穴１（北から）
　　要害遺跡落とし穴２（西から）
図版35　要害遺跡落とし穴３（東から）
　　要害遺跡完掘状況（南から）
図版36　要害遺跡出土遺物

図版37　要害遺跡溝第２次遺構面検出土器
　　要害遺跡溝で画された丘陵斜面包含層検出遺物
図版38　要害遺跡溝黒色土層検出鉄製品
　　要害遺跡溝底部検出礫（一部）

第１章　調査に至る経過と発掘調査の経過

中国横断自動車道尾道・松江線は、松江都市圏と山陽地方を結び、ネットワークを形成することにより、沿線地域の産業振興や観光開発を促進するとともに地域経済の発展と活性化を図ることを目的に事業の計画がなされた。

この計画にともなう埋蔵文化財の発掘調査については、平成４年１月に建設省道路建設局から日本道路公団に対して松江・三刀屋間について調査開始の指示があり、その一環として同年４月17日付けで島根県教育委員会に埋蔵文化財の分布調査の依頼があった。そして、平成４年11月には日本道路公団に対して施行命令があり、平成５年９月には工事実施計画が認可された。その間、調査体制が整わないため分布調査が実施できない状態が続いていたが、平成６年３月になってやっと分布調査を実施し、全体の９割あまりを踏査した。

この調査結果をふまえ同年の６月と８月に道路公団と調査の打ち合わせを行った。この打ち合わせでは、今回の分布調査が500m幅を対象に踏査しているので、ルート確定後再度調査対象地を把握する必要があることや、調査事業の円滑化を図るために、用地買収、立木伐採等環境整備の充実を要望した。残りの分布調査は平成７年４月に完了し、４月28日付けで公団へ回答した。

同年４月には日本道路公団、県教育委員会、県土木部からなる埋蔵文化財調査連絡会が発足し、８月３日に第１回の連絡会を開催した。この会議では平成８年度から発掘調査に入ることを前提に用地買収や立木伐採、進入路、排土排水処理等の調査環境整備について協議を行った。この問題については、その後二回連絡会を行って調整し、宍道下倉～弘長寺間の4.6kmに存在する遺跡について平成８年度から調査を実施することが決定した。

これを受けて調査を円滑に進めるため、、作業員の確保、発掘現場における物件の確保、測量、掘削工事等の調査補助業務を社団法人中国建設弘済会島根県支部に委託するため、日本道路公団、社団法人中国建設弘済会、島根県教育委員会の三者による埋蔵文化財発掘調査覚え書きを平成８年３月26日に交わし、本格的に調査の準備に入ることとなった。

その後、玉湯町～宍道インター間について再踏査を数回行い、この区間に48余りの遺跡が存在していることが分かった。これらの遺跡の調査は平成８年度～10年度にかけて行ったが、平成８年度は３パーティで宍道町下倉～弘長寺間の20余りの遺跡、平成９年度は玉湯町湯町～林村にかけての８遺跡と宍道町内の残り遺跡11あまりを5.5パーティで行った。また、この調査と並行して宍道インターから国道につなぐ連絡道、及び松江道路から中国横断自動車道につながる連結部についても調査を行った。

平成11年度には宍道インター～三刀屋間の調査を中心に行い、宍道町内のインターチェンジ以西４遺跡を2.5パーティーで、加茂町内７遺跡を1.5パーティーで、三刀屋町と木次町で４遺跡を2.5パーティーで行った。また、この間に松江道路から中国横断自動車道につながる連結部の調査も行っている。

今回報告する遺跡は、中世の城跡と古墳を検出した三刀屋町下熊谷から木次町下熊谷にかかる熊谷遺跡、弥生時代の堀が見つかった三刀屋町下熊谷の要害遺跡である。

三刀屋町から木次町の調査は、平成11年４月より開始した。調査開始当初は、３遺跡に重なるイ

ンターチェンジ部分の調査量がその後の調査スケジュールに大きく影響すると考え、熊谷遺跡と要害遺跡のトレンチ調査を２パーティーで開始したが、三刀屋町給下の馬場遺跡部分の調査を優先したいとの道路公団側からの要望を受け、５月には馬場遺跡のトレンチ調査に１パーティーを回している。馬場遺跡については、平安時代前後を中心に縄文〜近世の良好な遺物包含層を確認し、直ちに全面調査を開始した。インターチェンジ部分のトレンチ調査では、要害遺跡で堀と考えられる遺構を確認。また、熊谷遺跡では墨書土器を採集したほか、戦国時代の山城の可能性が考えられた。木次町側の南に向かって延びる尾根上には、分布調査時には古墳の可能性があるマウンドがあり、下熊谷中遺跡としていたが、土砂流失でマウンドを失われており、トレンチ調査を行ったが遺構・遺物は残存していなかった。

熊谷遺跡について４調査区に区分し、５月13日より全面調査を開始し、三刀屋熊谷１・２号墳を検出、平成11年８月12日に蓮岡法障・渡邊貞幸両先生による調査指導を受け、同年８月30日に現地説明会を実施。約50名の見学者に公開した。その後に、城跡関係の遺構や落とし穴などを検出し、平成11年11月17日に現地調査を終了した。

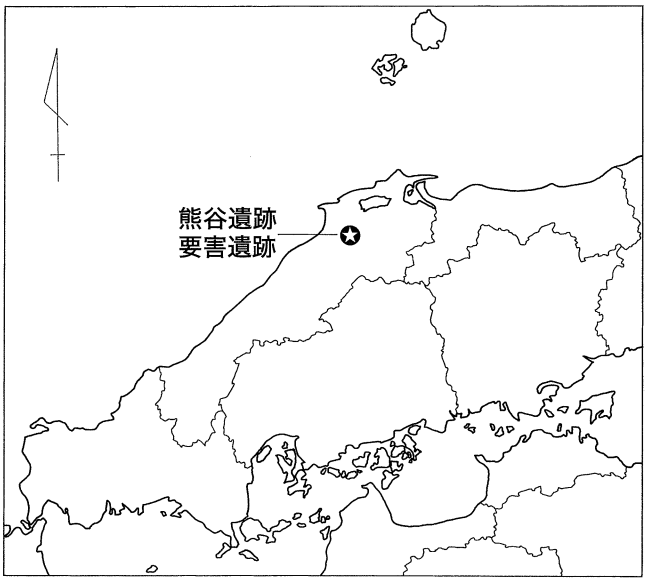
要害遺跡は、加茂町の土井・砂遺跡の現地調査の終了を受け、平成11年11月４日より全面調査を開始した。同年12月には、トレンチ調査時に山城の堀切と考えていた遺構が弥生時代に遡る可能性が出てきたため、同年12月27日に蓮岡法障先生、平成12年１月17日に田中義昭先生による調査指導を受けた。予想外に深い溝の掘削に手間取ったため、現地調査を終了したのは平成12年１月９日となった。

第２章　遺跡の位置と環境

熊谷遺跡（飯石郡三刀屋町下熊谷・大原郡木次町下熊谷）と要害遺跡（三刀屋町下熊谷）は、斐伊川と三刀屋川との合流地点から南南西に約２㎞の、中国山地に連なる丘陵地帯に所在し、東側に熊谷遺跡、西側には要害遺跡と並んで位置する。両遺跡の所在地を『出雲国風土記』（以下『風土記』と略す）の地名に当てはめると飯石郡熊谷郷にあたり、斐伊川を境界にして東側は大原郡の斐伊郷・来次郷に接する。付近の標高は 100m前後と決して高くはないが、地形は急峻である。斐伊川と三刀屋川の沖積作用によって形成された平野に突き出すような地形になっているため、眺望は非常に良い。遺跡内の最高所には標高 133.3mの三角点があるが、このような展望の開けたところからは、北方には斐伊川・三刀屋川の合流地点や『風土記』に「所造天下大神大穴持命、八十神を伐たむとして城を造りたまひき」として登場する城名樋山、西には中世に三刀屋氏の居城であった三刀屋じゃ山城や三刀屋尾崎城、東には木次の中心市街地を望むことができ、南側は三刀屋の中心市街地を経て中国山地の山並みが広がっている。三刀屋川を遡って松江と広島を結ぶ国道54号や、斐伊川に沿って広島県の比婆郡東城町に至る国道 314号、斐伊川を下って出雲市に至る主要地方道出雲－三刀屋線など、主要な街道の様子も手に取るように分かる。

この地域は古来、商業活動で栄えてきた。特に来次市庭（木次市場）は、奥出雲の「たたら」で生産された鉄の集散地であり、また慶安２年（1649）には松江藩によって出雲国唯一の紙座が開設されるなど、雲南地域の経済の中心を担った。この地域がこのような役割を果たせた要因として、この地が交通の要衝であったことを見逃すことはできない。前述したように、この地は主要街道が交わる地であるのに加えて、ＪＲ山陰本線とＪＲ芸備線を連絡するＪＲ木次線もこの地を経由している。道路網や鉄道網が整備される以前には、当然、斐伊川や三刀屋川の水運が活発に利用されてきた。この地域の歴史を振り返る上で、この地が陰陽連絡の要であったことは、欠かすことのできない事実である。

以下では、熊谷・要害両遺跡を中心とする地域の主な遺跡を紹介することによって、この地域の歴史を概観しておきたい。



第１図　熊谷遺跡・要害遺跡の位置

旧石器時代

この時期の遺跡は、三刀屋・木次両町内およびその周辺地域では、現在のところ、確認されていない。

島根県全体をみても旧石器時代の資料は少ないが、宍道湖・中海の周辺地域では、松江市の下黒田遺跡をはじめ、この時代に遡ることのできる遺跡が見つかりはじめている。雲南地域においても、今後の開発の進行等をきっかけに、旧石器時代の遺跡が発見される可能性は高いと

言えるだろう。

縄文時代

三刀屋町内では、三刀屋川流域の殿河内地区や乙加宮地区、飯石川流域の粟谷地区や多久和地区において、河岸段丘上に縄文時代の遺跡が確認されている。

このうち乙加宮地区には、宮内遺跡、槇原遺跡、浜遺跡がある。宮内遺跡、槇原遺跡で出土した土器片は中期から後期のものが中心だが、浜遺跡では早期後葉のものが数多く出土している。

多久和地区には、宮田遺跡、古殿遺跡、京殿遺跡、森谷川遺跡など、縄文時代の遺物を出土した遺跡が密集している。中でも、埋甕を２基出土した宮田遺跡は県指定史跡である。埋甕は乳幼児の埋葬に用いたと考えられ、ここでは後期末から晩期の大型の土器を倒立して使用しており、埋甕を取り囲むようにピットや立石をともなっている。その他、貯蔵穴（５穴）等が検出され、後期から晩期を中心とした多量の土器、磨石、石斧、石鏃、石錘等が出土している。

また六重地区の子安観音堂には、磨石、石斧、石棒が奉納されている（出土地は不明)。石棒の出土は、県内では斐伊川上流域など山間部で何例か報告があるが、稀なものと言える。

木次町内では、熊谷・要害遺跡から南南東に約10㎞の地点にある、平田遺跡が著名である。後期から晩期初頭の土器が大量に出土したが、岡山県の福田貝塚出土品と酷似した浅鉢や、鐘崎式土器など、山陽地方や北部九州の影響を強く感じさせるものも見られる。また、土器の出土状況等から埋甕が行われた可能性が指摘され、土壙も８基検出されるなど、縄文時代の墓制の一端を知る上で貴重な遺跡である。さらに大量の石鏃や石斧が剥片をともなって出土しており、この遺跡は石器の製作工房跡であったと考えられる。

弥生時代

三刀屋町内では宮内遺跡、浜遺跡、宮田遺跡など、木次町内では湯村地区の早稲田遺跡、本郷谷遺跡などが弥生時代の遺跡として知られている。しかし、縄文時代の遺跡に比べると数そのものが少なく、遺構が確認された例もなかった。雲南地域では、わずかに、仁多郡横田町の横田八幡宮に伝えられた銅剣（中細形銅剣Ｃ)、木次町内から出土したと言われる銅鐸（外縁付鈕Ｉ式）が注目される程度であった。

しかし、近年この様相にも変化が生じつつある。まず平成８年（1996）には、熊谷・要害遺跡の北約７㎞の加茂岩倉遺跡（大原郡加茂町）から銅鐸が39個も出土するという大発見があり、世間の注目を集めた。そして平成11年（1999）には、三刀屋・木次両町内では初めて、遺構をともなった弥生時代の遺跡の調査が２カ所で実施された。

一つは縄文時代の項で触れた、木次町の平田遺跡である。ここでは、前述した遺物や遺構を検出した区域の東側から、円形に近い多角形を呈した径8.8m～9.0mの竪穴建物跡１棟が見つかった。建物内からは鍛冶炉が４基検出され、鉄鏃やその未製品、板状や棒状の鉄片、鏨、砥石などが出土した。このことからこの建物は、鉄素材を鍛錬し、鏨を用いて鉄器を製作した工房として使われたものと考えられる。やはり平成11年に、これとほぼ同様の性格をもった建物群が、八東郡宍道町の上野Ⅱ遺跡で見つかったが、平田遺跡の鉄器工房跡は上野Ⅱ遺跡のものに比べてやや新しく、弥生時代の末から古墳時代初頭のものと考えられている。

もう一つは、本書で報告する三刀屋町の要害遺跡である。尾根の突端を濠によって切り離した、見張り台の一種を思わせる遺構を検出しており、時期は弥生前期末から中期と考えている。

古墳時代

斐伊川中流域は、出雲地方でも比較的早くから古墳の築造を始めた地域である。とりわけ熊谷・要害遺跡の北６㎞弱、大原郡加茂町神原の神原神社古墳は、副葬品に景初三年銘の三角縁神獣鏡を持っていたことで名高く、古墳自体も県内最古級の築造と考えられている。神原神社古墳から南東約600mのところには平成11年に調査が行われた土井・砂遺跡があり、ここには前期の方墳が６基存在する。中でも土井・砂１号墳は、古墳の副葬品としては県内で初めての破砕鏡が出土し、注目される。三刀屋町内では給下の松本古墳群に前期古墳が存在する。このうち松本１号墳は、全長約50mの前方後方墳である。埋葬施設は後方部に粘土槨が２基、前方部からは土器蓋土壙が１基検出された。副葬品には、斜縁神獣鏡の他に、鉄剣、刀子、鉄針、ガラス小玉などがある。墳頂部には土師器の壺や高坏などが供献されていたと思われる。松本３号墳は地形測量が行われただけだが、全長52mの前方後方墳である。１号墳とは異なり前方部がバチ形に開いているので、１号墳に先行するものと考えられる。これらはともに、この時代に斐伊川中流域を支配した首長の墓であろう。木次町では斐伊中山古墳群が注目される。斐伊中山１号墳は試掘と地形測量が行われたのみだが、全長約50mの前方後円墳である可能性がある。また、斐伊中山２号墳は中心となる埋葬施設に排水施設を持ち、割竹形木棺には細線式鳥文鏡や鉄製武器が副葬されていた。斐伊中山３号墳、13〜16号墓も前期の小規模な古墳である。

一方中期の古墳は、この地域では確認、調査された例がほとんどない。熊谷・要害遺跡の南側の尾根続きにあたる三刀屋町三刀屋の地王砦跡は、その形状や立地より中世の城跡と考えられ、実際『雲陽軍実記』や『陰徳太平記』によれば、このあたりは大内氏と尼子氏、毛利氏と尼子氏との古戦場であったらしいが、ここからは、古墳時代前期から中期のものと推測される鉄製品（鑿、鎌、手斧）が出土している。この丘陵上にかつて古墳が築かれ、これらの鉄製品は、その副葬品だった可能性がある。この周辺から、かつて古鏡や勾玉が出土したこともあったという。

この地域で確認されている古墳のほとんどが、後期に属する。このうち、内部主体が知れるのは松本４号墳と三刀屋町上熊谷の岩広古墳で、ともに横穴式石室を持つ。松本４号墳には陶硯など、岩広古墳には馬具などが副葬されていた。横穴墓も数多く存在し、三刀屋町では20群、木次町では10群を数えることができる。その形態のほとんどは、玄室の平面プランが縦長長方形、断面が三角形のテント形で、妻入りであり、この形態は斐伊川中・上流域の奥出雲地方に広く分布するものである。副葬品も等質的であるが、三刀屋町殿河内の太田横穴群の２号穴に馬具が、三刀屋町中野の東下谷横穴群の４、５号穴にはそれぞれ大刀が、木次町寺領の平ヶ廻横穴墓には金銅装刀子が副葬されていたのが注目される。その他、三刀屋町内では神代横穴、神代下廻横穴、森谷横穴群、粟谷横穴群など、木次町内では早稲田横穴群、中谷奥横穴群などがあげられる。

奈良・平安時代

前述のように、『風土記』によれば、この地域は、斐伊川を境に東側が大原郡、西側が飯石郡に属している。大原郡の郡家は斐伊郷に置かれたが、現在のＪＲ木次駅の北方約 500mの地点と推定される。『風土記』から寺院関係の記述を見ると、出雲国には「教昊寺」と10カ所の「新造院」があるが、斐伊郷には新造院が二つ存在した。一つは「郡家の正南一里なり。嚴堂を建立つ。僧五躯あり。大領勝部臣蟲麻呂が造りし所なり」とあるが、現在の木次駅付近に推定され、「塔の石」と呼ばれる礎石と考えられる石がある。もう一つの新造院の記事には「郡家の東北一里なり。嚴堂を

建立つ。尼二躯あり。斐伊郷の人、樋印支知麻呂が造る所なり」とあり、その推定地から、やはり礎石と思われる石が出土している。

一方、飯石郡の郡家は多禰郷に置かれた。これは現在の掛合町掛合の郡地区にあたり、三刀屋は一見すると飯石郡の中心から外れているようにも見える。しかし『風土記』時代の飯石郡における現在の三刀屋町域の位置づけを考えてみると、大いに重要性が認められる。多久和地区にある飯石神社は、伊毘志都幣命を祭神としているが、その伊毘志都幣命が天降ったとされる巨石をそのまま御神体とするなど、非常に古い時代の信仰の形態をそのまま現代に伝える神社である。この神社は飯石郡や飯石郷という地名の由来になった神社であり、『風土記』はもちろん『延喜式』にも記載される古社である。また松本古墳群のごく近くには、『風土記』に御門屋社、『延喜式』には三屋神社と記載される古社、三屋神社がある。この神社を中心とする一帯が三屋郷で、正倉が置かれていた。さらに『風土記』には、飯石郡熊谷郷に軍団が置かれたと記載されている。軍団とは律令の軍防令に規定された軍事組織で、平時には訓練を積んで非常時に備え、戦時には非常編成をとって防衛にあたった。熊谷軍団は飯石・仁多・大原各郡の兵士を管下に置いた。出雲国では他に、意宇郷と神門郷に軍団が置かれたという。熊谷軍団跡は、三刀屋川と斐伊川の合流地点をひかえた丘陵上に推定され、今回調査した熊谷遺跡と部分的に重なっている。平成10年、熊谷軍団推定地の一部（熊谷遺跡の東側にあたる）で島根県教育委員会が発掘調査を行ったが、充分な成果は得られていない。

奈良時代から平安時代にかけては、この地域にも本格的に仏教文化が流入してくる。三刀屋町の給下の峯寺弥山には、峯寺（真言宗御室派）がある。斉明天皇４年（658)、修験道の開祖である役小角の開基と伝えられる。また、三刀屋町乙加宮の鍋山には、天平年間（729～ 749）に行基の開山で、聖武天皇の勅願寺との寺伝をもつ禅定寺（天台宗）がある。両寺院とも、出雲地方屈指の古刹であり、『風土記』にこれらの寺院についての記載はないが、峯寺弥山は「伊我山」、鍋山は「奈倍山」として登場する。木次町内では、寺領と宇谷の境界に伝室山寺跡があり、平安時代には山岳仏教で栄えたという。これらの寺院では何れも、盛事には七堂伽藍を整え坊舎四二院を数える偉容を誇っていたと伝えられている。さらに斐伊中山古墳群にほど近く、「城名樋山」に隣接する妙見山遺跡からは、尾根の頂部より９～12世紀の堀立柱建物跡が計６棟検出され、土師質土器等の遺物が大量に出土した。この遺跡では、仏具など祭祀に直接つながる遺物は確認されなかったが、穿孔土器や灯明皿、あるいは飾り釘等が出土したことなどから、奈良時代後期から平安時代の山岳信仰にかかわる祭祀遺跡の可能性が強い。

また、木次町平田の家の上遺跡では、配石遺構から、土馬や手づくね土器、土玉などが出土している。７～８世紀の、水辺の祭祀に関係するものと考えられる。

さらに、三刀屋町給下の馬場遺跡では、平安時代後期の墓が見つかっている。この墓は、長さ約４m、幅約２mと大規模で、底には礫が敷きつめてあり、副葬品として鉄刀一振り、水晶製の丸玉１点、水晶製や碧玉製の平玉20点などをともなっている。同時に、奈良時代から鎌倉時代を中心とする多数の土器類、奈良時代から江戸時代にかけての建物跡が合計５棟見つかり、長期にわたって人の生活の場になっていたことが明らかになった。墓の規模や構造、副葬品ばかりでなく、集落と墓が隣接していたことも注目に値する。

鎌倉・室町時代

承久３年（1221)、承久の乱の戦功を賞されて、越後国（新潟県）の住人諏訪部助長（扶永）が三刀屋郷地頭職に補任された。因みに「ミトヤ」に「三刀屋」の文字があてられたのは、この時の関東下知状（三刀屋家文書）が初見である。

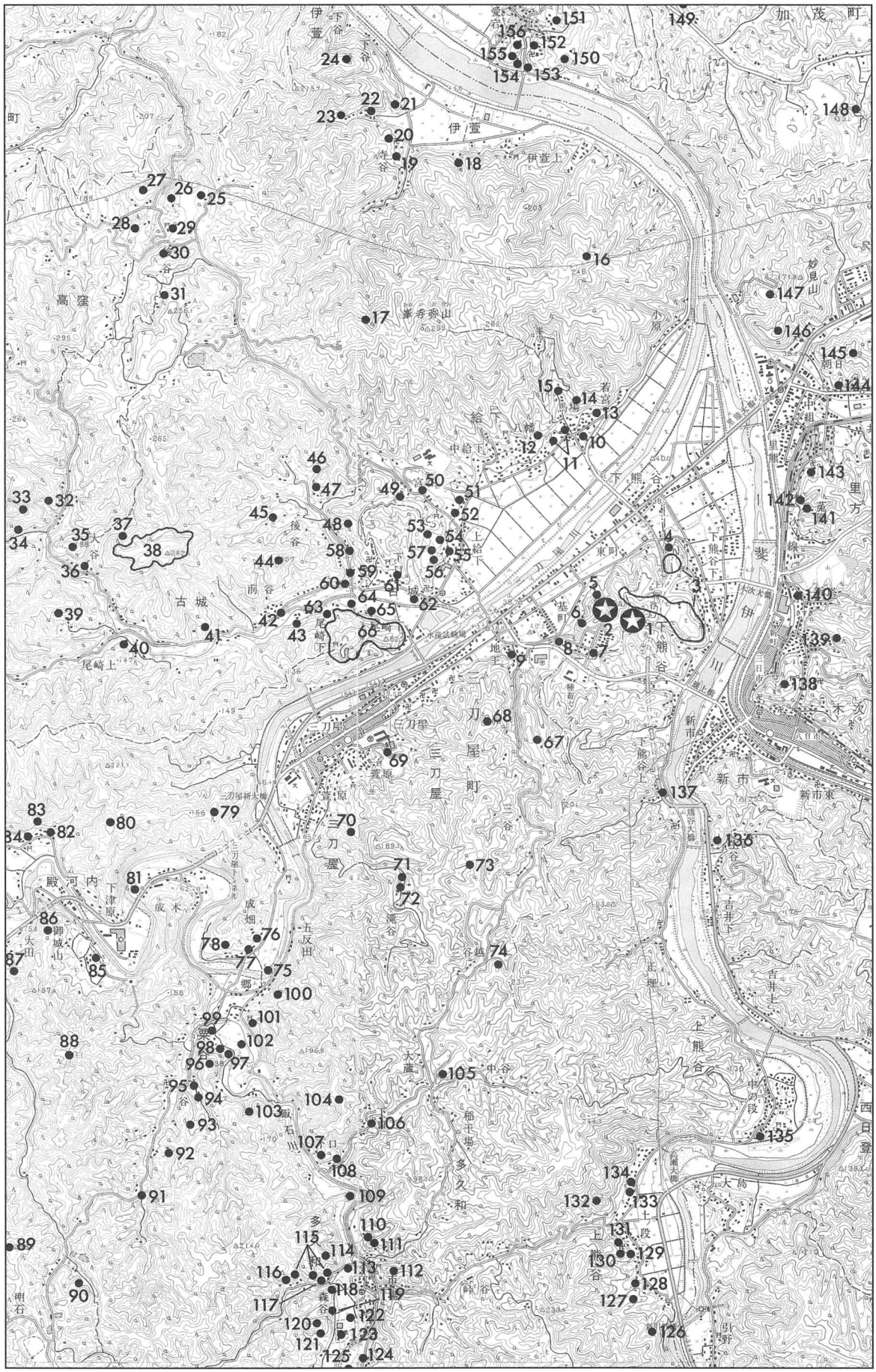
諏訪部氏は清和源氏の一族で、信濃国を中心に伊豆、甲斐、遠江などに勢力をもつ豪族であり、いわゆる新補地頭としての任命であった。諏訪部氏は本質的に東国御家人であるから、地頭に補任されてもすぐに三刀屋に赴いたかどうかは疑問であるが、やがてこの地に深く根を下ろし、地名をとって三刀屋氏を名乗るようになる。その本拠は当初、後谷の元屋敷城跡に置かれたようである。その構造は、後にじゃ山城が築かれる山塊から東に伸びる尾根を深い掘切で切断し、先端に３段の削平段を設けたものである。最下段の削平面は特に広く、そこには居館が設けられていた可能性が指摘されるが、このような築城の手法には鎌倉期の特徴が見られる。

その後、南北朝の動乱期を巧みに切り抜けた三刀屋氏は、三沢氏らと並んで出雲の有力国人衆に成長してゆく。観応の擾乱に際して三刀屋氏は、概ね足利直義・直冬側に従っている。その中で、観応２年（1352）９月、諏訪部信恵が三刀屋郷内石丸城に立て籠もって挙兵した記録がある。この石丸城とはじゃ山城の別称と考えられ、元屋敷城に代わって三刀屋氏の根城としての機能を果たすようになったものである。じゃ山城は標高 242.5mの「じゃ山」に設けた４つの郭を掘切、竪堀、土塁等で囲み、二つの天水池を設けている。周囲には大谷砦や中山砦、元屋敷城や後の尾崎城等が配され、じゃ山城の主要な砦群を構成していたと思われる。西の尾根を切断する掘切には、２条の畝が平行して築かれ、さらに各畝の外側には長円形の穴がそれぞれ４穴穿たれている。このような畝堀り構造は、出雲地方には近隣も含めて確認された例がない。じゃ山城跡の出土遺物は、中国製青磁碗を含む14～16世紀前半のものである。

戦国時代になると、大内氏と尼子氏、毛利氏と尼子氏の抗争の本格化にともない、あるいは流通経済の発展にともない、交通の要衝である三刀屋の重要性は高まっていく。それに対応して三刀屋氏は、根城を、じゃ山城から三刀屋川に臨んだ尾崎城に移す。三刀屋氏は初め尼子氏に従って出雲十旗の一つに数えられるが、永禄５年（1562)、毛利氏による尼子氏総攻撃の直前に、三沢氏らとともに毛利方に転じる。出雲国の支配者は尼子氏から毛利氏、多賀氏、堀尾氏と変遷し、その中で三刀屋氏も天正16年（1588）頃に領地を改易されたが、尾崎城の重要性に変化は生じず、特に堀尾氏はここを出雲西部の要と考え大改修を施した。尾崎城は結局、元和元年（1615)、一国一城令の発令によって廃城となった。尾崎城の基本的な縄張りは戦国時代末に由来するものの、このような経緯から、出雲地方に散見される山城とは異なり、石垣を多く用いること、本丸に築かれた櫓台の構築法、居館を城郭内部に設けることなど、近世的色彩を併せ持っている。なお尾崎城には、標高ほぼ 100mの等高線に沿って、用水路が掘削されている。この用水路は、尾崎城の西方、約３㎞の古城川水系から引かれ、尾崎城の主郭近くまで達しており、総延長 は6.4㎞に及ぶ。「殿井手」と呼ばれるもので、この用水路の存在も尾崎城の大きな特徴である。

その他、木次町内では、宇山氏の宇山城（日登城)、広田氏の霞龍山城などがある。

また、三刀屋町多久和の古殿遺跡では、建物の礎石と思われる自然石が多数出土し、同時に南宋伝来の青磁碗や白磁碗、銅製の飾金具などの遺物が得られた。鎌倉時代後半から南北朝期のものと推定され、付近の多久和城主の多久和氏（目黒氏）との関係が注目される。



第２図　熊谷遺跡・要害遺跡と周辺の遺跡

地図番号	遺　跡　名	種　　別	地図番号	遺　跡　名	種　　別
1	熊谷遺跡	古墳・城跡	79	大櫃山城跡	城跡
2	要害遺跡	城跡（弥生時代の溝を含む）	80	下殿河内城跡	城跡
3	熊谷軍団跡	軍団跡	81	殿河内煉瓦工場窯跡	窯跡
4	要害砦	城跡	82	永晶寺跡	寺院跡
5	要害宅裏横穴	横穴	83	清水荒神塚遺跡	鏡出土地
6	要害横穴群	横穴	84	清水十王堂跡	古墓・寺院跡
7	要害の首塚	古墓	85	殿河内遺跡	住居跡
8	地王砦跡	城跡	86	御城山城跡	城跡
9	地王横穴	横穴	87	太田横穴群	横穴
10	馬場遺跡	集落・古墓	88	高丸砦群	城跡
11	大門口遺跡	散布地	89	陣高丸城跡	城跡
12	坂中横穴	横穴	90	札場道尾鈩跡	製鉄遺跡
13	若宮跡	神社跡	91	城木谷鈩跡	製鉄遺跡
14	若宮古墳	古墳	92	かいろく遺跡	散布地
15	峯寺石塔群	古墓	93	粟谷谷横穴	横穴
16	峯寺山要塞群	城跡	94	城ノ尾下ノ段遺跡	散布地
17	宮谷上砦跡	城跡	95	金井子鈩跡	製鉄遺跡
18	中屋谷古墓	古墓	96	粟谷城跡	城跡
19	醍醐墓古墓	古墓	97	大年横穴群	横穴
20	堀ノ内砦	城跡	98	法尺寺跡	寺院跡
21	鍛冶屋遺跡	製鉄遺跡	99	大年経塚	経塚
22	割田古墓	古墓	100	不動堂鈩跡	製鉄遺跡
23	俵谷たたら跡	製鉄遺跡	101	粟谷横穴群	横穴
24	伊萱城跡	城跡	102	粟谷遺跡	散布地
25	古山砦跡	城跡	103	カナクソ鈩跡	製鉄遺跡
26	段家の上古墓	古墓	104	梅坊砦（寺院）跡	城跡
27	苗代迫古墳	古墳	105	大日鈩跡	製鉄遺跡
28	蓮池古墳	古墳	106	道の下鈩跡	製鉄遺跡
29	後谷古墳	古墳	107	大倉口五輪塔	古墓
30	壁の内古墓	古墓	108	大倉口横穴群	横穴
31	蛇ノ原宝篋印塔	古墓	109	清名五輪塔群	古墓
32	面田上古墓	古墓	110	王神谷口遺跡	散布地
33	鐘撞堂砦	城跡	111	大神谷横穴	横穴
34	石峠権現跡	寺院跡	112	多久和城跡	城跡
35	大谷砦	城跡	113	宮田遺跡	散布地
36	枝の前古墓	古墓	114	法泉寺跡	寺院跡
37	石曲り奥古墓	古墓	115	森谷横穴群	横穴
38	三刀屋じゃ山城跡	城跡	116	森谷鈩跡	製鉄遺跡
39	鈩谷鈩跡	製鉄遺跡	117	森谷川遺跡	散布地
40	尾崎神子ヶ畑古墓	古墓	118	託和神社跡	神社跡
41	金屎鈩跡	製鉄遺跡	119	古殿遺跡	散布地
42	丸山遺跡	散布地	120	古殿古墳	古墳
43	枇杷垣古墓	古墓	121	古殿今宮古墳	古墳
44	中山砦	城跡	122	京殿遺跡	散布地
45	元屋敷城跡	城跡	123	飯石小学校グランド遺跡	散布地
46	梅窓院旧跡	寺院跡	124	飯石神社遺跡	散布地
47	堂床古墓	古墓	125	飯石神社上遺跡	散布地
48	久円寺上古墓	古墓	126	後の谷鈩跡	製鉄遺跡
49	宮谷遺跡	散布地	127	善王寺跡	寺院跡
50	高丸遺跡	散布地	128	善王寺横穴	横穴
51	上給下遺跡	散布地	129	林迫荒神古墓	古墓
52	龍王遺跡	散布地	130	熊谷山経塚	経塚
53	給下の殿様墓と同安寺跡	古墓・寺院跡	131	上熊谷蛇山城跡	城跡
54	一宮横穴群	横穴	132	上熊谷秋葉山砦跡	城跡
55	同安寺遺跡	散布地	133	岩広製鉄遺跡	製鉄遺跡
56	松本古墳群	古墳群	134	岩広古墳	古墳
57	松本１号墳	古墳	135	岩佐古墳	古墳
58	古城八幡宮跡	神社跡	136	下吉井横穴群	横穴
59	中屋垣内遺跡	散布地	137	深谷古墓	古墓
60	コン屋垣内遺跡	散布地	138	秋葉山城跡	城跡
61	八万坊遺跡	散布地	139	案内横穴群	横穴
62	引地遺跡	散布地	140	斐伊郷新造院跡	寺院跡
63	啓星谷遺跡	散布地	141	明徳寺横穴群	横穴
64	御蔵前遺跡	散布地	142	明徳寺跡	祭祀遺跡
65	御蔵前館推定地	館跡	143	斐伊郷新造院跡	寺院跡
66	三刀屋尾崎城跡	城跡	144	里方横穴群	横穴
67	三谷古墓	古墓	145	斐伊中山古墳群	古墳
68	三谷砦群	城跡	146	城名樋山城跡	城跡
69	宮垣古墳	古墳	147	妙見山遺跡	祭祀遺跡
70	萱原鈩谷たたら	製鉄遺跡	148	小宮谷製鉄跡	製鉄遺跡
71	滝谷遺跡	集落跡	149	高麻神社跡	神社跡
72	滝谷古墓	古墓	150	長谷寺上へ砦跡	城跡
73	滝谷槙山たたら跡	製鉄遺跡	151	杉原窯跡	窯跡
74	長戸呂鈩谷鈩跡	製鉄遺跡	152	長谷寺古墓	古墓
75	椿平荒神遺跡	散布地	153	御代赤瓦組合窯跡	窯跡
76	成木宮前石塚	古墓	154	御代窯跡	窯跡
77	成木八幡宮跡	神社跡	155	三代古墳	古墳
78	宮上ミ荒神塚古墳	古墳	156	矢ノ尻古墓	古墓

第１表　周辺の遺跡一覧

江戸時代

『風土記』に「飯石小川。源は郡家の正東一十二里なる佐久禮山より出で、北に流れて三屋川に入る。鐵あり」と記されるなど、古来より、この地域では盛んに製鉄が行われてきたと思われる。しかし、奈良時代に比定されるほど古い遺構は未確認である。製鉄遺跡の中には、同町中野の六重峠鈩跡など中世に遡る可能性があるものも点在しているが、製鉄遺跡の多くは近世のものであり、三刀屋町六重の金蔵鈩跡などは近世の大規模な製鉄遺跡として知られる。

木次町下熊谷には、深谷古墓がある。地蔵菩薩像を半肉彫にした石造物２基や、墓壙と思われる４つの掘り込みなどからなるもので、18世紀前半の墓所と考えられる。

【参考文献】

「三刀屋・神代横穴」『島根県埋蔵文化財調査報告書　第Ⅰ集』1969　島根県教育委員会

『京殿遺跡－調査概報－』1979　三刀屋町教育委員会

『太田横穴群発掘調査報告書』1982　三刀屋町教育委員会

『三刀屋城跡調査報告書－Ⅰ－』1982　三刀屋町教育委員会

『三刀屋城跡調査報告書－Ⅱ－』1983　三刀屋町教育委員会

『三刀屋城跡調査報告書－Ⅲ－』1984　三刀屋町教育委員会

『東下谷横穴群発掘調査報告書』1984　三刀屋町教育委員会

『木次深谷古墓発掘調査報告書』1984　木次町教育委員会

『分布調査報告書　三刀屋町の遺跡Ⅰ　－三刀屋・一宮地区－』1988　三刀屋町教育委員会

『詳細分布調査報告書　三刀屋町の遺跡Ⅱ　－飯石・中野地区－』1989　三刀屋町教育委員会

『詳細分布調査報告書　三刀屋町の遺跡Ⅲ　－鍋山地区－』1990　三刀屋町教育委員会

『詳細分布調査報告書　三刀屋町の遺跡Ⅳ　－鍋山地区（禅定寺周辺）－』1991　三刀屋町教育委員会

『要害の首塚・地王砦跡発掘調査報告書』1989　三刀屋町教育委員会

『平成元年度予防治山事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－三刀屋尾崎城跡－』1990　三刀屋町教育委員会

『古代の出雲を考える７　松本古墳群　―斐伊川流域の前期古墳をめぐって―』1991　出雲考古学研究会

『神代下廻横穴発掘調査報告書』1995　三刀屋町教育委員会

『発掘調査報告書　斐伊中山古墳群－西支群－』1993　木次町教育委員会

『妙見山遺跡発掘調査報告書』1995　木次町教育委員会

『平田遺跡　木次町文化財調査報告書第４集』1997　木次町教育委員会

『家の上遺跡・石壷遺跡　尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書１』1998　木次町教育委員会

『島根県中近世城館跡分布調査報告書〈第２集〉出雲・隠岐の城館跡』1998　島根県教育委員会

「平田遺跡（第Ⅲ調査区）発掘調査現地説明会資料」1999　木次町教育委員会

「中国横断道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査　上野Ⅱ遺跡現地説明会資料」1999　島根県教育委員会

「中国横断道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査　馬場遺跡現地説明会資料」1999　島根県教育委員会

第3章　熊　谷　遺　跡

第１節　熊谷遺跡の位置と周囲の状況

熊谷遺跡は、斐伊川と三刀屋川の合流点を北東に見下ろす標高約130mの丘陵上に立地している。丘陵頂部が町境となっており、北と北東に延びる尾根を含む遺跡の大半が飯石郡三刀屋町下熊谷に、最高所から南側の斜面が大原郡木次町下熊谷となっている。また、三刀屋町側で、北西に延びる尾根は、同時に調査を行った要害遺跡である。また、調査時には消滅していたが、元々は西側に延びる尾根があり、地王砦跡として三刀屋町教育委員会が1988年に発掘調査を行っており、古墳に伴うと考えられる鉄製品などを採取している。地王砦跡の鉄製品は、溝などの遺構近くからまとまって出土しており、後述する三刀屋熊谷１・２号墳と同様の、尾根筋を溝で切断しただけの小規模な古墳が存在したものと考えられる。遺跡最高所は、周囲に眺望が開けており、東に木次町の中心部を、西に三刀屋町の中心部を見下ろす。また、ＪＲ木次線や国道54号線など、山陰山陽を結ぶ主要交通路が眼下を通り、古代から現代に至るまで交通の要衝であったことが伺われる。今回の調査では、丘陵最高所及び、東と北に延びる尾根筋を全面調査対象地として、４調査区に区分し、約4,500㎡について全面調査を実施した。

熊谷遺跡付近は、『出雲国風土記』記載の「熊谷軍団」の推定地として知られている。熊谷軍団は、『出雲国風土記』に記載の見られる古代の軍事施設である軍団で、『出雲国風土記』によれば、飯石郡熊谷郷に置かれている。熊谷軍団は飯石郡に置かれているが、現在の推定地に中心は大原郡木次町側である。熊谷遺跡付近は郡境が移動しており、現状では、熊谷軍団推定地は、大原郡木次町と飯石郡三刀屋町にまたがって存在している。古代の軍団は、通常郡名を冠すのが普通であり、長野県屋代遺跡群出土の木簡に郡名を冠さない「信濃軍団」（註１）の記載が有るほか、飯石郡の熊谷軍団が数少ない例外となっている。かつて、木次町下熊谷地内において水源タンクを建設した際に須恵器類が出土し、付近に平坦面が見られることから、その周辺と後背地を熊谷軍団推定地とされているが、実体は判明していない。平成10年５月には、島根県教育委員会によって付近の調査が行われているが、軍団の存在をうかがわせるような明確な成果は得られなかった。ただし、全国的にも確実に軍団の遺構と確定された遺跡はなく、どのような遺構・遺物が出た時に軍団と言えるかが判っていない。熊谷軍団推定とする範囲は、今回調査を行った熊谷遺跡の最高所である第Ⅲ調査区などを含んでおり、軍団遺構の検出が期待された。

熊谷遺跡西側は、調査時には既に地王住宅団地となっていたが、以前は西側へも尾根が延びており、要害の首塚・地王砦跡として三刀屋町教育委員会により昭和63年に発掘調査（註２）が行われている。付近は、三刀屋町と木次町を結ぶ県道稗原木次線が通っており、地王峠と呼ばれている。『雲陽軍実記』によれば永禄６年（1563年）に付近で合戦があったことになっていることから、中世には既に交通路として存在していたと思われる。また、木次町側には「勝負廻」などの字名も見られ、付近が古戦場であったことが判る。「要害の首塚」は、その戦死者を弔ったものとの伝承があり、発掘調査が行われたが、首塚に直接関わると考えられる遺物は出土していない。

地王砦跡は要害の首塚から西へ延びる丘陵上の遺跡で、溝と土壙を検出している。出土遺物には古墳時代と考えられる鎌・斧・ノミ、近世と考えられる土師器小皿、時期不明の碁石・砥石などが

ある。古墳時代の鎌・斧・ノミは溝や土壙を背にした尾根状でまとまって出土していることから付近に古墳が存在していたことが推定され、また、付近からは、かつて古鏡や勾玉が出土していたとされている。また、碁石は、三刀屋町給下の馬場遺跡土壙墓出土の平玉との関連性が考えられるものである。

熊谷遺跡西側の要害遺跡から北に延びる尾根の先端付近には、要害宅後横穴墓の存在が知られている。１穴が残存しているが、付近に更に数穴があったと言われており、須恵器甕が採集されている。更に西側には、いずれも土砂崩れによる発見であるが、要害横穴群・地王横穴の存在が知られており、平野部を望む丘陵先端には横穴墓が多く在ったようである。

第２節　調査区の設定とトレンチ調査の概要（第3図）

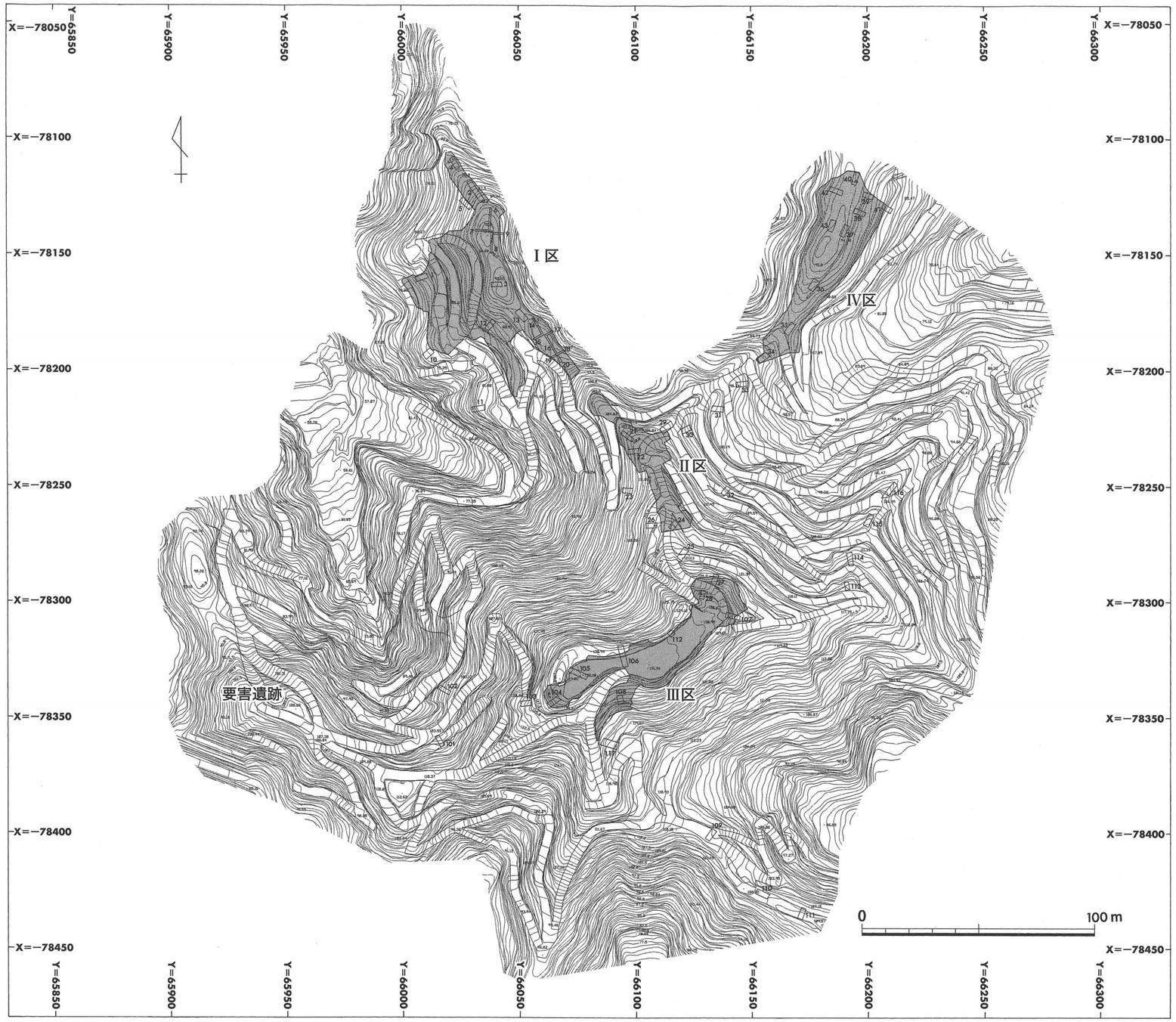
分布調査時に括られた熊谷遺跡の対象面積は約32,000㎡に及んでおり、合計５４本のトレンチを設定して遺構・遺物の広がりを調査した。また、遺跡南側に下熊谷中遺跡として別の遺跡が括られており、同時にトレンチ調査を行った。その結果、下熊谷中遺跡を含む南側の尾根筋は、地形の改変が著しく、遺構・遺物の残存は認められなかった。また、東へ延びる２本の尾根の内、南側の尾根からは、遺構・遺物が見られなかった。よって、この２箇所は、全面調査対象地から除外し、残る丘陵頂部、北へ延びる尾根、東へ延びるものの内の北側の尾根を、全面調査対象地とし、４調査区に区分して、約4,500㎡について掘削を行った。

熊谷遺跡の位置する丘陵は、花崗岩で形成されており、場所によっては、降雨時の土砂の流失が見られる。山頂付近は、堅い花崗岩の岩盤や礫を含む土層が見られるが、要害遺跡を含む北斜面は全て、花崗岩の風化した砂層となっており、その上に黒色土が多量に堆積した状態となっていた。また、南側斜面は粘性の高い赤土の地山となっており、ちょうど町境付近から大きく土質が変わっている。

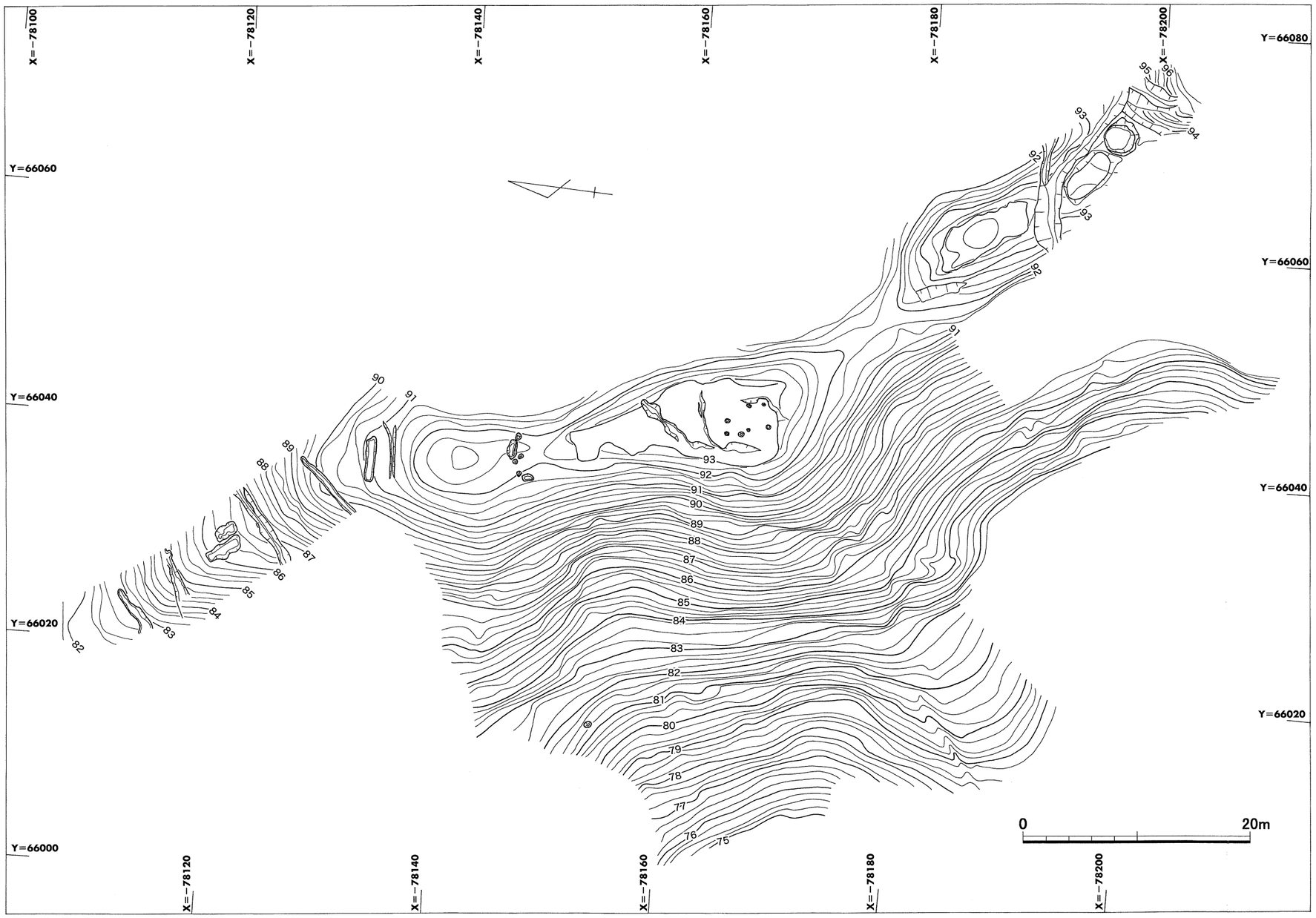
トレンチ調査はⅠ区から開始し、遺跡最高所であるⅢ区へ向かった。Ⅲ区付近を掘削中の５月10日には、南側斜面である下熊谷中遺跡付近も同時並行で調査を行っている。その後、東側に延びる２本の尾根に調査を移し、Ⅳ区付近のトレンチ調査中である５月13日からⅠ区の全面調査を開始した。

Ⅰ区として調査を行った北へ延びる尾根の先端付近は、小規模な平坦面が連続しており、トレンチ調査では土師器小片が出土した。尾根の頂部にはマウンド状の高まりが２箇所で見られ、古墳の可能性が考えられたが、トレンチでは、それを示す明確な痕跡は得られなかった。また、西斜面には黒色土が厚く堆積しており、その黒色土中から須恵器などの遺物少量が出土している。Ⅰ区では、調査開始当初の測量中に墨書土器１点を表面採取している。伐木処理のための重機の搬出路上で採取したものであるため当初の位置は不明であるが、それより上方は、尾根筋しか無く、付近に奈良時代の遺構があったものと想像された。

Ⅱ区とした部分は、遺跡最高所からⅠ区に向かって延びる尾根が東へ向かう尾根と枝分かれする部分と、その周辺である。狭い尾根筋を中心とした部分で、尾根の両側は急傾斜となっている。トレンチ調査では遺物は出土していないが、表面観察で平坦面尾根筋の切断痕跡と思えるような不自然な地形が観察された。また、トレンチ断面の一部に盛り土と考えられる土層が見られ、後述するⅢ区との関係から戦国時代の山城の遺構の一部である可能性が考えられた。



第3図　熊谷遺跡地形測量図（調査前）（S＝1：2000）



第４図　熊谷遺跡Ⅰ区遺構配置図（S＝1：600）

遺跡最高所付近は、広大な平坦面となっており、周囲の斜面を含めⅢ区とした。平坦面自体は伐木の搬出時に造成されたものと考えられたが、トレンチでは、造成土下面に凹凸が見られることから、造成土の下に旧地形が残っている部分も多いものと判断した。Ⅲ区東側に設定したトレンチでは、小石を使用して平坦面を造成した部分や、版築状の土層断面が観察された他、付近の眺望が開けていることから、戦国時代の山城の遺構が残存しているものと思われた。

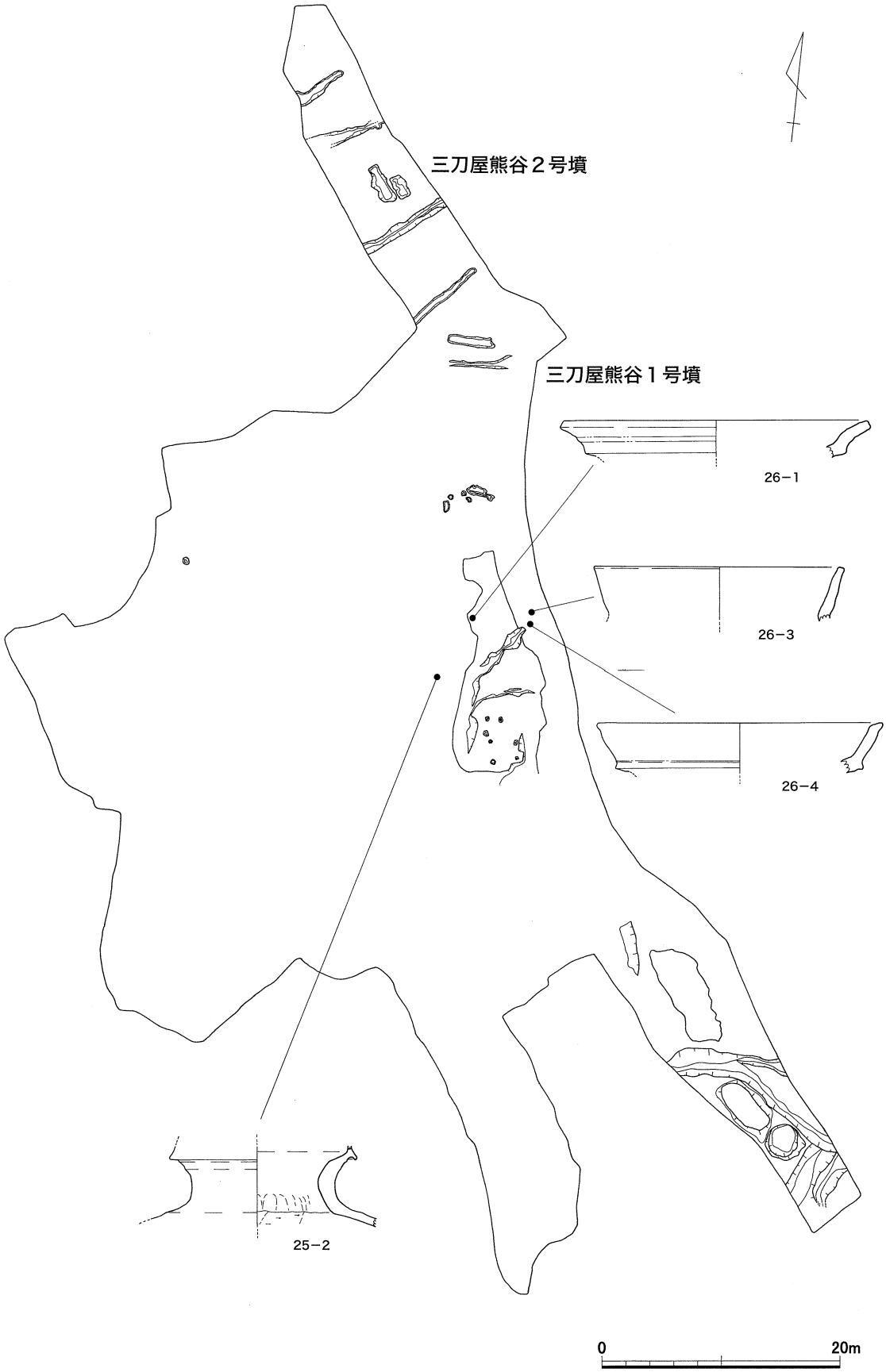
Ⅱ区から枝分かれして東に向かって延びる尾根をⅣ区とした。尾根筋の北側は急斜面となっていたが、南側はなだらかな斜面が続いており、畑の造成によると思われる２～３段の段差が明瞭に見られる。尾根上は小さな凹凸で分断された小規模な平坦面が連続したような地形になっており、畑として利用されていたようである。尾根頂部のトレンチでは、道と考えられる窪みを検出しただけで、遺物は出土しなかったが、南側斜面で少量の須恵器甕片を検出している。尾根上の凹凸が畑としてはやや不自然に思われた事や、斜面から須恵器小片が出土していることから、尾根上に古墳があるものと考えられた。

Ⅳ区と平行して東に延びる南側の尾根には、４本のトレンチを設定して掘削したが、後世の地形の改変が著しく、遺構・遺物の残存は見られなかった。この尾根は、調査区外東まで長く延びており、尾根上には小規模な平坦面も見られる。また、南東側下方には熊谷軍団推定地の中心的な平坦面がある。

第３節　Ⅰ区の調査

Ⅰ区は、標高約90mの北へ延びる尾根と、その西側斜面である。西側にはほぼ同じ高さで要害遺跡の丘陵が延びており、北側には三刀屋川を挟んで、峯寺が見える。調査開始時には、伐木搬出のための重機が移動した痕跡が多く残っており、降雨時にはかなりの土砂が流失するような状況であった。調査開始直後に、西側斜面の重機の通路上、標高約80mの地点で須恵器墨書土器１点を表採している。前述の通り、尾根上にはマウンド状の高まりがあり、更に北へ延びる尾根筋の先端近くには３段の明瞭な平坦面が見られた。その先の尾根先端は、土砂崩れによって崩壊しており、花崗岩の風化した砂層が露出している状態となっていた。西側斜面は花崗岩の風化による砂層の上に黒色土が厚く堆積した状態になっており、黒色土は、下方に向かうほど厚くなる。この斜面の東寄りの部分では、杉の植林が行われており、その部分は大きく造成されているようである。また、更に東側は、小さな谷地形になっており、黒色土は、ほぼ流失しており、表土直下に地山である砂層が検出された。

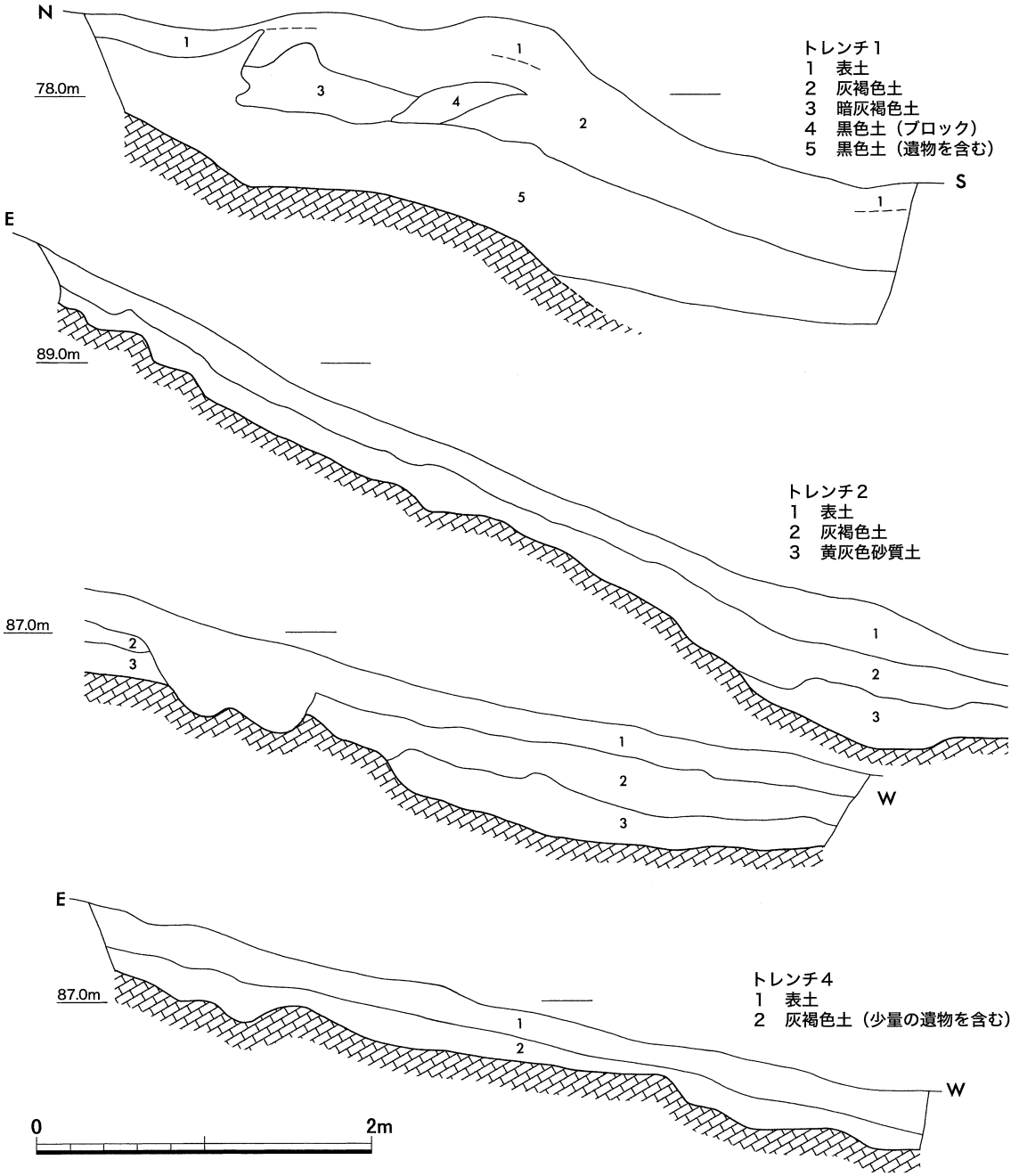
トレンチ１（第６図）は、南斜面西側の標高約78m付近に設定したものである。トレンチ１付近は深い谷地形となっており、堅く締まった黒色土が厚く堆積していた。斜面上方では、表土直下に黒色土が見られるが、下方では、灰褐色土を、ブロック状に含んでいる。表土から灰褐色土中に含まれる遺物には小片が多かったが、黒色土中には比較的大きな須恵器・土師器の破片が見られた。黒色土の堆積は、斜面下方に向かうほど厚く、トレンチ１西端では表土から２m近くなるものと思われ、排土置き場の問題や排土流失の危険から、掘削を断念した。西側斜面には、分布調査の段階で、斜面にマウンド状になった部分があるとされていたが、地形の改変により調査時には、その部分を確認できなかった。マウンド状の地形が在ったとされる位置は、トレンチ１の北側隣接地で、傾斜は緩やかになっているが、土砂の流出が著しく、遺構・遺物は残存していなかった。



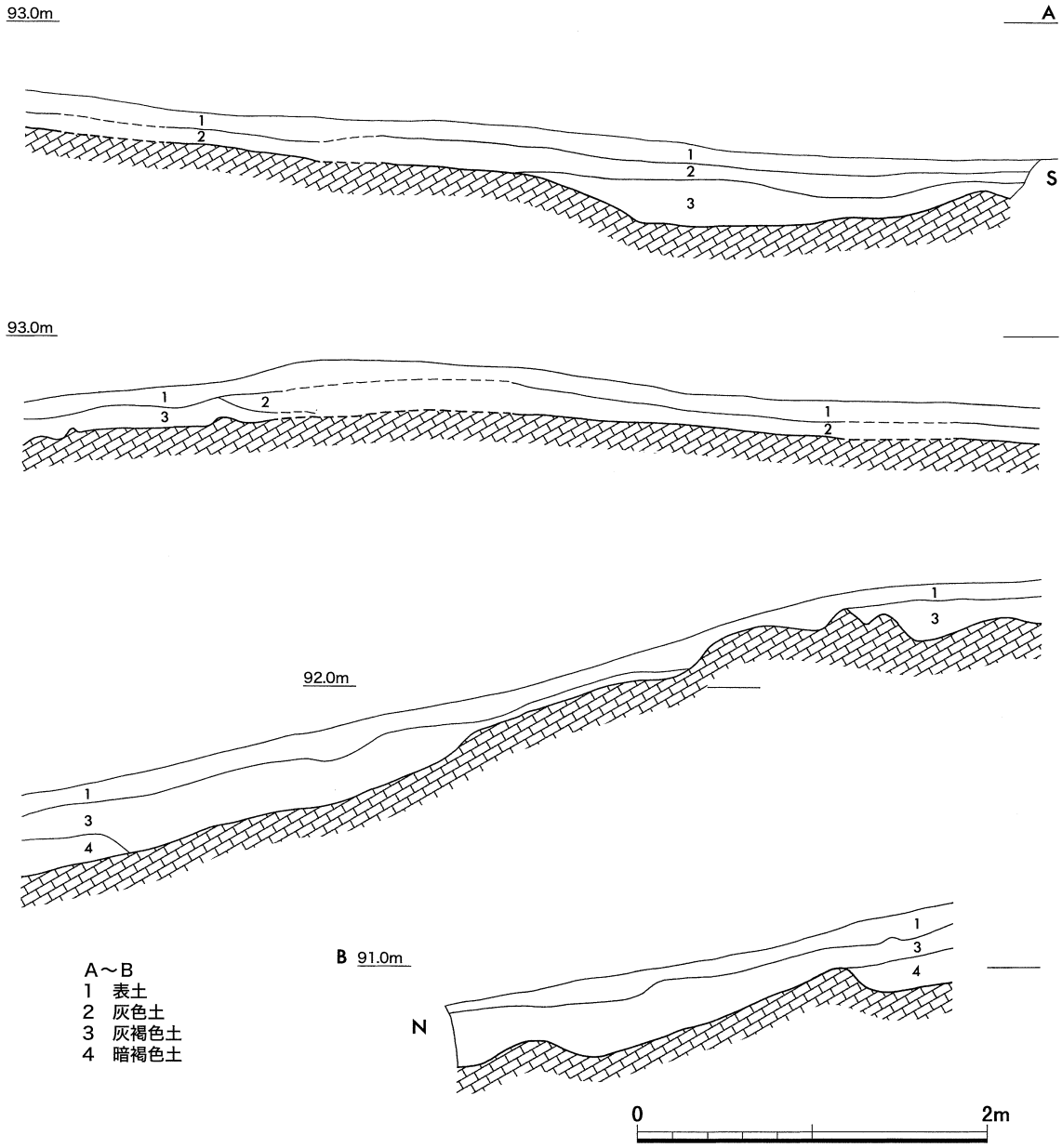
第５図　熊谷遺跡Ⅰ区遺構配置図（S＝1：500）

トレンチ２・４（第６図）は、調査区北端の尾根筋の標高87m・83m付近に設定した。いずれも平坦面を掛けて設定している。調査区北端は、２段に亘って明瞭な傾斜変換点があり、山城の遺構があるものと考えていた。トレンチからの出土遺物は、糸切り底を持つ土師器小皿の小片１点が含まれていたが、その他の遺物は、土師器と須恵器の小片で古墳時代前後のものと考えられた。堆積土は、表土（腐植土）と灰褐色土が薄く堆積しており、灰褐色土中に少量の遺物を含んでいる。地山は、風化した花崗岩質の砂地で、非常に脆い土質であった。トレンチ２下方の黄灰色砂質土は、三刀屋熊谷２号墳の埋土で、黄灰色砂質土が始まる部分の落ち込みが２号墳上端を区画する溝に、根攪乱によって一旦途切れた後、再び大きく落ち込む部分が第１主体部にあたる。トレンチ５はトレンチ２の西側、標高約85m付近の斜面に設定したが、遺構・遺物は検出できなかった。

トレンチ４は、三刀屋熊谷２号墳から更に下方の平坦面にあたる。トレンチでは、少量の遺物が



第６図　熊谷遺跡Ⅰ区土層断面図(1)（S＝1：40）

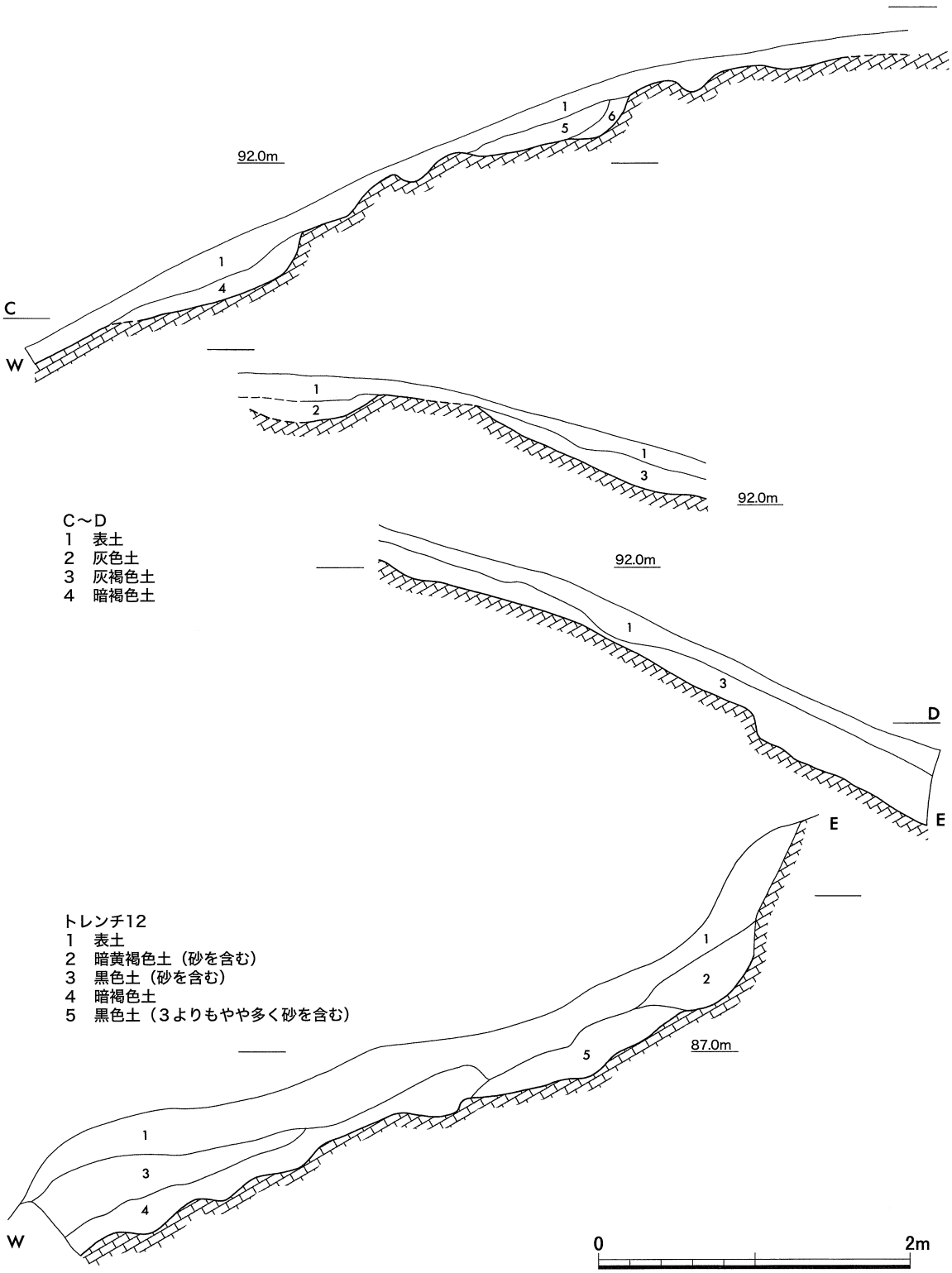


第７図　熊谷遺跡Ⅰ区土層断面図(2)（S＝1：40）

出土した。トレンチ４の北側は、土砂崩れによる崖面となっており、これより下方の調査はできなかった。

第７図のＡ～Ｂ間セクションは、トレンチ６・８の土層断面である。標高90m前後で平らに続く尾根筋の先端にあたり、マウンド状に盛り上がった部分である。古墳の存在が考えられたため、十字にトレンチを設定した。表土・灰色土の下方に灰褐色土・暗褐色土が見られるが、墳端を思わせるような明確な落ち込みは見られなかった。トレンチ北端付近で土師器と考えられる土器の小片が出土している。

Ｃ～Ｄセクション（第８図）は、Ａ～Ｂセクションに直交するトレンチ７・９の土層断面である。尾根頂部から西側は緩やかな斜面となっているが、東側は急傾斜で大きく落ち込む。西側のトレンチ７中程で、灰色土の落ち込みが見られるが、遺構として認識することはできなかった。また、西端の暗褐色土が堆積する落ち込みは、道と考えられるものである。トレンチ７・９からは、遺物は

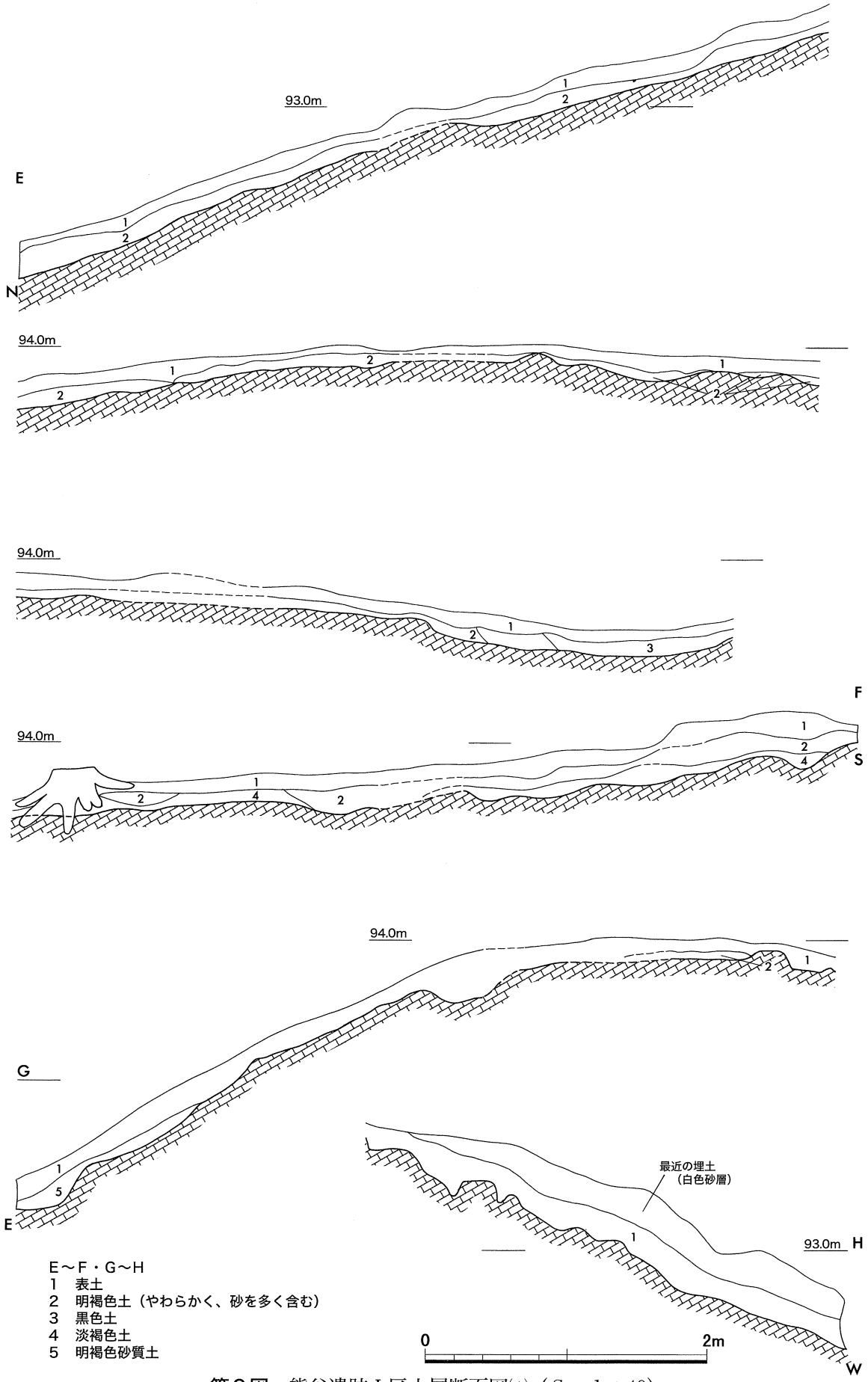


第8図　熊谷遺跡Ⅰ区土層断面図(3)（S＝1：40）

出土していない。

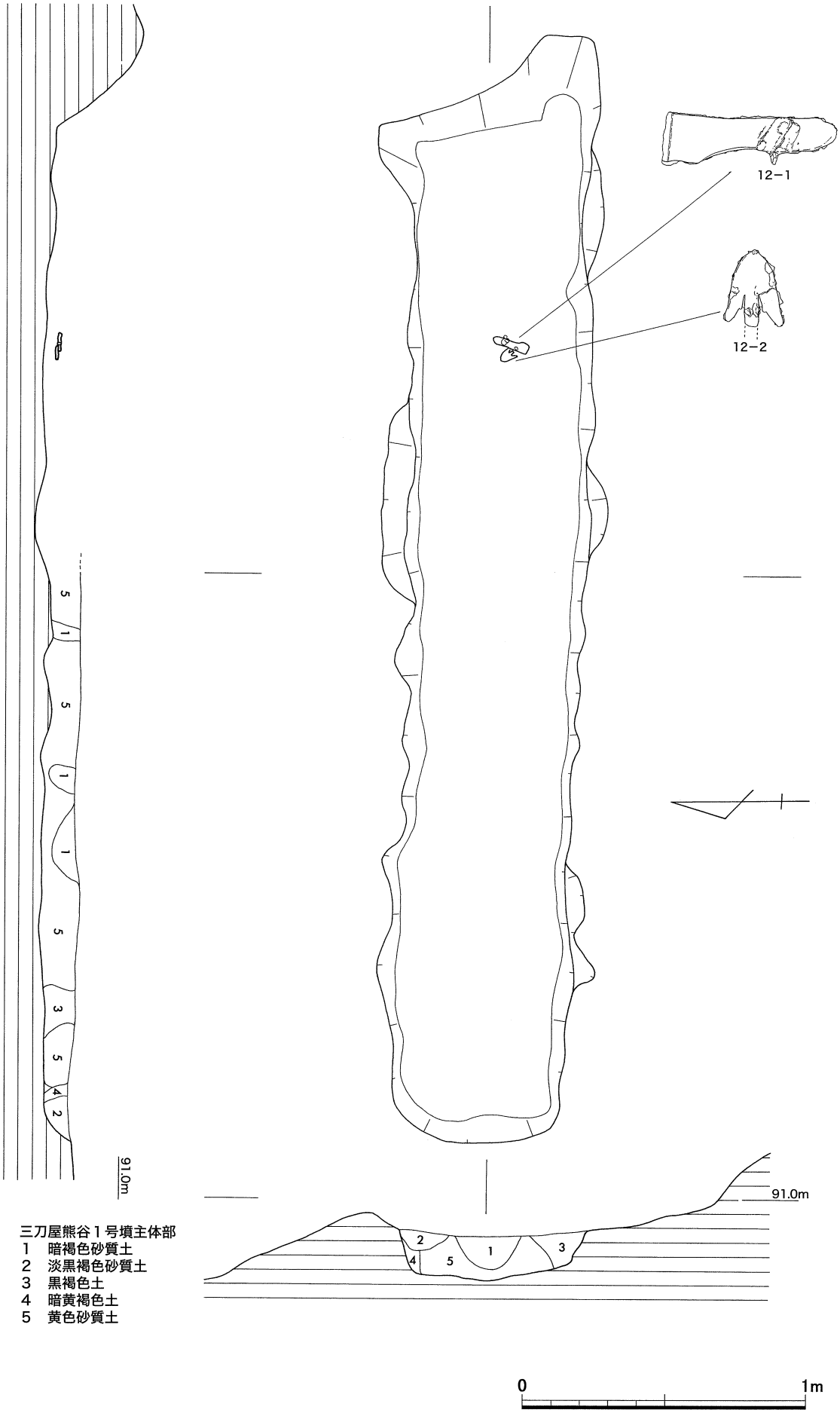
トレンチ12（第8図）は、西向き斜面の中程に設定した。黒色土・暗褐色土の厚い堆積が見られ、黒色土中より須恵器甕片が出土している。

第9図は、Ⅰ区南端の14～20トレンチの土層である。埋土が薄く、すぐに地山が現れる。所々に見られる落ち込みは、道である。この付近からは、遺物は出土しなかった。



第９図　熊谷遺跡Ⅰ区土層断面図(4)（S＝1：40）

第10図　三刀屋熊谷１号墳地形測量図（Ｓ＝１：60）



第11図　三刀屋熊谷１号墳主体部実測図（S＝１：20）

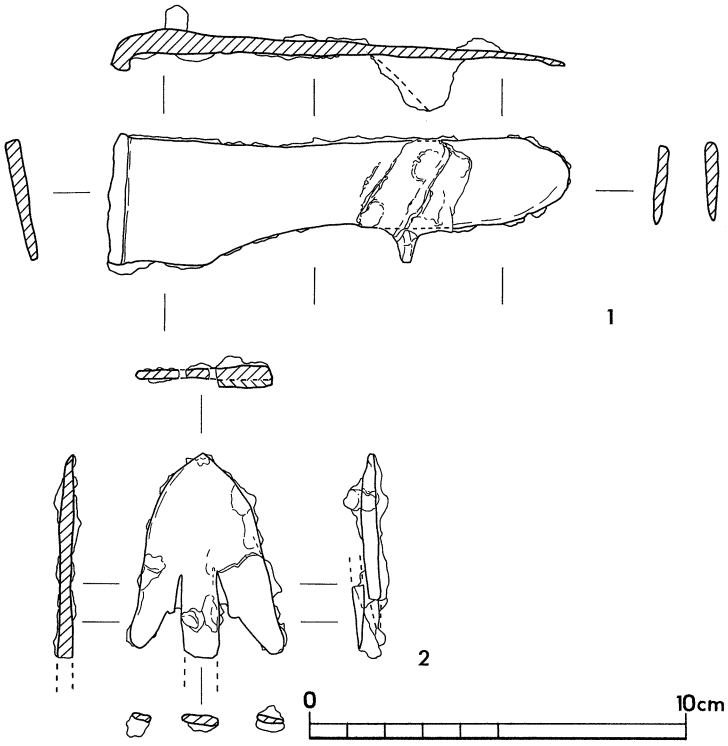
第４節　三刀屋熊谷１号墳（第10～12図）

三刀屋熊谷１号墳は、標高約91m付近で検出した古墳である。尾根上の標高92m付近にはマウンド状の高まりがあり、トレンチ６～９を設定したが、明確な遺構を検出できなかった。三刀屋熊谷１号墳は、そのすぐ下方で検出した古墳で、調査前の時点では、平坦面となっており、全く高まりが見られなかった。墳丘が完全に失われていたため、この付近で検出できたのは主体部の他、溝２条のみであった。

溝１（第10図）は尾根筋に直交して東西方向に延びるもので、全長約６m、中程での幅約40㎝、深さ約10㎝を測る断面U字形のを呈す。溝の両端は斜面に吸い込まれるように消滅しており、幅もやや広くなる。三刀屋熊谷１号墳を区画する、上側の溝と考えられる。溝１の両端からは、南北方向に、わずかに傾斜変換点が続いており、墳丘を表すものと思われる。それによると、三刀屋熊谷１号墳の墳丘は、南北6.6m東西6.4mの方形である。墳丘上面は削平を受けているものと考えられ、全体に大きく北へ傾斜しているが、北端で墳端部分の段差は約40㎝である。また、南端の溝１の上場と北端の墳端部の比高は、約1.3mである。

溝２（第10図）は、尾根筋から始まり、南西へ抜ける溝で、検出長約６m、幅約50㎝深さ約20㎝で、断面形状は箱形である。ほぼ水平に続いており、斜面にさしかかって消えている。灰褐色の比較的軟らかい土で埋まっており、溝１とは印象の異なるものである。北西～南東方向に延びており、三刀屋熊谷１号墳の主体部や溝１とは、主軸が一致しない。三刀屋熊谷１号墳の墳丘先端ラインを切っていることから、古墳とは無関係の遺構と考えられる。

三刀屋熊谷１号墳の中央よりやや南よりの位置で長さ約3,7mの長方形の主体部を検出した。検出した位置が墳丘南端より約1,4m、北端より約4,5mと、かなり南に寄った位置にある。墳丘自体がかなり削平を受けていることから、別の主体部が在った可能性が考えられる。



第12図　三刀屋熊谷１号墳出土遺物（S＝１：２）

三刀屋熊谷１号墳の検出できた主体部（第11図）は、長さ約3.7m、幅約60㎝、深さ約40㎝を測り、底面は平坦である。埋土が極端に少なかったことと、地山が砂地であることから、土層堆積状況は必ずしも明瞭ではなかったが、４暗黄褐色土が、ほぼ垂直に立ち上がっていることから組み合わせの箱式木棺であった可能性が高い。また、木棺の組み方は、短辺側では、４暗黄褐色土の裏込めに２淡黒褐色砂質土が見られるが、長辺側では墓壙の壁面に完全に接しており、棺がH形に組まれていたことが想像される。主体部北端部の形状も同様にH形を連想させるもの

で、一端が長く飛び出した形になっている。

三刀屋熊谷１号墳主体部からは、鉄製品２点が出土した。鉄製品は鉄鎌と鉄鏃各１点で、出土位置は、主体部東よりの、床面からわずかに上である。２点は折りかさなるように鎌が刃部を東に、基部を南に向けて、鉄鏃は鎌の上に、先端を北西方向に向けて出土した。主体部の床面の幅は、東側が58㎝、西側で52㎝と、わずかに東側が広く、遺物も東側に集中していることから、頭位方向は東であったと考えられる。

鉄鎌（第12図１）は、長さ12㎝、基部の幅3.4㎝で、着柄部を刃部から下方向に見て左に折り曲げている。先端の形状は、丸くなっているが、折れた部分を研ぎ直したものか、元々の形状なのかは判断できない。刃部は着柄部から２㎝程離れた位置から始まり、緩やかに内湾する。刃部側から先端を上に見て、左側を研ぎ出す片刃となっている。先端近くに付着物が見られるが、鉄鏃と重なって出土していることから、鏃のシャフトの可能性もある。

鉄鏃（第12図２）は、短頸、柳葉式の逆刺を持つものである。鏃身部長5.3㎝で、箆被部で折れており、茎部の長さは不明である。錆の為、確認し難いが、断面では同形のものが２枚重なっているように見える。先端を尖らせ、逆刺に向けて緩やかに湾曲し、鏃身は短い。逆刺の内側にもう一段の小さな逆刺状の段が見える。

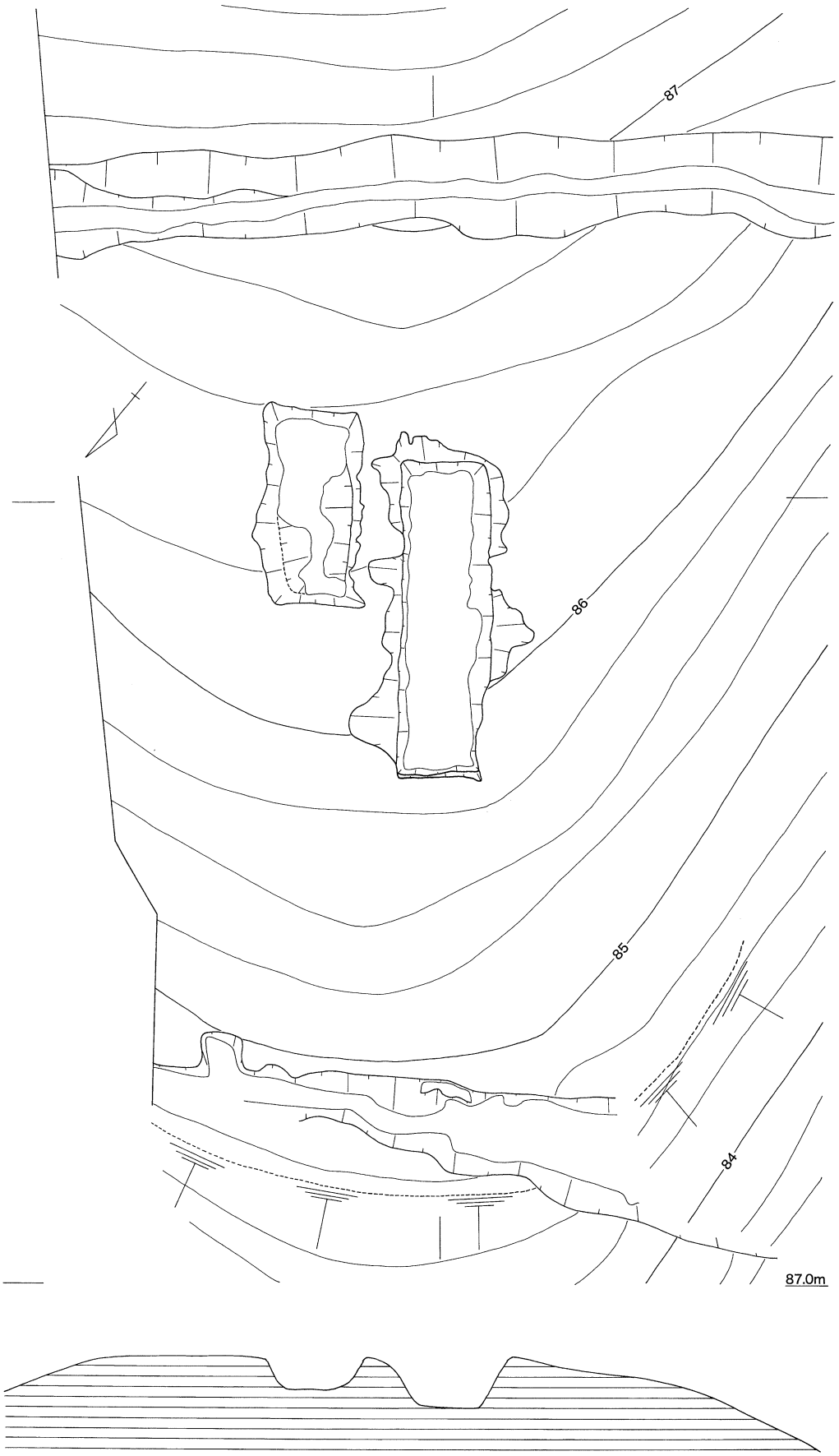
第５節　三刀屋熊谷２号墳（第13～18図）

三刀屋熊谷２号墳（第13図）は、三刀屋熊谷１号墳の北側にあり、尾根筋を比高差で約５ｍ下がった標高約86ｍの位置で検出した古墳である。狭い尾根筋の上側（南側）だけを溝で切断したもので、東西方向には墳端を示す明瞭な区画は見えない。検出した溝が直線的に延びていることから、方形墳と思われるが明確ではない。検出した遺構は南側の溝（溝３）の他、主体部と思われる落ち込み２基（第１・第２主体部）の他、三刀屋熊谷１号墳付近と同様に尾根筋先端側（北側）に主軸と形状が異なる溝（溝４）が見られる。

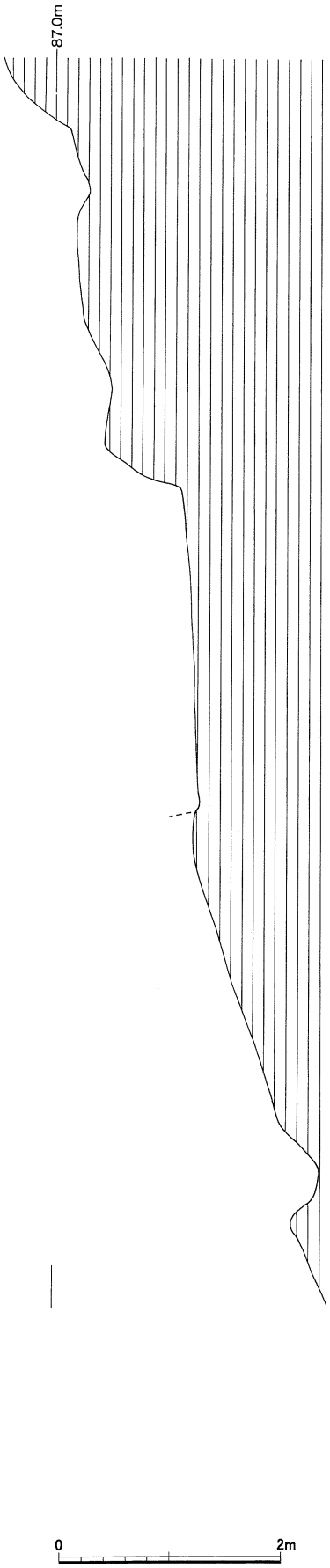
三刀屋熊谷１号墳付近より北側は、尾根筋も急傾斜になっており、標高50ｍ付近まで続いている。尾根筋の途中に２～３箇所で傾斜が緩やかになった部分が見られる。三刀屋熊谷２号墳の検出位置は、その内の最も上段のもので、南北約10ｍ、東西約３ｍのテラス状になっている。そのテラス状になった部分から２基の主体部と溝を検出した。

トレンチ２（第６図）は、三刀屋熊谷２号墳付近に設定したものであるが、その土層断面には、墳丘盛り土の残存を示すような土層堆積は見られない。古墳は、標高約87ｍ付近に東西方向に掘られた溝３によって区画されると思われる。溝３は、幅約70㎝、深さ約20㎝の鈍いＶ字形の断面を持つ溝で、東西方向に約８ｍに亘って検出した。東西の消失点は確認していない。この溝が古墳の南側の区画になるものと思われるが、尾根は、東西方向には急傾斜で落ち込んでおり、東西の墳端は不明である。また、北側は、標高84.5ｍ付近で、溝４の干渉があるため不明瞭ではあるが、傾斜変換点が見られ、墳長9.5ｍ以上と考えられるが、斜面の何処までを墳端と意識していたかは認識できない。

三刀屋熊谷２号墳では、長方形の落ち込み２基を検出し、主体部と判断した。２基の主体部は、尾根筋に平行して作られており、主軸方向は南東－北西で、溝３の方向に直交し、三刀屋熊谷１号墳の溝１・主体部からは約45°ずれる。



第13図　三刀屋熊谷２号墳地形測量図（S＝1：60）



第13－2図

溝４は、三刀屋熊谷２号墳北端で検出した溝である。尾根筋に対し直交し、東西方向に約６ｍに亘って検出した。溝４の幅は均一でなく、狭いところで約40㎝、広いところでは１ｍ近くなる。幅20㎝程度で、平らな床面があり、断面は箱形を呈している。溝の東側は不明であるが、西側は斜面に落ち込んで消滅している。溝４は、地山崩落土と思われる軟らかい砂で埋まっており、三刀屋熊谷２号墳より新しい時期のものと考えられる。

三刀屋熊谷２号墳第１主体部（第14図）は、尾根筋中程に作られた長方形の主体部で、長さ3.2m、幅0.8mを測る。上面は削平を受けており、北側は殆ど残存していなかったが、南側の壁面近くでは、深さ約60㎝である。床面は、一応平らに成形されているが、断面では、南から北方向へ傾斜しており、南端と北端の比高差は、10㎝以上ある。土層堆積状況は、急傾斜地のため、良好な状態とは言い難く、大半の部分が地山の崩落と思われる砂で埋まっており、木棺の痕跡は留めていなかった。

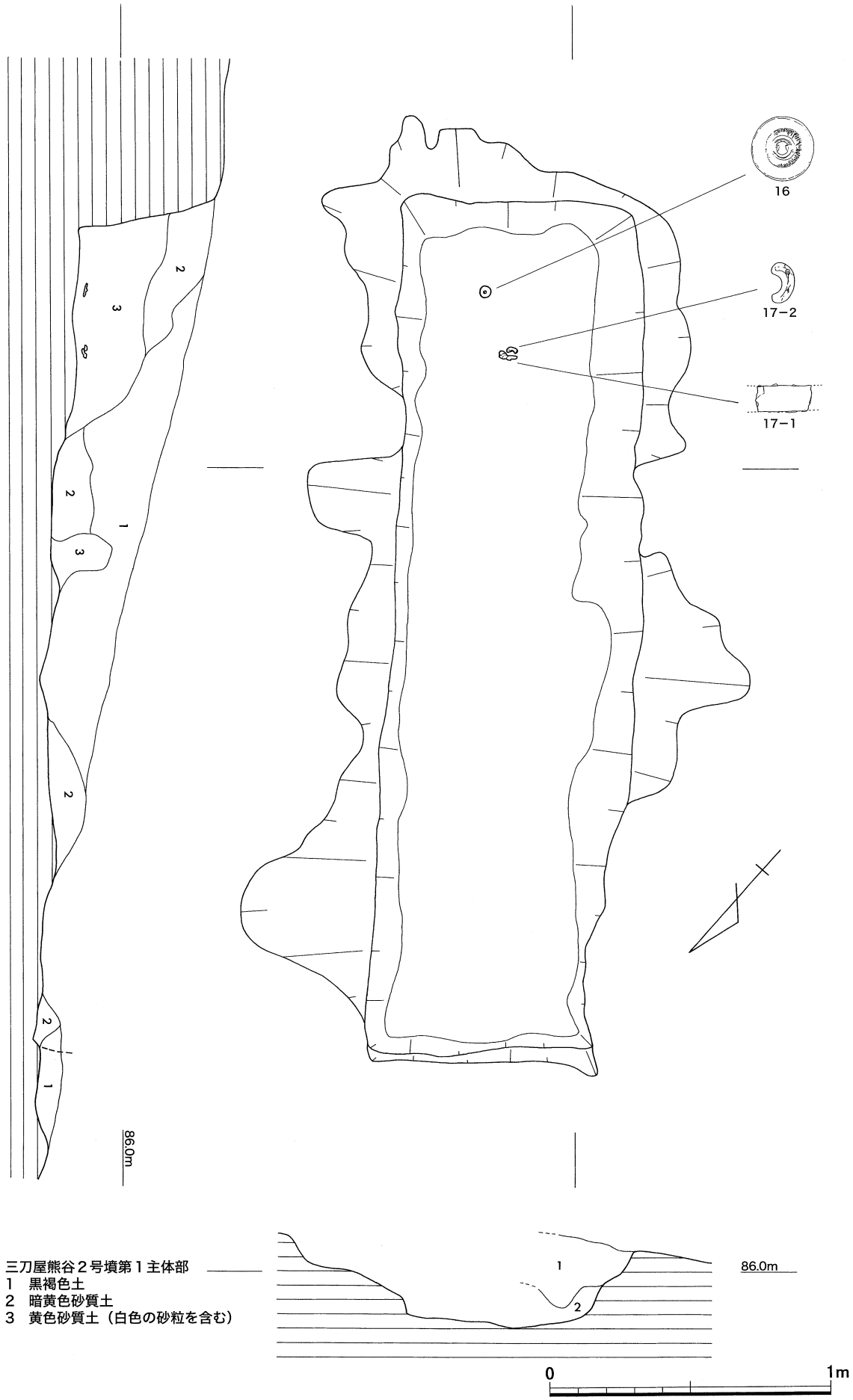
床面は2.9×0.8mの長方形を呈しており、箱式木棺が入っていたものと推定される。床面近くに３黄色砂質土の堆積がわずかに見られ、その中より、銅鏡・勾玉・刀子が出土している。主体部床面の両端での幅に、殆ど差は見られないが、遺物の平面的な出土位置は、第１主体部南東側に集中しており、頭位方向は南東であったと考えられる。

三刀屋熊谷２号墳第２主体部（第15図）は、第１主体部の東側で検出したものである。主軸方向を第１主体部に一致させ、近接して作られている。第１主体部との距離は40㎝程で、人一人が何とか渡れる程度の幅しかない。また、主体部位置は、南端の肩が、第１主体部よりも30㎝程南に寄った位置になる。

第２主体部は長さ1.9m、幅0.9mを測り、第１主体部に対し、幅はほぼ等しいものの、長さが短い。南側の壁際で深さ約40㎝であるが、北側の壁は殆ど残っていなかった。床面は、第１主体部ほど丁寧には成形されておらず、凹凸が多く残り、平坦とは言い難い。

長軸方向の土層断面では、２黒褐色土が薄く立ち上がる部分が見られ、木棺痕跡の可能性も考えられるが、短軸方向では、必ずしもそれを言い難い。５黄色粘質土については、木棺を据える際の裏込め土と思われる。

三刀屋熊谷２号墳第２主体部からは鉄鎌１点が出土している。平面的には主体部中程からやや南よりの位置であるが、床面からは10cmも浮いた位置にある。鉄鎌出土地点の上下で土層的な変

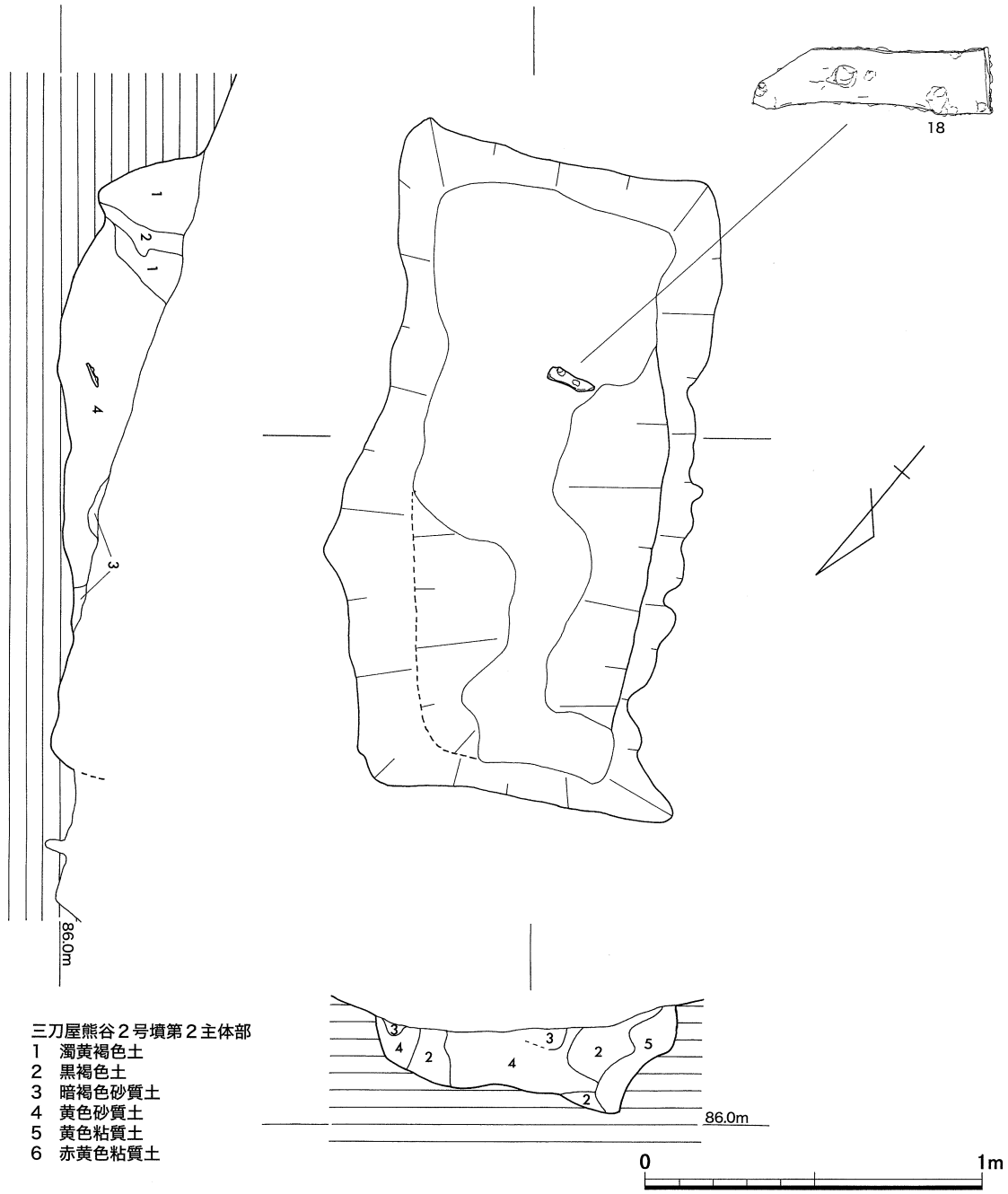


第14図　三刀屋熊谷２号墳第１主体部実測図（S＝1：20）

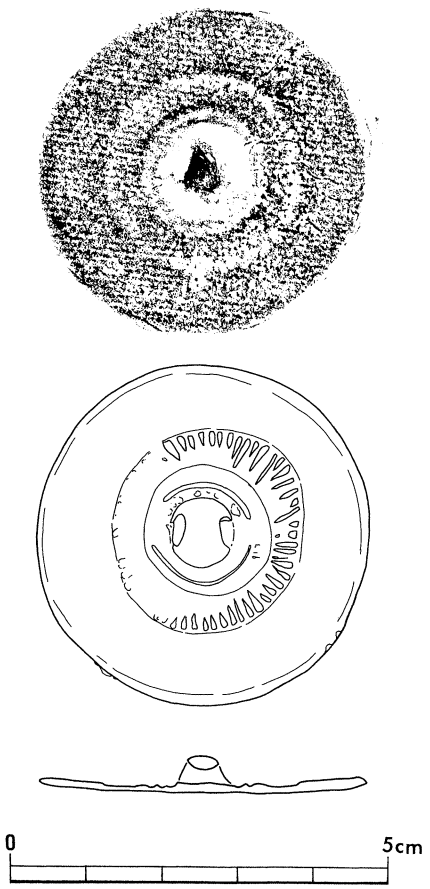
化は見られず、４黄色砂質土である。４黄色砂質土は、短軸方向の土層断面では複雑な堆積をしており、その性格は不明であるが、土質としては地山の風化土と考えられ、斜面上方から流入してきた可能性も捨てきれない。調査当初には、棺上に置かれていたものが、主体部直上の埋土によって埋められたものと考えていたが、上記の理由により、棺上に置かれたものか、別の遺構からの流れ込みかは判断できない。この鉄鎌は、先端を西に、刃部を南に向けて出土した。

三刀屋熊谷２号墳周辺での出土土器には、土師器皿（25-7）１点が見られるが、回転糸切り底を持つ土師器皿が古墳に伴うとは思えない。三刀屋熊谷１号墳と同様に直接伴う土器は検出できなかった。

三刀屋熊谷２号墳からは、銅鏡、刀子、勾玉、鉄鎌各１点が出土した。この内、鉄鎌が第２主体部から、他の遺物は第１主体部から出土している。



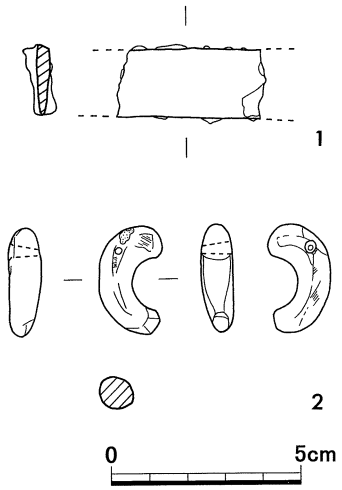
第15図　三刀屋熊谷２号墳第２主体部実測図（S＝1：20）



第16図　三刀屋熊谷２号墳
出土重圏文鏡実測図（S＝１：１）

第16図は、銅鏡である。面径47㎜を測る重圏文鏡で、内区文様は圏線を、外区には櫛歯文を施す。内区の圏線は紐から２㎜離れて強い圏線が引かれ、更に２㎜離れた弱い圏線によって外区を区別する。内側の強い圏線は、紐の穴の延長線上部分が、摩滅して消滅している。圏線の内側には、鋳掛け時のものか、文様なのか区別しがたいが、小さな珠文状の列点が、わずかに見える。圏線外側には、外区の櫛歯文に延長して、直線がわずかに見える。外区の櫛歯文は、幅５㎜前後の範囲に施されるが、完全な放射状ではなく、４から６本が単位となって平行に走る。平面形は真円ではなく、僅かに歪みがあり、鋳造時の湯口方向に関係するかと思われる。全面的によく研磨されており、縁などは丸みを帯び、研磨痕を多く残している。出土時に上面をとなっていた鏡背側は緑色の錆に覆われていたが、鏡面側は比較的錆の付着が少なく、鈍い銀色に輝いて見え、錫の含有量が高いものと想像される。また、縁の一部に鉄錆を思わせる褐色の錆の付着が見られるが、鉄製品などと接触していた痕跡はなく、銅鏡そのものに由来する錆と思われる。出土地点には、銅錆によると思われる黒色に変色した土が見られたが、木片などの有機質の残存は見られなかった。紐径９㎜、紐高４㎜、縁幅９㎜、面厚5.5㎜を測る。

17－1は、刀子と考えられる鉄製品である。出土したのは刃部のみで両端を欠いており、全体の形は不明である。残存長40㎜、幅17㎜を測るが、錆膨れが著しく厚さは不明である。第１主体部から出土した全ての鉄片を接合したが、他の部位は見られなかった。平面的な出土状況は、勾玉に接しているが、切先・茎部分が主体部内に見あたらないことから、棺上に置かれていた可能性も考えられる。

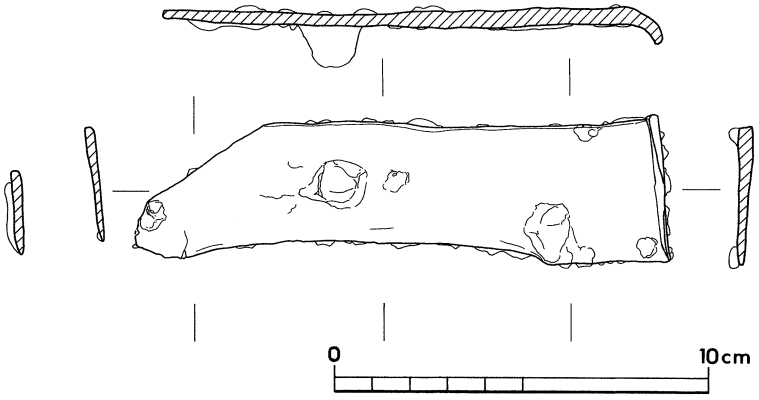


第17図　三刀屋熊谷２号墳
第１主体部出土遺物実測図（S=1:2）

17－２は、瑪瑙製勾玉である。全体に薄い赤色から白色を呈しており、透明度の高い瑪瑙を使用している。長さ2.7㎝、幅1.6㎝で、中程での太さ0.8㎝を測り、片面から穿孔される。17－１刀子と接して出土しているため、頭部に鉄錆が付着している。

第18図は、第２主体部出土鉄鎌である。刃部は僅かに内湾し先端部が背側から斜めに削り取られた鳶口のような形態を呈す曲刃である。基部は刃部に対してほぼ直角に、基部全体を緩やかに折り曲げているが、折返した部分の長さがやや短い印象がある。基部の折返しは、背面方向から先端を上に見て左に向けて折り返しており、シャフトに対して右側に刃部が付く。刃部は、基部から約３㎝の間隔をおいて始まり、緩やかに内湾して先端に続く、刃部の内湾は研ぎ減りも大きく関わると思われ、折返しからの刃部

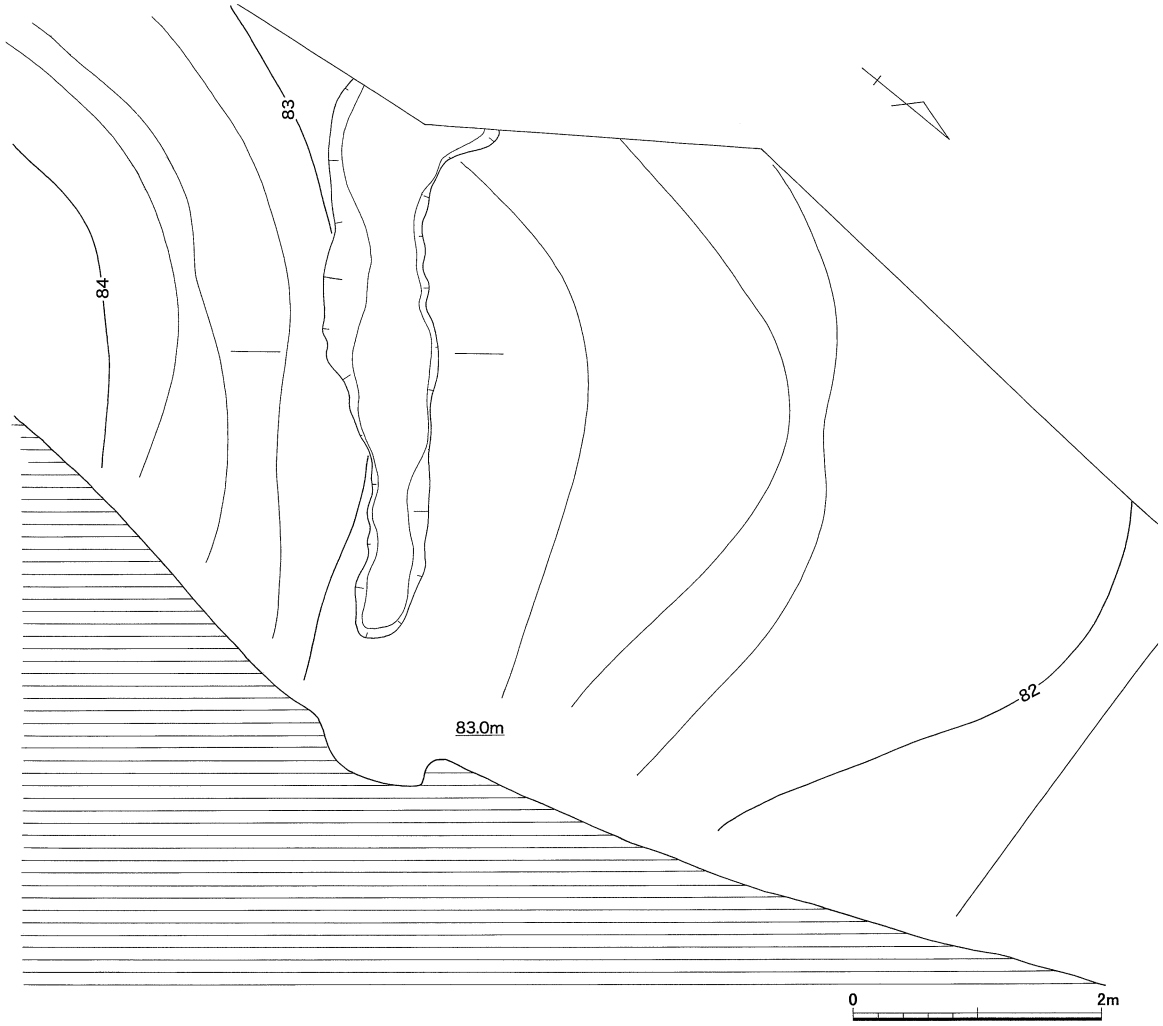
後端の間隔についても、シャフトに装着したままの研磨を想像している。先端部も刃部との間に間隔があるが、先端部が欠損したものを研ぎ直して使用していると考えられる。残存長14.1㎝、刃部幅3.7㎝を測り、厚さは約４㎜と厚手である。三刀屋熊谷１号墳出土の鉄鎌（12－1）との最大の違いは、平面形と基部の折返し方向である。また、刃部の湾曲が始まる位置は、両者とも２～３㎝あり、シャフトの太さと研磨の方法に関わるものと思われる。



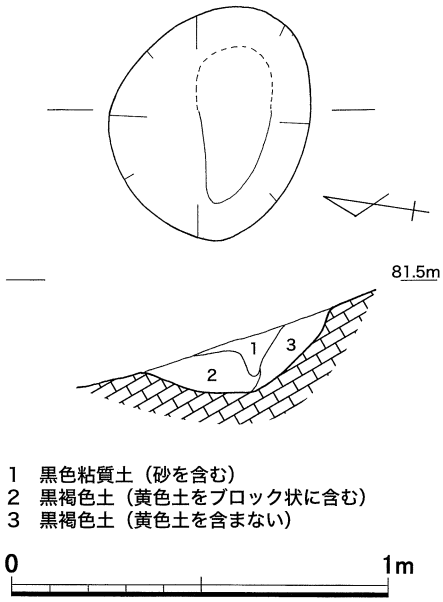
第18図　三刀屋熊谷２号墳第２主体部出土遺物実測図（S＝1：2）

溝５（第19図）

三刀屋熊谷２号墳より更に下方に、もう１段の傾斜の緩やかになった部分が見られ、付近で、溝５を検出した。なお、溝５を検出した調査区北端付近は、北西側が土砂崩れによって崩落しており、これ以上調査区を延長できなかった。



第19図　熊谷遺跡Ⅰ区溝５付近地形測量図（S＝1：60）



第20図 熊谷遺跡Ⅰ区Ｐ１実測図（S＝1：20）

尾根筋の、標高82～83m付近を中心に南北約７ｍ、東西約４ｍの範囲が緩斜面になっており、三刀屋熊谷１・２号墳と同様に、緩斜面南側（山側）を溝（溝５）で区画している。溝５は、検出長約４ｍで、西側は調査区外斜面下方へ向けて続いている。尾根筋の中程で、幅約80㎝、深さ約20㎝を測る。断面はＵ字形から箱形を呈しており、灰色砂質土が堆積していた。周囲の状況からは、三刀屋熊谷１・２号墳と同様な古墳が在ったと想像されるが、主体部等を検出することはできなかった。

ピット１（第19図）

調査開始当初に須恵器墨書土器を表採したため、奈良時代の遺構を想定して掘削を開始したが、時期を明確に示す遺構は古墳以外には見られなかった。墨書土器表採地点は、Ⅰ区西向き斜面で、表採地点に最も近い遺構がピット１である。三刀屋熊谷１号墳から西に下った斜面の標高81m付近で検出したもので、墨書土器表採地点は、このすぐ南である。ピット１は、長径約60㎝、短径約50㎝の楕円形で、深さは15㎝程である。床面は丸みを持ち、壁面も直立しない。単独の遺構で、周囲から別の遺構を発見することはできなかった。また、周辺からの出土遺物は、土器の細片のみであった。

尾根上の遺構（第20・21図）

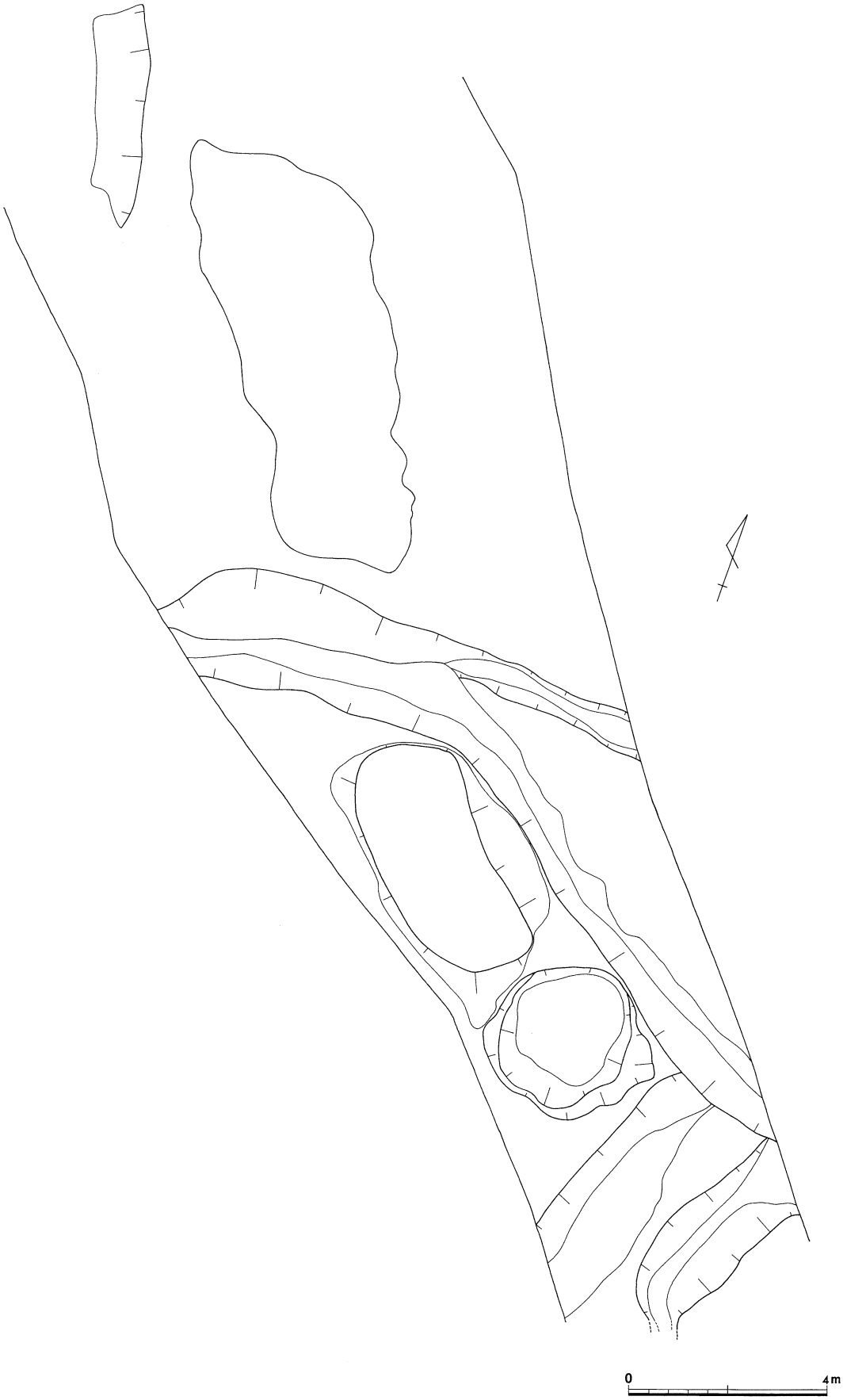
三刀屋熊谷１号墳から南側の尾根上は平坦に加工された形跡があり、戦国時代の城跡の存在が推定された。ただし、熊谷遺跡Ⅰ区は、地山が花崗岩の脆い岩盤で、表土を取り除くとすぐに砂になってしまう土質となっている。斜面と異なり、極端に表土の堆積が薄い尾根上での遺構の検出は困難であった。

熊谷遺跡Ⅰ区の尾根筋は、北側から三刀屋熊谷１号墳の南隣に最初のピークがあり、その南裾からは弥生土器、古墳時代の土師器の破片が出土している。三刀屋熊谷１号墳が、ピークの直下に位置することや、付近での遺物の出土から、このピークに古墳や弥生時代の遺構が在ったものと思われる。

三刀屋熊谷１号墳より南へ30m程の位置に２回目ピークがあり、その頂部は平坦に加工されている（第19図）。付近の標高は約93mである。頂部は南北約６ｍ、東西約４ｍの長方形に加工され、北側の段には、排水のためか、溝状になっている。頂部の平坦面東側からは、南に向けてスロープ状に下る、通路と思われる部分が確保されている。平坦面上では、柱穴と思われる落ち込みを７箇所で検出したが、建物跡となるような並びは見られなかった。これらの落ち込みはいずれも深さ10cm程の浅いもので、上面は浸食が進んでいるものと思われる。東側と西側は急傾斜で落ち込んでおり、南側は、一段落ち込んだ後に南の丘陵へ続いている。北側には更に尾根筋を平坦面が続き、一部を溝によって切断している。この付近からは、遺物は出土しなかった。

これらの平坦面や溝は、山城に由来するものと思われるが、時期を特定できる遺物が無く、断定できない。ただ、三刀屋熊谷１・２号墳の上面の削平は、尾根筋の削平と同様に行われたと思われ

第21図　熊谷遺跡Ⅰ区中央部実測図（S＝1：60）



第22図　熊谷遺跡Ⅰ区南側実測図（S＝1：120）

る点や、緩斜面先端に位置する溝２や溝４が、この平坦面に伴うと推定され、山城のような施設が想像される。その場合、溝２・４には塀のようなものが推定されるのではないだろうか。また、その造成によって古墳２基以上と弥生時代の遺構が削平されたものと思われる。

熊谷遺跡Ⅰ区南端（第22図）は、Ⅱ区との間が急傾斜となっており、調査前から、尾根を越える道が見られた。表土を除去すると、地山面で少なくとも４本以上の道が、交錯しながら尾根を越えていたようである。道によって区切られた部分は、加工段状に残丘となっているが、遺構とは思えない。この付近からは、遺物は出土しなかった。

熊谷遺跡Ⅰ区の遺構に伴わない遺物（第23～28図）

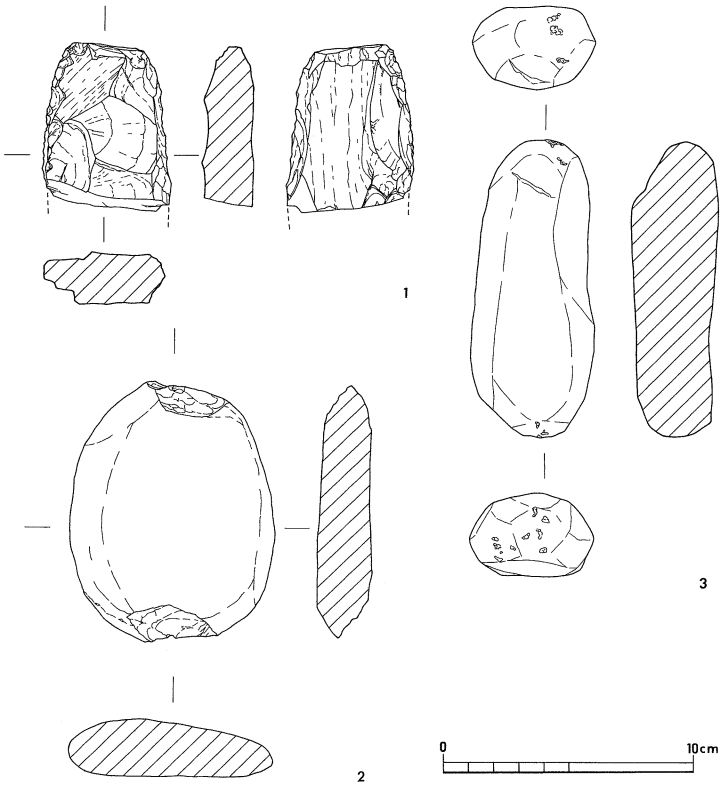
熊谷遺跡Ⅰ区では、主に西向き斜面に厚く堆積した黒色土中から遺物が出土することが多かった。古墳時代前期と考えられる土師器類が、尾根上から出土している他は、大半の遺物が西向き斜面の出土である。包含層中出土遺物は、縄文から古代の土器類が中心で、僅かに石器が含まれているほか、中世と考えられる糸切り底の土師器小皿が含まれている。

第23図は石器である。石器類に関しては全て包含層中からの単独の出土で、土器を伴っていない。図示した３点の他、黒曜石の剥片少量が出土している。

23－１は、打製石斧の基部と考えられる石器である。刃部と思われる一端を欠いている。板状剥離する緑灰色の石材を使用し、側部、端部を中心に荒く成形している。幅 5.1cm、厚さ 2.1cmで、残存長は 6.6cmである。

23－２は、石錘である。暗灰褐色の川石の両端に窪みを割り入れたもので、他に大きな加工は見られない。重量は約 262ｇを測り、長さ10.3cm、幅 8.2cm、厚さ 2.1cmである。

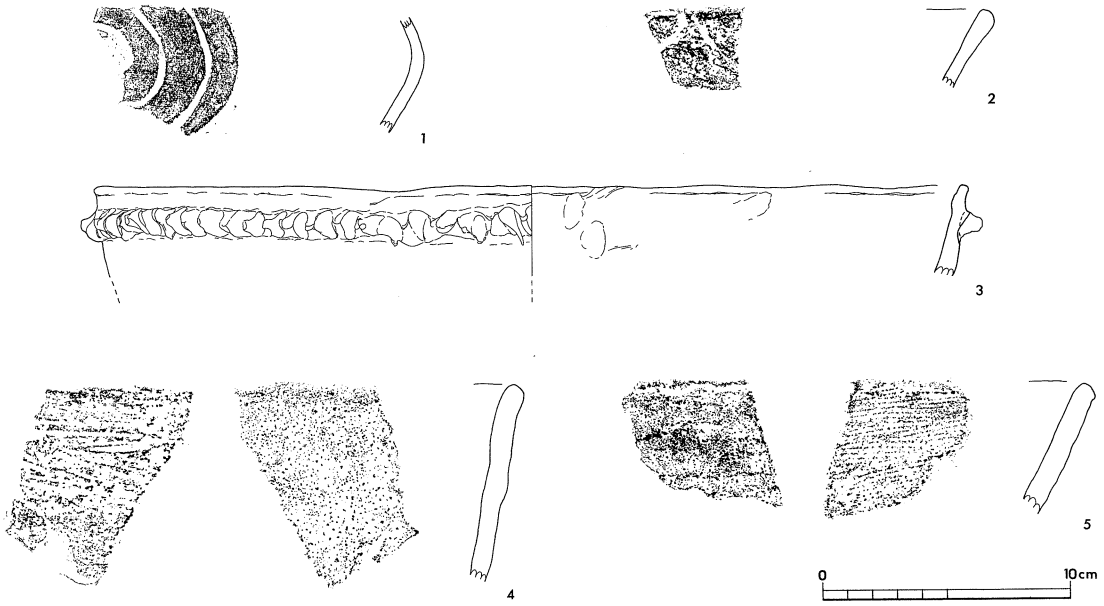
23－３は、敲石である。緑褐色の長細い自然石を使用したもので、両端に僅かに打痕が残る。比較的軟らかい石材のためか、全面的に風化による磨滅が進んでおり、擦痕などの、擦り石に使用された痕跡は見られない。長さ11.9cmで、太さは、3.3～4.9cmを測る。



第23図　熊谷遺跡Ⅰ区出土石器実測図（Ｓ＝１：３）

第24図に図示したものは、縄文土器である。

24－１は、浅鉢の小片と考えられるもので、外面に縦方向の深い沈線４条が施されるが、縄文は見えない。外面は、横方向の丁寧なミガキが、内面は横方向の荒いミガキが施される。器壁は極めて薄い。焼成は良好で、明褐色を呈し、胎土中に１mm前後の透明な砂粒を多く含ん



第24図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(1)（S＝1：3）

でいる。縄文後期前葉のものと思われる。

24－2は、緩い波状口縁を呈した口縁部の小片である。内外面とも横方向の荒いナデで調整され、文様は見えない。焼成は良好で、明黄褐色を呈し、胎土中に白色の小砂粒を含んでいる。

24－3は、突帯を持つ深鉢の口縁部である。復元口径は約35cmで、口縁端部を尖らせることなく、丸く納め、体部は直線的に延びるようである。内外面とも横方向の条痕地で、口縁部より約1cm下がった位置から、突帯が張り付けられる。突帯は、約1.5cm間隔で、深いキザミが施される。外面は明灰色を、内面は黒灰色を呈している。2mm前後の白色の砂粒を非常に多く含んだ胎土で、焼成は良好である。

24－4は、粗製の深鉢の口縁部である。比較的厚い器壁を持ち、口縁部は丸く、口縁端部より、2cmほど下で僅かに屈曲し、口縁部を外反させている。外面調整は、横方向の強く荒い条痕によるもので、胎土中の砂粒が大きく移動している。内面はナデ調整と思われ、条痕は見えない。外面は黄褐色を、内面は明褐色を呈し、胎土中に1～2mmの白色の砂粒を非常に多く含んでいる。

24－5も深鉢の口縁部と思われる小片である。口縁部は丸みを帯び、体部は僅かに内湾する。外面は、横方向の強いナデが施され、内面は条痕を明瞭に残す。外面は黒褐色、内面は赤褐色を呈し、胎土中に1mm前後の白色の砂粒を多く含んでいる。

第25図に図示したものは弥生土器と考えられるものである。全て包含層中の出土で、遺構に伴っているものは見られないが、西斜面の谷地形になった部分から比較的まとまって出土しており、その上方の尾根上に遺構があった可能性が考えられる。

25－1は、広口壺の頸部である。口縁部の外反が大きいもので、口縁端部を垂下させるものであろうか。頸部には断面三角形の突帯状に見える凹線文が4条以上施される。外面の凹線より上は、縦方向のハケメが密に施される。内面調整は頸部上方に横方向のミガキが見えるが、口縁端部近くには見られず、ヨコナデであろうか。淡黄褐色を呈し、胎土中に1～2mmの白色の砂粒を多く含んでいる。松本編年のⅣ－1～2様式（註3）に相当するものと思われる。

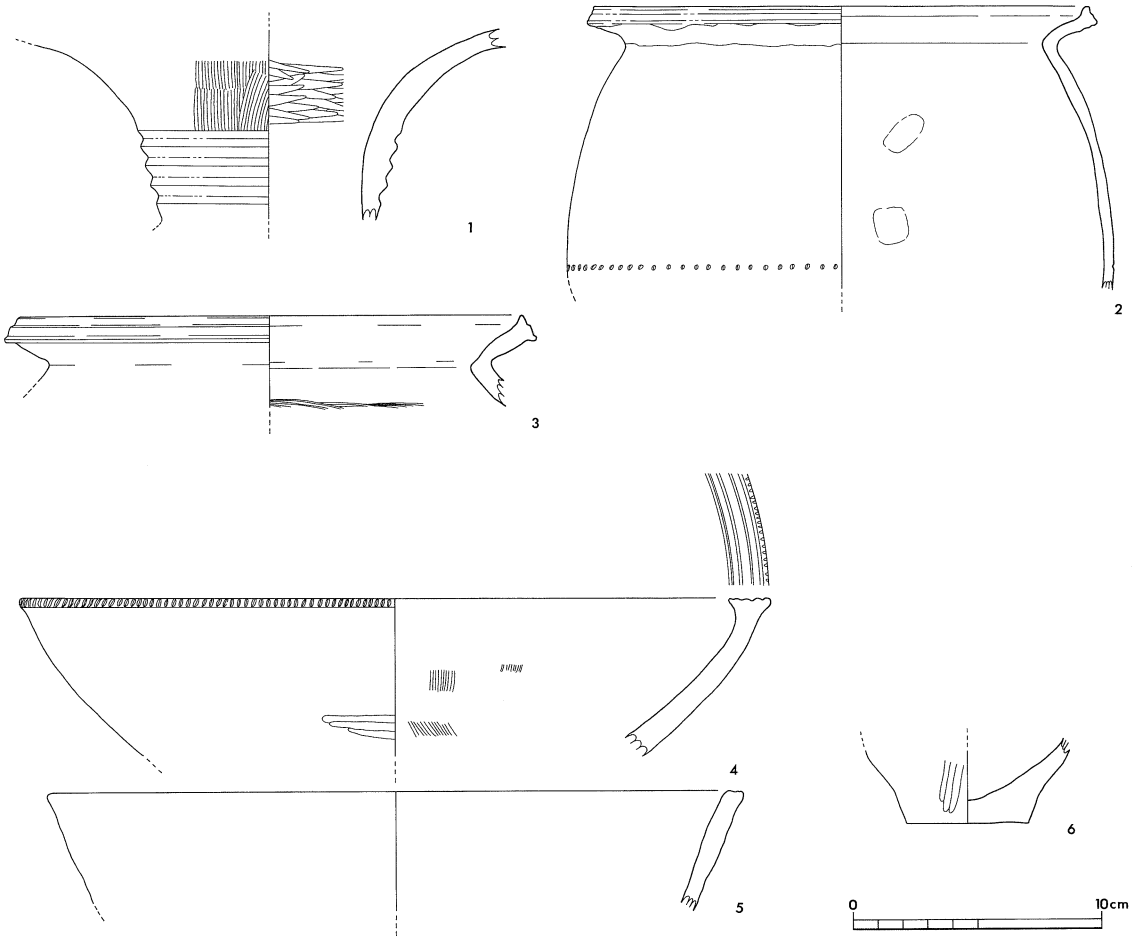
25－2・3は、いずれも復元口径約20cmを測る甕である。25-2は、口縁端部を上方に僅かに拡張

しするもので、端面は大きく内傾し、２条の浅い凹線を施す。頸部は強く屈曲し、体部はなだらかに延びる。体部中程に刺突による列点文を施す。体部外面の調整は縦方向のハケメであるが、明瞭ではない。内面は、頸部より下方をヘラケズリによって調整する。頸部から口縁部外面にはススが厚く付着している。淡黄褐色を呈し、胎土中に白色の小砂粒を少量含んでいる。25－３は、口縁部を上下に拡張するもので、端面には２条の凹線文を明瞭に見ることができる。25－２に比べ、肩がより強く張る器形を呈し、体部内面の調整は、横方向を中心としたハケメによる。明褐色を呈し、胎土中に金属的な光沢を持つ砂粒を含んでいる。25－２・３は松本編年のⅣ－２～Ⅴ－１（註４）に相当するものと思われ、弥生中期後半から後期初頭のものであろう。

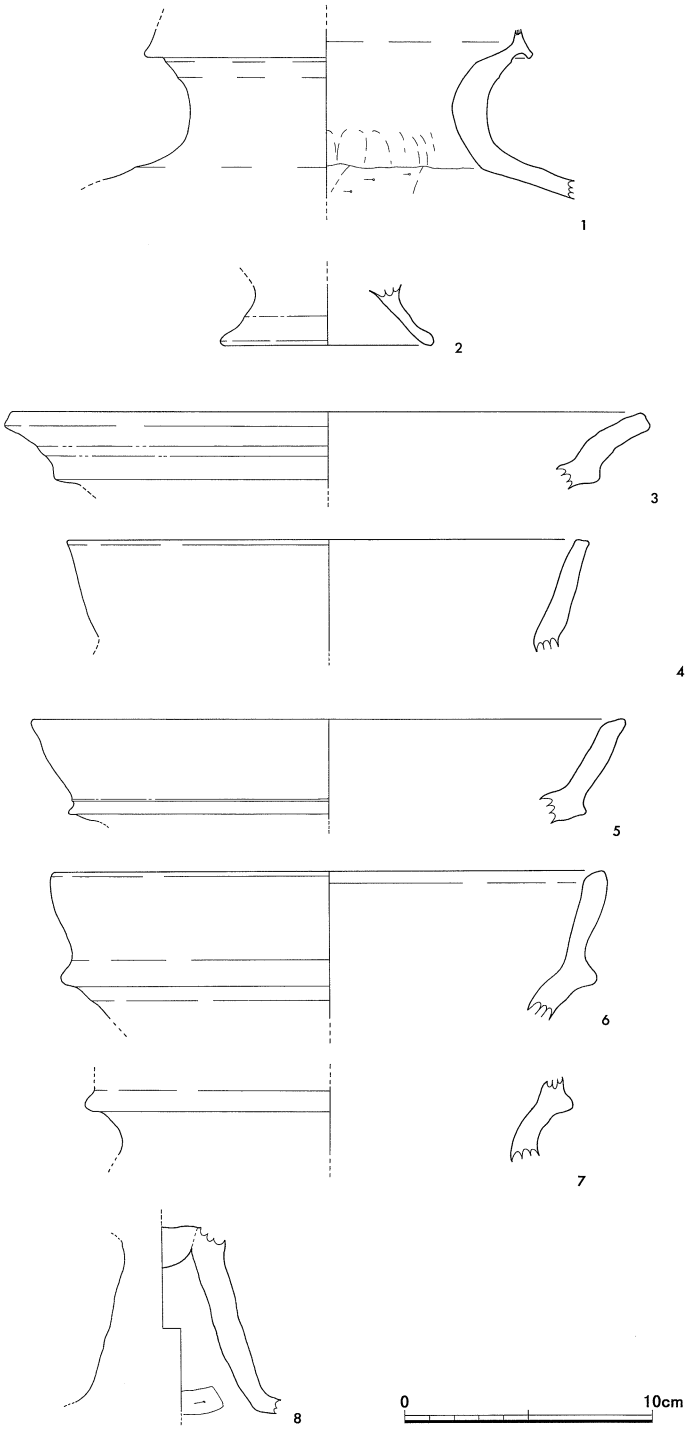
25－４は、復元口径約20cmの高坏である。口縁部を肥厚させ、フラットな面を作り出し、端部を両側に拡張するもので、外面側にヘラによるキザミ目を、上面に３条の凹線を施す。内面は磨滅しており、調整が明瞭ではないが、見える部分では縦方向のハケメとなっている。外面調整は横方向のミガキが見える。淡黄橙色を呈し、胎土中に１～３mmの白色の砂粒を含んでいる。

25－５は、復元口径約28cmの口縁部と考えられる小片であるが、器種は不明である。外傾して直線的に延びる口縁部で、端部にはフラットな面を持つ。内外面とも荒いナデで調整される。黄褐色を呈し、１～２mmの白色の砂粒を非常に多く含んでいる。

25－６は、底径4.9cmを測る、甕の底部と考えられるものである。外面は底部近くから縦方向にミガキが施され、内面はナデである。明褐色を呈し、胎土中に１mm前後の白色の砂粒を含んでいる。外面には、ススが付着している。



第25図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(2)（Ｓ＝１：３）



第26図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(3)（S＝1：3）

熊谷遺跡Ⅰ区から出土した弥生土器の内、時期の推定できるものは、中期後半から後期初頭に集中しているようである。

第26図には、古墳時代の土師器と考えられるものを図示した。26－1は、口縁端部を欠く壺の頸部である。口縁部は上下に拡張され、僅かに内傾して立ち上がる。口縁部外面はヨコナデされ、文様は入らない。頸部内面には、指頭圧痕を強く残し、体部内面はケズリである。明淡褐色を呈し、胎土中に1～3㎜の白色の砂粒を含んでいる。古墳時代初頭のものと思われる。

26－2は、低脚坏の脚台部であろうか。薄手の脚部が斜めに張り出すもので、端部は丸く納めている。淡黄褐色を呈し、胎土中に微砂粒を少量含んでいる。26－3は、大きく開く壺の口縁部である。復元口径約26cmになる、しっかりした二重口縁であるが、端部のアクセントは無く、外側に面を持つ。暗黄褐色を呈し、胎土中に1㎜程度の白色の砂粒を含んでいる。

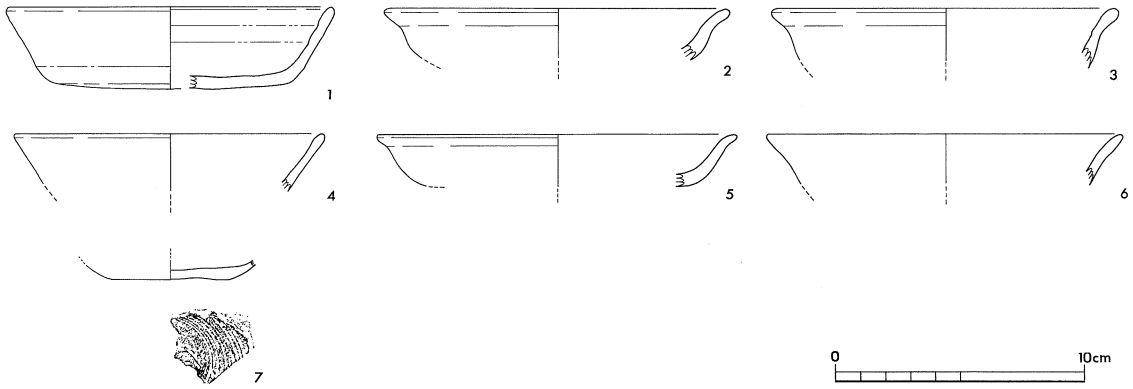
26－4は、単純口縁の甕である。復元口径は約21cmで、口縁端部に面を持ち、直線的に延びるものである。黄褐色を呈し、胎土中に微砂粒を含んでいる。

26－5は、壺であろうか。複合部が強く横方向に突出する二重口縁を呈し、口縁端部に面を持っている。淡黄褐色を呈し、胎土中に1㎜程度の白色の砂粒を含んでいる。

26－6・7は、二重口縁の甕である。複合部の突出は丸みを帯び、口縁端部の面も稜が不明瞭である。淡黄褐色を呈し、胎土中に微砂粒を含んでいる。

26－8は、高坏である。円盤充填法により坏部を接合する。磨滅のため、外面調整は見えない。淡黄褐色を呈し、胎土中に1㎜前後の白色の砂粒を多く含んでいる。

第26図の土師器の内、出土地点の確実なものはいずれも尾根上に集中している。時期についても、



第27図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(4)（S＝1：3）

26－3～8が古墳時代前期後半前後と考えられ、三刀屋熊谷1号墳に先行する時期の古墳が尾根上にあったものと考えられる。

第27図は奈良時代以降の土師器である。

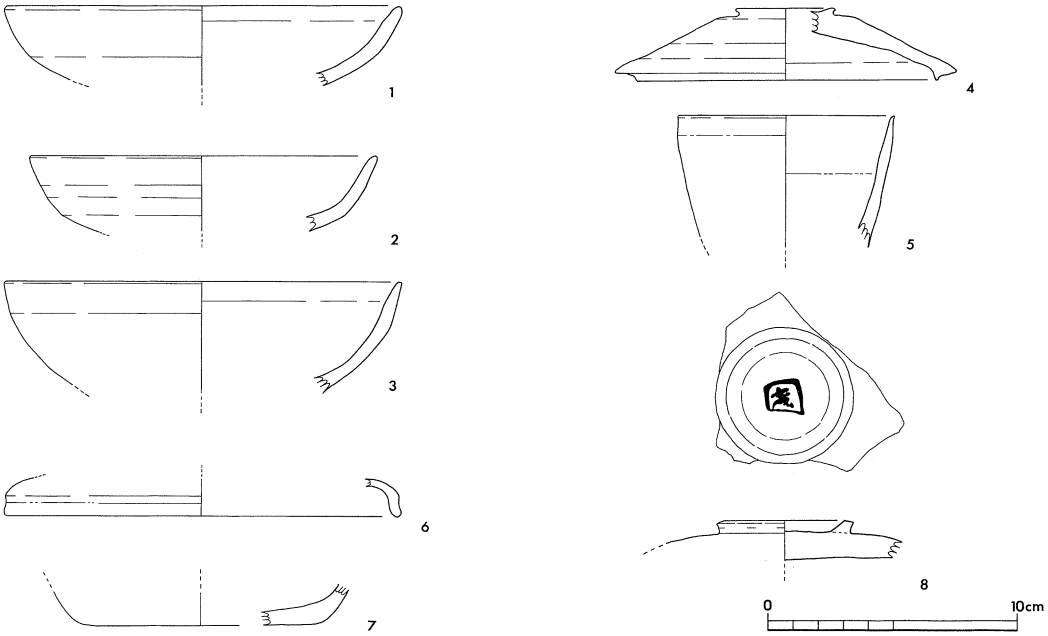
27－1は、復元口径約13cmの坏である。底部外面を除いて赤色顔料が塗布されている。僅かに丸みを持つ底部はヘラ切りで、体部から口縁部までは直線的に延びる。口縁端部は丸い。器高は約4cmである。底部外面は明黄褐色を呈し、胎土中に砂粒はほとんど含んでいない。

27－2・3・5・6は、皿と考えられる口縁部の小片で、いずれも赤色顔料が塗布されている。復元口径は14～15cmを測り、体部中程で屈曲して、口縁部を外反させるものである。明黄褐色を呈し、胎土中に砂粒をほとんど含んでいない。

27－4は、坏と考えられるものである。復元口径は約13cmで、体部は直線的に立ち上がり、口縁部は丸く納めている。赤色顔料が塗布されている。断面は明橙褐色を呈し、胎土中に砂粒をほとんど含んでいない。

27－7は、糸切り底を持つ土師器小皿の底部である。底径は約5cmに復元できる。淡赤褐色を呈し、胎土中に砂粒をほとんど含んでいない。

27－1～6は奈良時代の、27－7は、中近世のものと考えられる。



第28図　熊谷遺跡Ⅰ区出土土器実測図(5)（S＝1：3）

第28図には、須恵器を図示した。

28－１～３は、高坏の口縁部付近と考えられるものである。復元口径14～16㎝で、回転ナデ調整される。灰色から灰褐色を呈し、胎土中に微砂粒を含む。

28-4は、カエリの付く蓋である。低い輪状つまみを持ち、体部は厚く、直線的に延びる。カエリは小さく、断面三角形を呈す。全面回転ナデ調整され、切り離しの痕跡は見えない。暗灰褐色を呈し、胎土中に砂粒をほとんど含んでいない。

28－５は、壺の口縁部である。器壁が薄く、直線的に延びるもので、口縁端部を尖らせている。外面には、暗黄色の自然釉が付着している。灰色を呈し、胎土中に砂粒をほとんど含んでいない。

28－６は、蓋の口縁部と考えられるものである。復元口径は約16㎝で、カエリを持たない。輪状つまみを持ち、扁平な体部を持つものと思われる。灰色を呈し、胎土中に微砂粒を含む。

28－７は、坏の底部である。底面には回転糸切り痕を残している。高台は無く、体部は緩やかに屈曲し、直立するものと思われる。底面以外は回転ナデによって調整される。淡灰色を呈し、胎土中に微砂粒を少量含む。

28－８は、輪状つまみを持つ蓋である。輪状つまみの内側に墨書が見られる。断面台形で、高さ約５㎜のつまみがあり、内面はナデ、外面は、回転ナデで調整される。明灰褐色を呈し、胎土中に白色の砂粒を少量含んでいる。墨書はクニガコミのある漢字１文字で、「国」と判読（註５）される。

註１　『長野県屋代遺跡群出土木簡』財団法人埋蔵文化財センター　1996年

註２　『要害の首塚・地王砦跡発掘調査報告書』三刀屋町教育委員会　1988年

註３　松本岩雄「７出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』1992年

註４　註３に同じ

註５　墨書の判読については、島根県古代文化研究センター森田喜久男氏・島根県立博物館平石充氏等の指導を得た。

第６節　Ⅱ区の調査

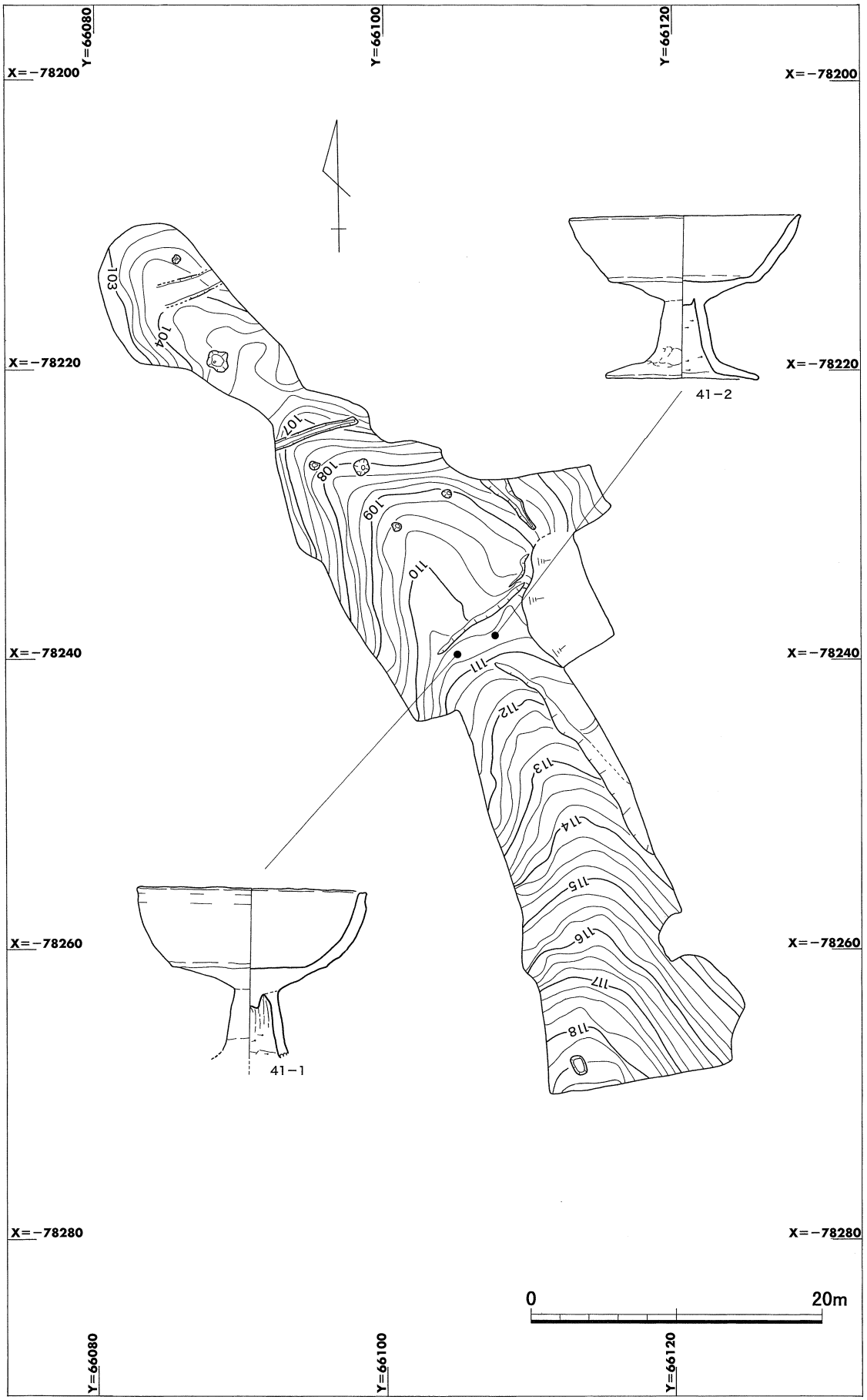
Ⅱ区（第29図）は、遺跡最高所から北へ延びる尾根が、北側のⅠ区付近に向かう尾根と、東側のⅣ区付近に向かう尾根に枝分かれする、標高100～120m付近である。Ⅰ区から続く尾根筋にあたり、古墳が存在した可能性や、戦国時代の山城の遺構の存在を考慮してトレンチを設定した。トレンチ調査では明確な遺構・遺物は出土しなかったが、尾根の一部を切断し、平坦面を作り出したかのような地形が、表面観察からうかがえたため、調査範囲とした。Ⅱ区は、遺跡最高所であるⅢ区から急傾斜で落ちてきた尾根筋が、一旦緩やかになる部分にあたり、Ⅱ区を過ぎ、Ⅰ区近くになるとまた急傾斜になる。Ⅱ区の東西斜面は急斜面となっている。また、Ⅱ区先端で尾根筋が左右に分かれるが、その先の北斜面も急斜面となって、調査区外へ向けて落ちている。Ⅱ区からの眺望は、北側と東側に比較的開けているが、西側は、要害遺跡の在る尾根と、その間の谷しか見えない。各斜面がいずれも急傾斜となっているため、北側から遺跡最高所に上るには、尾根筋を上るしかなく、北側から尾根筋を上ると、必ずこのⅡ区を通ることになる。

Ⅱ区付近の尾根上は緩やかな斜面となっており、尾根筋の幅も比較的広い。尾根筋の東側は尾根筋に並行して段があり、緩やかな斜面となっていた。Ⅱ区付近には７本のトレンチ（第３図）を設定して掘削した。それによると、尾根上にはほとんど埋土が見られず、表土直下のごく浅い位置で地山が検出できたが、東側斜面には黒色土の非常に厚い堆積が見られた。表面観察で見られた尾根筋に並行して見える段が、この黒色土の堆積そのものであって、黒色土を取り除いた後の地山面に見られる段は極めて小さい。また、Ⅱ区で見られる黒色土は、Ⅰ区のものとは異なり、締まりがなく軟らかい土となっており、トレンチでは遺物も見られなかった。こうしたことから、Ⅱ区東側の黒色土による段は畑によるものと考えられた。トレンチからの出土品には近代の陶磁器片が含まれており、標高の高いところまで開墾されていた時期があるようである。東側斜面は、その下方で、大きな谷となって続くが、その谷地形の内側まで黒色土の厚い堆積が続くようである。Ⅱ区東側の谷地形の内側に設定したトレンチ32には、黒色土の非常に厚い堆積が見られたが、遺構・遺物は検出できなかった。

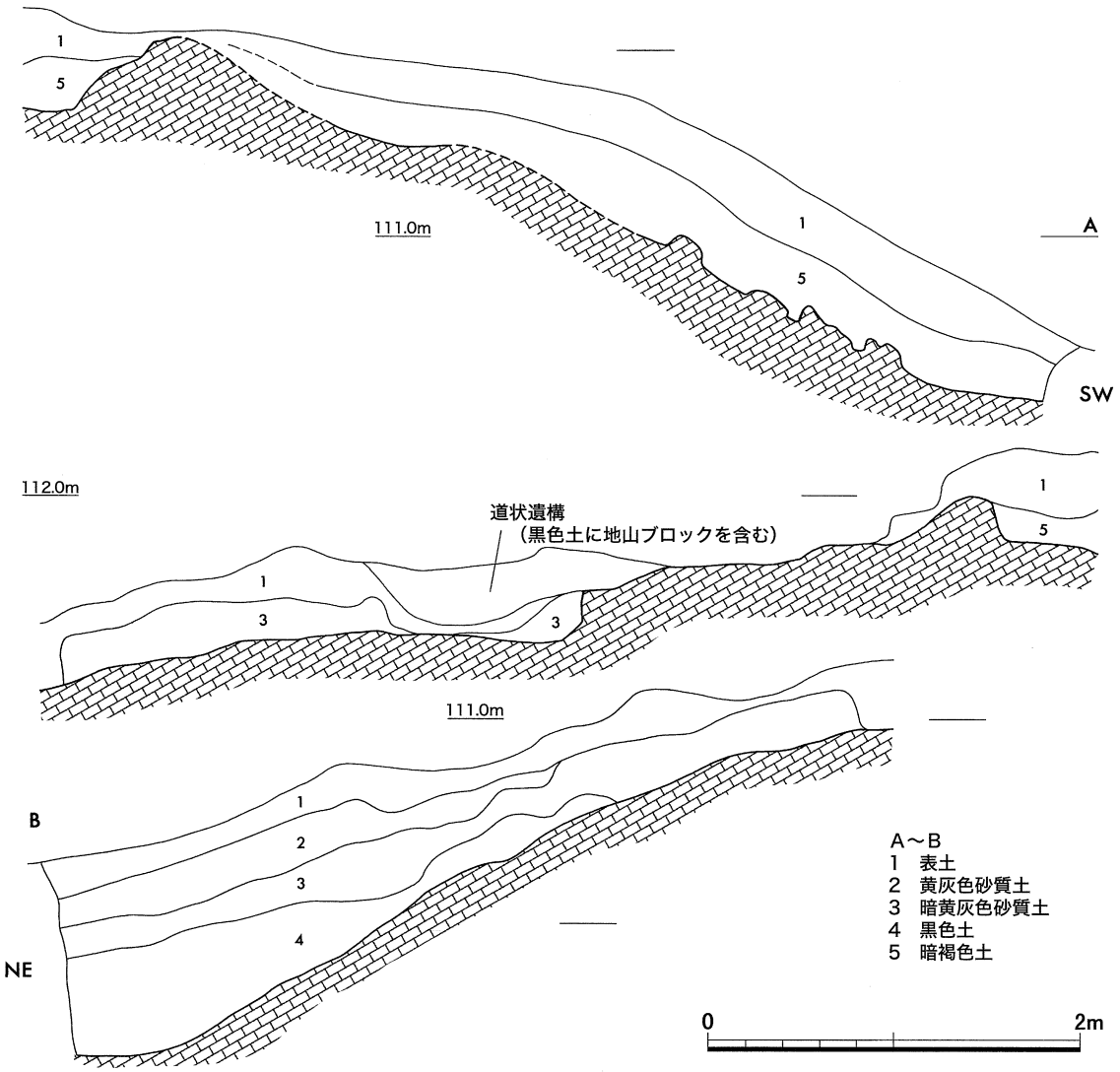
西側の斜面は、要害遺跡との間の大きな谷に面した部分で、急斜面となっている。地表面観察では、大きな凹凸は見られなかったが、地山面に小さな谷が数条入っており、その谷地形の内側にだけ黒色土が見られる。畝状縦堀のような人工的なものではなく、自然地形と思われ、尾根上の黒色土が流入し堆積したものと考えられる。

Ⅱ区からは、ほぼ完形を呈した土師器高坏２点（第41図）の他、土師器甕の胴部と思われる小片が出土している。いずれも古墳時代のものと考えられるが、出土場所（第29図）付近に古墳時代の遺構は見られない。近現代のものを除き、他に遺物は見られなかった。当初設定した調査範囲は、Ⅱ区の北半のみであったが、土師器高坏がほぼ完形を呈して出土したことを受け、南側に約30mに亘って拡張した。その結果、Ⅱ区の全面調査範囲は約600㎡となった。

第30図に図示した土層断面図は、Ⅱ区中程に残した畔のものである。それによると、標高112m付近に尾根筋があり、一部では、完全に表土が流失し地山面が露出した場所も見られる。標高111m付近には、伐木の搬出時に埋められているが、尾根筋を通る道が在ったらしく、幅１m程のレンズ状の窪みが見られる。この道は、不明瞭になりながらも、遺跡最高所まで連続しており、Ⅳ



第29図　熊谷遺跡Ⅱ区地形測量図（調査後）（S＝1：400）



第30図 熊谷遺跡Ⅱ区土層断面図（S＝1：40）

区が位置する東側の尾根から、遺跡最高所に上る道があったものと思われる。尾根筋の南東側には、２黄灰色砂質土・３暗黄灰色砂質土などで構成される段がある。この畔付近では尾根筋との段差は明瞭ではないが、Ⅱ区南側では２m近い比高差を持ち、明確な段となる。３暗黄灰色砂質土の下層に４黒色土があり、この上面が耕作面と思われる。４黒色土は、下方に向かうほど厚みを増し、北東端では50㎝以上の厚みを持つ。尾根筋から南西側は、黒色土の堆積は少なく、５暗褐色土が見られる。５暗褐色土を取り除くと、花崗岩の風化した岩盤（地山面）となり、この地山面が遺構面となる。地山面は、尾根筋を境にⅡ区西側は白色の砂状を呈し、東側はやや赤みを帯びた硬い土層になっている。

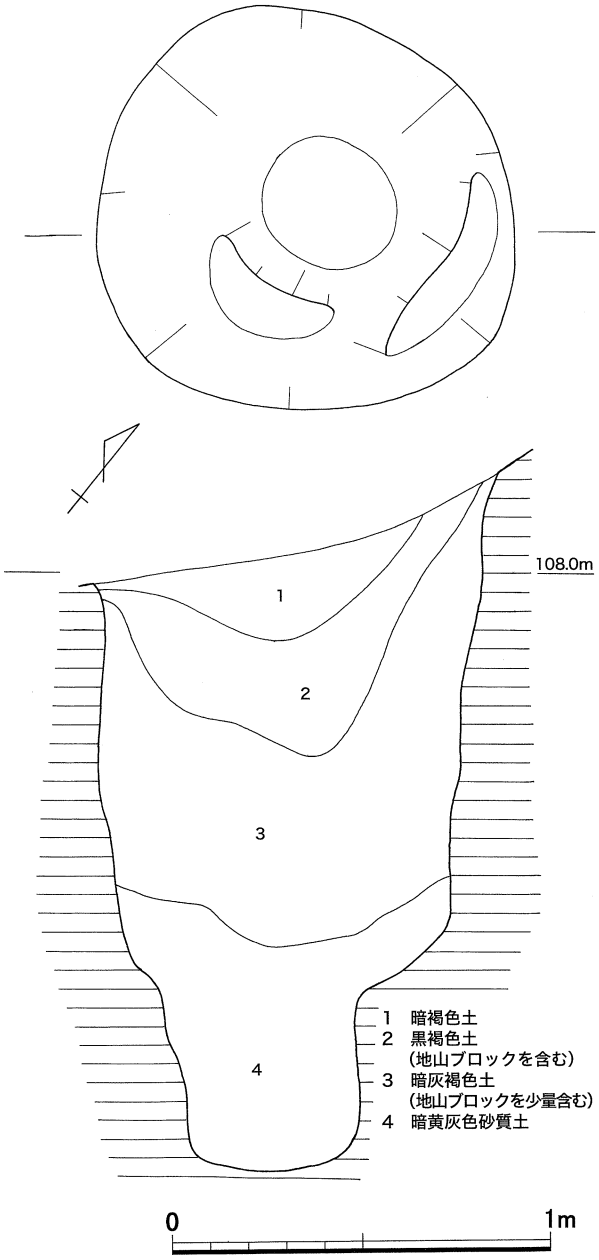
Ⅱ区で出土した土師器などの遺物は、５暗褐色土によって埋められた地山直上からである。また、検出した遺構は、標高112m以下のⅡ区北側にほぼ集中しており、加工段、溝状遺構２条、落とし穴状遺構２基、柱穴状の落ち込み４基や通路状の遺構がある。南側に拡張した部分からは、土壙１基を検出した。いずれの遺構も遺物を伴ってはいないが、落とし穴状遺構２基は縄文時代の、加工段・溝状遺構・柱穴状の落ち込みは山城に伴うものと考えている。また、土師器高坏２点が、ほぼ完形を呈して出土したことから、この尾根上に古墳が在ったものが、山城を造った際に壊されたものと想像している。

縄文時代と考えられる遺構（第31・32図）

第31・32図には、落とし穴と考えられる遺構を図示した。

落とし穴状遺構１（第31図）は、標高108m付近の尾根筋で検出したものである。検出面は、古墳時代の土師器を含む暗褐色土で、比較的軟らかい。その下層に地山ブロックを含む黒褐色土、硬く締まった暗灰褐色土が厚く堆積している。最下層は暗黄灰色砂層で、壁面の土が崩れ落ちて堆積したものと思われる。

落とし穴状遺構１の平面形は、直径約１ｍのほぼ正円形で、検出面からの最深部までの深さは、約1.7mにもなる。検出面からほぼ直線的に落ちているおり、中程でもその直径はほとんど変わらないが、深さ約1.2m付近で急激に狭くなり、底面付近では直径約30cmまで小さくなる。穴の直径が狭くなる部分は、長さ50cm程の三日月形の２つの段になっており、調査時には、これをステップにして這い上がることができた。底面はほぼ平らに作られており、柱穴等は見えない。検出時には、周囲の遺構について山城関係のものと考えていたため、落とし穴状遺構についても、天水溜めの井戸などの可能性も考えた。実際に水を張ってみたが、約２時間で完全に抜けることから、天水溜めではない。

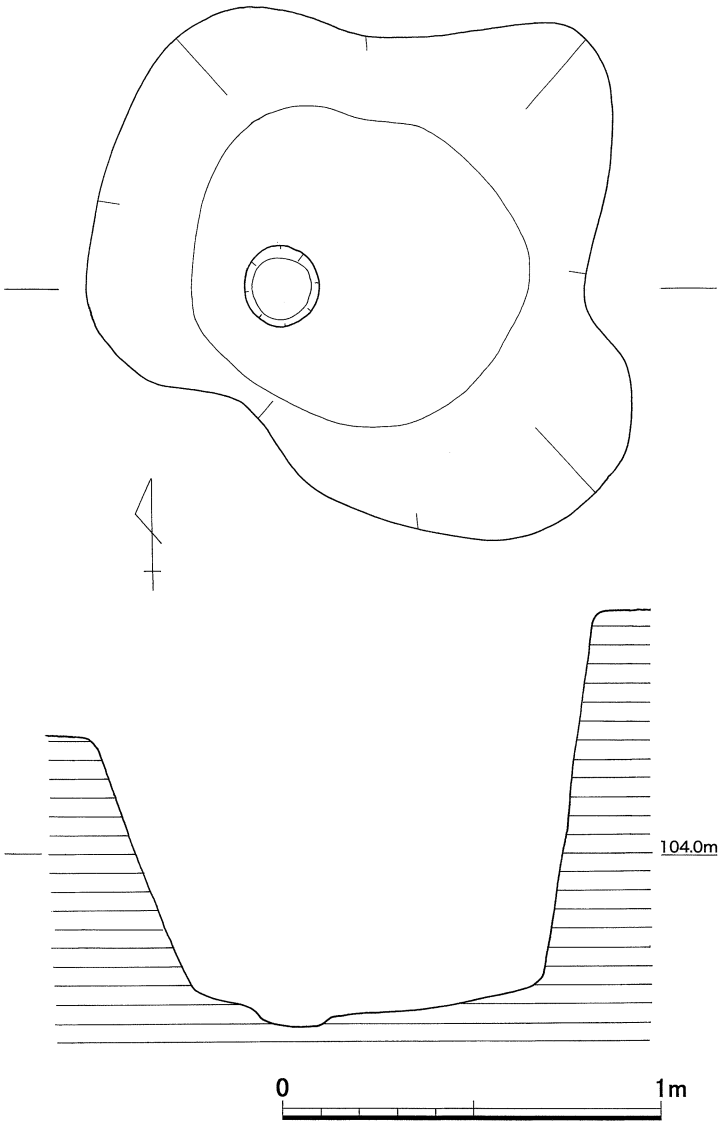


第31図　熊谷遺跡Ⅱ区落とし穴状遺構１実測図
（S＝１：20）

落とし穴状遺構１からは、遺物は出土していないが、Ⅰ区から縄文土器が出土しており、縄文時代の落とし穴であった可能性が考えられる。その場合、ステップ状の段は、獲物を取り上げる際のステップとして使用されたことが想像される。また、落とし穴状遺構１が作られている場所は、急傾斜で落ちている尾根筋が若干緩やかになっている場所にあたり、両側の谷から尾根を越えるのに最適の場所と思われ、その位置をねらって作ったものと思われる。

落とし穴状遺構２（第32図）は、Ⅱ区北端にあたる標高104.5m付近で検出したものである。落とし穴状遺構２を検出した位置は、伐木搬出用の道によって削平されている部分にあたり、遺構上面は、更に上に続いていたものと考えられる。削平されていたために埋土はなく、平面形も不整形になっている。落とし穴状遺構の上層は攪乱土であったが、下層には硬く締まった暗灰褐色土が充満していた。検出面での平面形は、直径1.2m前後の不整形で、深さは1.2mを測る。上面が削平

されているため、元の深さは２m前後であったものと思われる。壁面には凹凸が見られ、落とし穴状遺構１のような直線的な壁面ではない。底面は、直径約80cmの円形を呈し、ほぼ平らになっている。底面の中心より僅かに西寄りの位置に直径約20cmの小さな落ち込みがある。落とし穴状遺構２の位置は、既に削平を受けていたため、元の状況が不明であるが、両側の尾根の形状から、落とし穴状遺構１の位置と同様に傾斜が緩やかになっている部分にあたっていたものと思われる。



第32図　熊谷遺跡Ⅱ区落とし穴状遺構２実測図（S＝１：20）

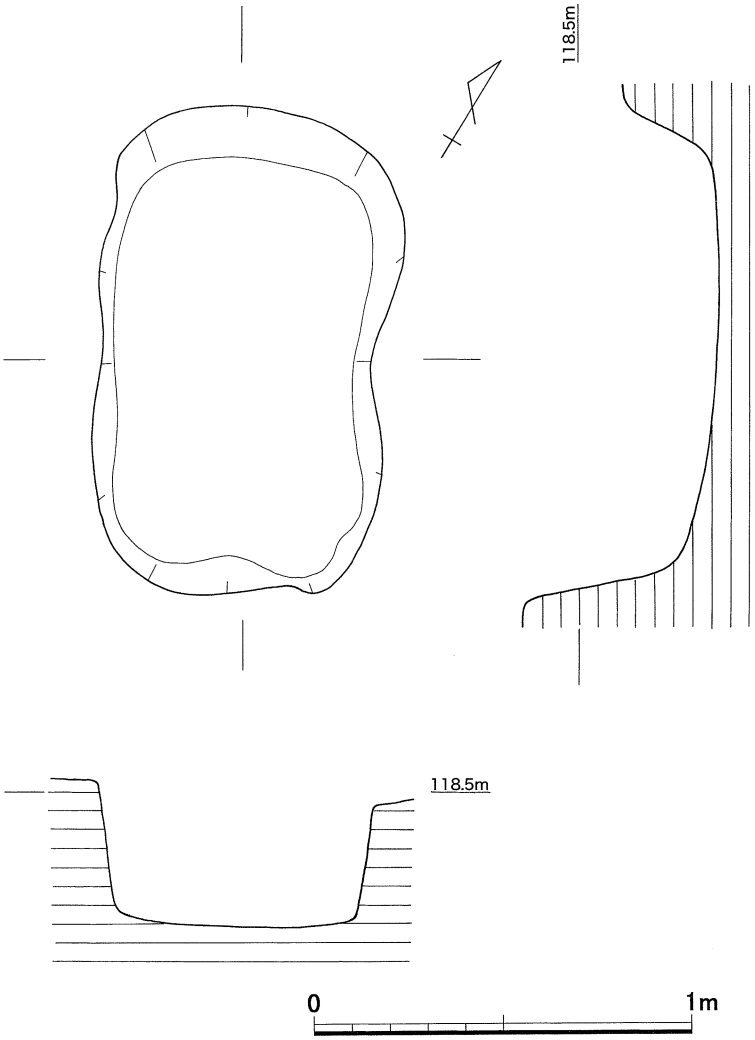
時期不明の遺構（第33図）

第33図に図示した土壙１は、Ⅱ区最高所にあたる標高118.5m付近で検出した土壙である。Ⅱ区南半については、トレンチ24・26で、明確な遺構・遺物が検出できなかったため、当初は調査範囲に含めていなかった場所である。Ⅱ区北半部分を掘削中に、土師器高坏２点がほぼ完形で出土したため、出土地点よりも上方に古墳が在る可能性が高いと考えて、調査区を拡張している。

拡張した部分は、第29図のセクションラインより南側の部分である。東側の段の部分には、黒色土の厚い堆積が見られたものの、大半の部分が表土のみの堆積で、遺物は見られなかった。10cm程度しかない表土を除去すると、すぐに岩盤である地山が検出され、土壙１を除いて、遺構は確認できなかった。

土壙１は、Ⅱ区最南端で検出した長方形の土壙である。長軸を尾根筋の方向に合わせた、長さ約1.3m、幅約0.7m、深さ約0.5mの土壙で、遺物は含んでいない。土壙内の埋土は、暗褐色の軟らかい粘質土で、木棺の痕跡等を検出することはできなかった。床面は、北方向に僅かに傾斜しているが、ほぼ平坦で、窪みなどの加工の痕跡はない。四方の壁面も平滑に加工され、直立気味に立ち上がっているが、角の部分は明瞭ではなく、丸みを持っている。出土遺物がなかったため、時期や性格は不明である。土壙１の東側・北側からは溝などは検出されず、区画や、周囲の加工は見られなかった。また、南側の尾根筋は、伐木の搬出時に切断されていたため、調査できなかった他、西側については、谷に向けて急傾斜で落ちている。

Ⅱ区からは、土師器高坏２点が、ほぼ完形を保って出土したにも関わらず、付近から古墳の痕跡



第33図　熊谷遺跡Ⅱ区土壙１実測図（Ｓ＝１：20）

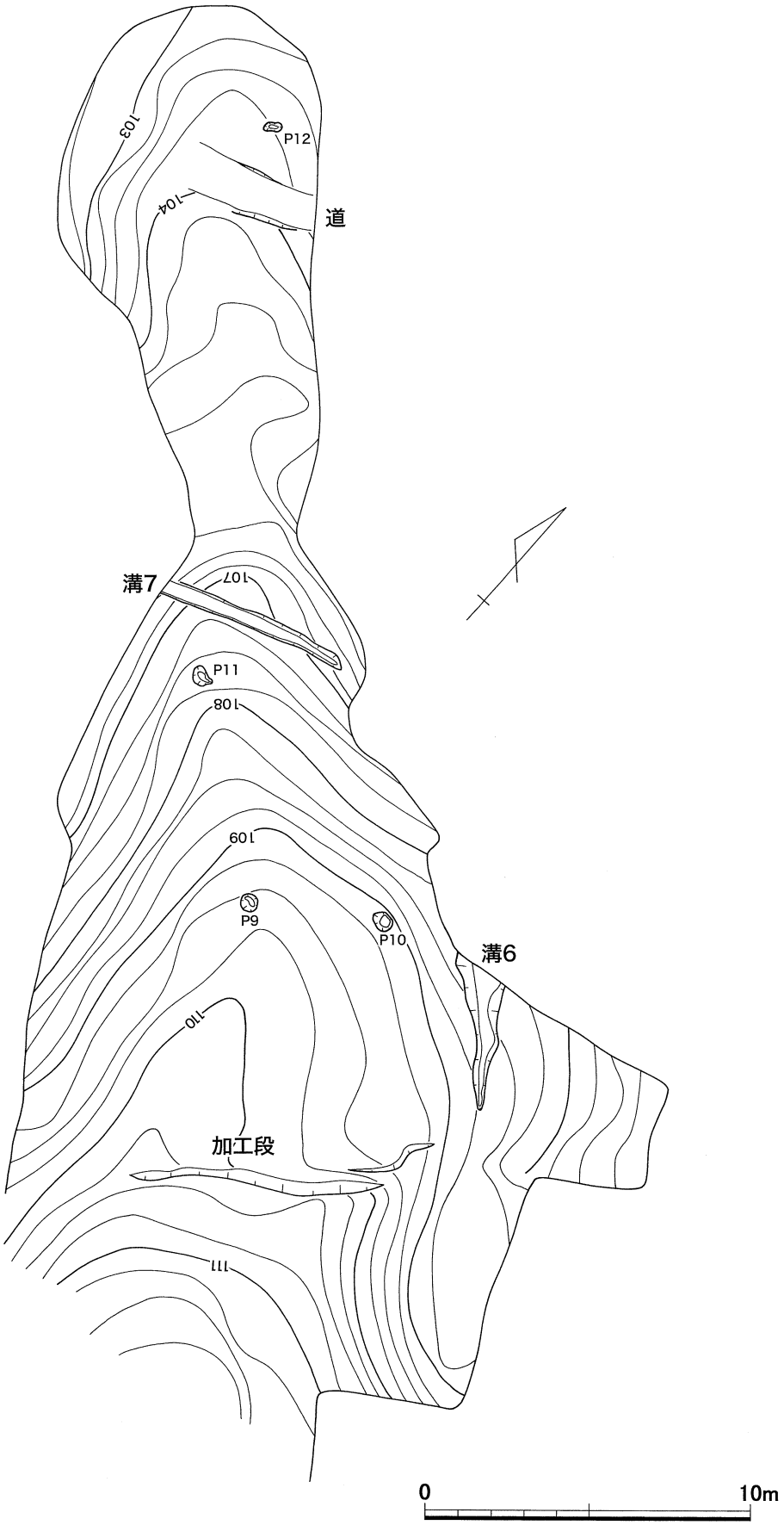
を確認することはできなかった。土師器２点がほぼ完形を保っていたことから、大きく移動してはいないものと思われ、出土地点近くに古墳があったものと考えられる。この付近に古墳があったものとして、後世に、後述する加工段によって削平されたものと思われる。

中世と考えられる遺構（第34図）

第34図に示したものは、落とし穴状遺構を除いた、Ⅱ区北半部分の遺構配置図である。標高110m付近に尾根筋を切断する形で、長さ約８mの段があり、その北側に長さ10mに亘って、平坦面が削り出されている。平坦面中にはＰ24～26の柱穴があり、その周囲を囲うように溝６・７が見られる。また、更に一段下がったⅡ区北端にも道状に加工した部分と柱穴が見られる。これらの遺構から遺物は出土していないが、Ⅲ区との関わりなどから中世の山城に関係した遺構と考えている。

加工段は、Ⅱ区を構成している尾根の先端を切り取ったように加工された場所で、東西約８mあり、中程での高低差は約40cmになる。東側に更に１段のＬ字形の段もあり、何らかの人工的な区画と考えられる。加工段の北側には広い平坦面が作り出されており、平坦面の南側を区画する壁のように見える。平坦面は、東西約８m、南北約10mの長方形を呈し、東西と北側は斜面となって落ち込んでいる。東側の斜面下方には、溝６が見られる。平坦面の側から見ると、この加工段は、東側で大きな壁となっているが、西に向かうほど低くなり、平坦面の西隅付近で消滅する。このことから、西側が通路として確保されているような印象を受ける。

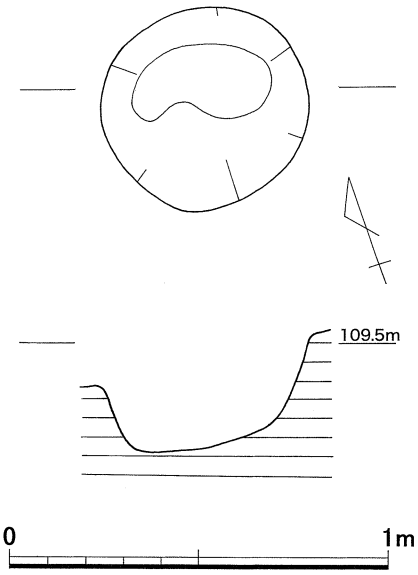
溝６は、加工段によって削り出された平坦面の東側を区画するように作られた浅い溝で、南北方向に約４mに亘って検出した。レンズ状になった窪みとして検出したもので、壁面など明瞭でない部分も見られるが、上方の平坦面が東側に急傾斜で落ち、溝６を経て傾斜が緩やかになっている事から、区画、若しくは尾根筋の切断という意図を持って造られていると考えられる。平坦面との高低差は約40cmである。北側の調査区際近くでは、幅約1.5mあり、南に行くにしたがって狭くなっている。床面はほぼ水平になっているが、壁面は、緩やかに傾斜しており、溝としての体裁はあまり明瞭でない。溝内の埋土は灰褐色砂質土で、水との関係が想像される。溝６の北側は調査区際の壁より先に続いているが、調査区外北側の谷に向けて土砂が流出する危険があったため、これ以上



第34図　熊谷遺跡Ⅱ区北側、落とし穴状遺構を除く遺構配置図（S＝1：200）

の掘削はできなかった。

Ｐ９～11（第36～38図）は、平坦面の北側で検出した柱穴と考えられる落ち込みである。傾斜地に位置し、それぞれの床面の標高はそろっていない。

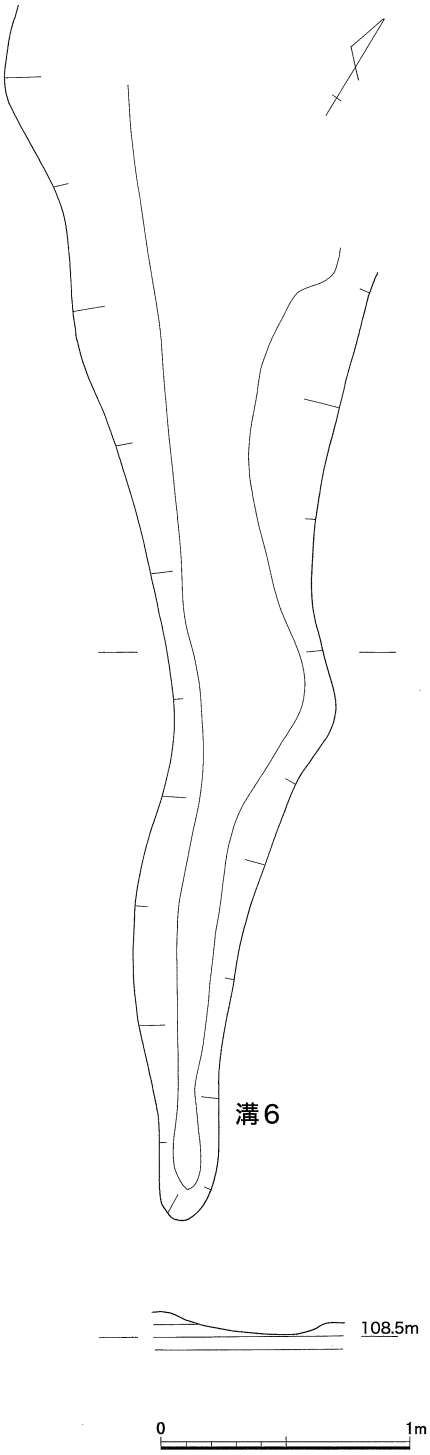


第36図　熊谷遺跡Ⅱ区Ｐ９実測図（Ｓ＝１：20）

Ｐ９（第26図）は、標高109.5m付近で検出したもので、直径27～25cmの楕円形を呈し、深さは15cmである。床面の形状は不整形で、壁面は傾斜している。内部の埋土は暗褐色土であった。

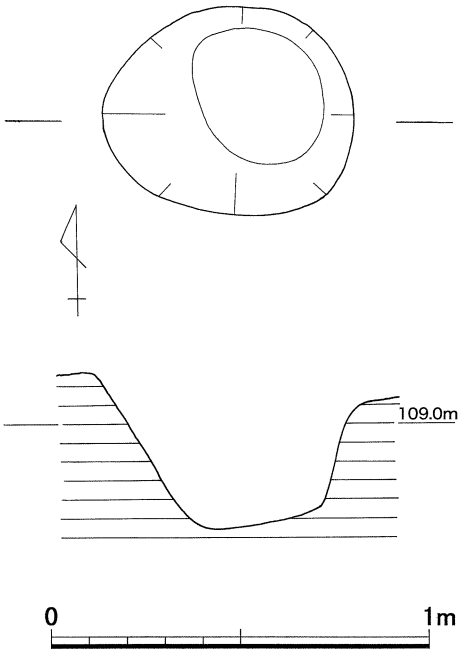
Ｐ10（第27図）は平坦面東端にあたる標高109m付近で検出したもので、直径33～26cmの楕円形を呈し、深さ約20cmを測るものである。底面は円形で、ほぼ平らに作られている。内部の埋土は暗褐色土で柱根は確認できなかった。

Ｐ９とＰ10は、ほぼ同様の大きさを持つもので、その２者を繋いだ場合、加工段に並行し、溝６に直交する位置関係となる。Ｐ９とＰ10の間隔は、ほぼ４ｍとなり、加工段との距離は約８ｍとなるなど、位置関係の規則性が考えられる。

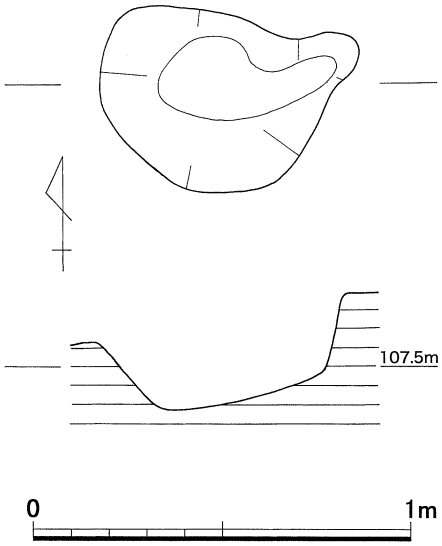


第35図　熊谷遺跡Ⅱ区溝６実測図（Ｓ＝１：30）

Ｐ11（第38図）は、標高107.5m付近で検出した、柱穴状の落ち込みである。加工段やＰ９・10からはやや離れた位置にあり、溝７に近接する。長径32cm、短径22cmの不整形で、床面の形状も凹凸が多く見られる。深さは約10cmである。埋土は軟らかい黒色土で、Ｐ９・10とは印象が異なる。



第37図　熊谷遺跡Ⅱ区Ｐ10実測図（Ｓ＝１：20）

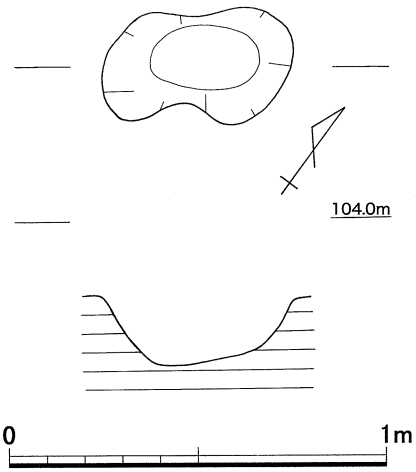


第38図　熊谷遺跡Ⅱ区Ｐ11実測図
（Ｓ＝１：20）

調査区北端付近には、岩盤を削り込み平坦に造成した通路状になった部分（第34図）が見られた。幅約１ｍあり、両側は高低差10㎝程の壁になっている。東側の調査区外から始まり、東西方向に続いており、尾根筋で消滅する。検出長は約４ｍであった。

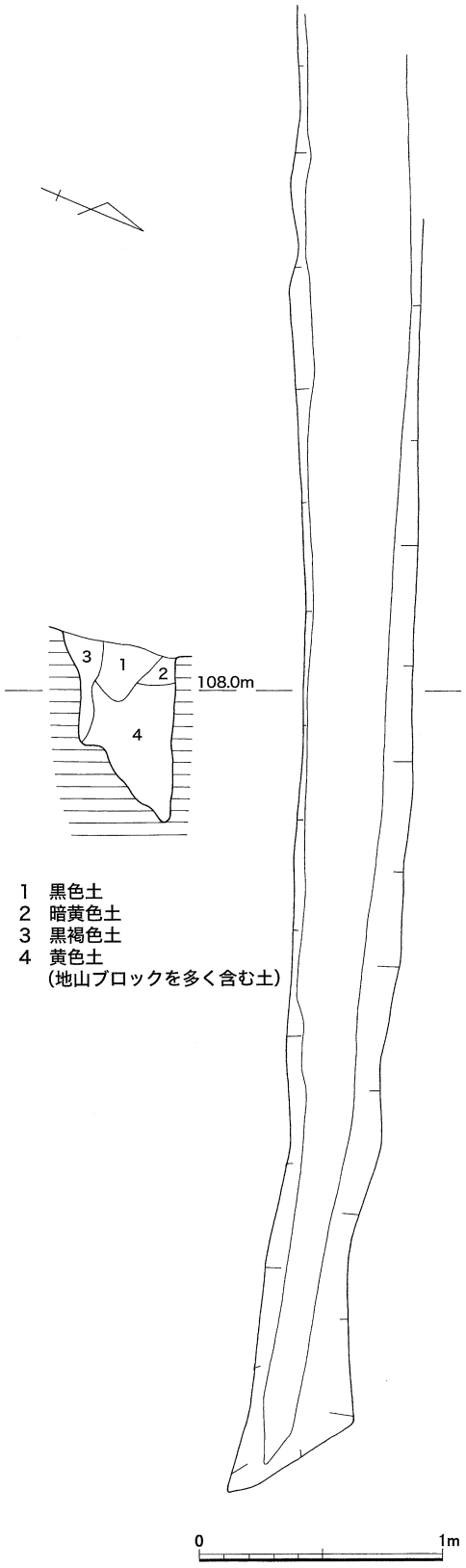
Ｐ12（第39図）は、Ⅱ区北端にあたる標高104ｍ付近で検出した柱穴状の落ち込みである。平面形は円形とは言い難いもので、長径25㎝、短径10㎝で、深さは８㎝とごく浅いものである。上記通路状遺構に隣接する。

溝７（第40図）は標高108m付近に掘られた溝である。尾根を切断するように東西方向に作られており、西側は不明であるが、東側では斜面に抜けず、終わっている。検出長約３ｍで、幅約30㎝、深さ約40㎝である。床面は、大きな凹凸が連続するが、南北の壁面はほぼ垂直に立ち上がっている。溝内部の土は、地山ブロックを多く含んだ４黄色土で、人為的に埋められたものと思われる。また、南側の壁際に３黒褐色土が縦方向に深く入り込んでいる点が注目される。土色から有機質の土と思われ、木製の塀を埋置したものではないだろうか。

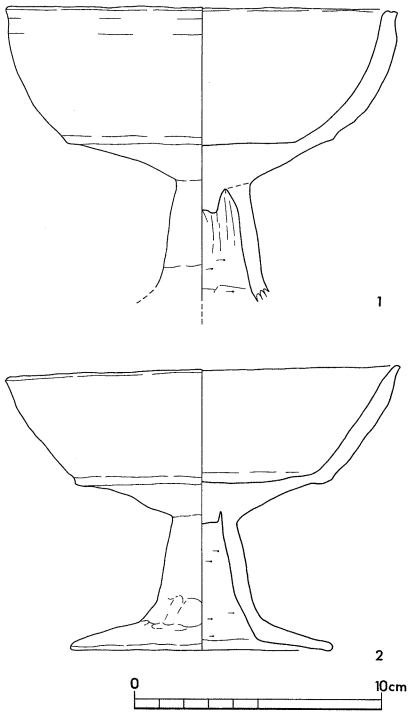


第39図　熊谷遺跡Ⅱ区Ｐ12実測図
（Ｓ＝１：20）

通路状遺構とＰ12は、新しいものである可能性が高いが、落とし穴状遺構を除くⅡ区南半の遺構の大半は、中世の山城に関わる遺構と考えている。



第40図　熊谷遺跡Ⅱ区溝７実測図
（Ｓ＝１：30）



第41図　熊谷遺跡Ⅱ区出土土器実測図
（S＝1：3）

Ⅱ区の尾根は、北側から上る場合は、谷に面した斜面が急傾斜なため、尾根筋を上らざるを得ないと思われるが、尾根筋を上った場合、溝7に設置された壁に阻まれ、一旦東側に迂回するように作られたものと思われる。東側に迂回した後は、溝6を越えて、P9・10がある平坦面に上がり、南側は加工段に阻まれるため、更に西側に迂回して、初めて尾根筋に出ることができると想像される。完備した戦国城館の虎口を当てはめるには門の存在など不備な点が多いが、虎口に近い城館の入り口の機能を持つ施設が存在したものと思われる。

Ⅱ区出土土器（第41図）

Ⅱ区からは、図示した土師器高坏の他、少量の土師器片が出土している、大半は図示できるほどの大きさのない小片であったが、いずれも古墳時代前期末から中期のものと思われ、出土場所も平坦面周辺に集中している。

41-1は、土師器高坏である。脚端部を欠くが、坏部は完形である。坏部の器壁が厚く、口縁部近くになっても薄くならないもので、口縁端部に明瞭な面を持っている。口縁部外面に凹線状のアクセントがあり、口縁部から坏部にかけては緩やかに内湾している。坏部と口縁部の境には垂下する明瞭なアクセントを持つ。脚部との接合は、充填した粘土が脚部内面に大きく肥厚している。肥厚した部分に刺突痕は見られないが、下方向から指で押さえたかのような圧迫痕が見られ中心が僅かに窪む。坏部の外面にはヨコナデが見られるが、内面調整は磨滅のため不明である。淡灰橙色を呈し、胎土中に灰色の砂粒を含んでいる。

41－2は、完形を呈した土師器高坏である。口縁端部を尖り気味に作り、坏部との境までは直線的に続く。42－1と同様に坏部との境に明瞭なアクセントを持っている。坏部と脚部の接続には、粘土を充填しており、脚内面に肥厚した粘土が見える。筒部は、僅かに開きながら直線的に延び、脚端部に向けて強く折れ曲がる。脚端部は丸く納めている。脚部外面には縦方向のハケメが見え、内面はケズリである。脚端部近くはヨコナデである。坏部は内外面ともヨコナデで調整される。淡灰橙色を呈し、胎土中に灰色の砂粒を含んでいる。41－1・2は、坏部の形態や脚部の接続方法から松山編年のⅡ期（註1）に該当するものと思われる。

註1　松山智弘「出雲における古墳時代前半期の土器の様相－大東式の再検討－」『島根考古学会誌　第8集』1991年

第７節　Ⅲ区の調査

Ⅲ区は、熊谷遺跡の最高所に位置する広大な平坦面とその周囲の斜面である。標高約130mの遺跡最高所からは、三刀屋・木次両町の中心部を見下ろし、眼下を斐伊川・三刀屋川が流れ、ほとんど全方向に眺望が開ける。周囲が急斜面で周辺の眺望が大きく開けることから、中世の山城が存在した可能性が考えられる立地で、三刀屋城跡・じゃ山城跡など周知の山城を間近に見る事ができる。現状では独立した丘陵になっているが、元々は西側の要害遺跡付近から先に、「要害の首塚・地王砦跡」として1989年に三刀屋町教育委員会によって調査された丘陵が延びていた。

調査前の状況では、頂部は付近は幅約12m、長さ約70mの広大な平坦面となっていた。この地形は、周囲が急斜面であったために、伐木搬出のための基地として造成されたものと思われるが、それによる地形の改変が著しいため、遺構の残存は危ぶまれていた。この造成面では、105・106トレンチを設定して掘削したが、それによると、 106トレンチ付近では、セメントによって固められた造成土を除去すると、すぐに岩盤にあたり、大きく削平を受けていることが確認された。しかし、105トレンチ付近では、地山面が平らではなく、凹凸や傾斜が見られ、遺構が残存する可能性が出てきた。また、104・112トレンチなど肩部に設定したトレンチでは、切り岸状に削りだした急斜面の始まりを検出したため、場所によっては遺構が残存しているものと思えるようになった。遺構の残存が期待できない部分としては、縁辺部分を除く平坦面東半と、沈泥池が掘られていた 105トレンチの南西側があるが、他の部分は、おおむね現地形が残っているものと認められた。平坦面の周囲の斜面は、いずれも急斜面となっているが、 108トレンチを設定した南斜面の一部や27・28トレンチを設定した東斜面は傾斜がやや緩くなっている。

108トレンチを設定した南斜面は、大きな段のある、すり鉢状に落ち込む地形で、全面に黒色土の堆積が見られた。 108トレンチでは、黒色土が深さ１m以上の厚い堆積を見せるが、その大半は畑及び植林によるものと考えられる。地山面には平面や段は見られず急傾斜で落ち込んでおり、遺構は存在しないものと考えられたが、 108トレンチからは、奈良時代と考えられる須恵器の小片が出土した。この南斜面には遺構はないと思われたが、 108トレンチでの遺物の出土は、その上方の平坦面で使用されたもの以外考えられないため、熊谷軍団との関係を考慮し、全面調査の対象地として遺物の検出に努めた。

Ⅱ区に続く狭い尾根筋は、伐木の搬出時に削られており、地山が露出した状態となっていたため、遺構の残存は望めなかったが、標高125mを越える辺りからは、尾根筋が若干広がるため表土が残る部分もあり、27・28トレンチを設定して掘削した。それによるとこの付近では、盛り土や斜面の切断によって切り岸状に作った部分や小規模な平坦面が数カ所で残っている事が判った。

東側に向かって延びる尾根に続く東斜面部分には、 107トレンチを設定した。平坦面の肩部に掛けて設定したトレンチであったが、平坦面を拡張し斜面を急峻にした、切り岸状に造成されていること事を確認した。 107トレンチ付近から東は急峻な斜面に挟まれた緩やかな尾根筋が続いており、山城に関わる何らかの施設が在ったものと思われたが、地形の改変が著しく、遺構の残存は望めなかった。

104トレンチを設定した平坦面西側の要害遺跡へ続く尾根筋は、軟らかい黒色土の堆積が見られた。尾根筋に小さな段が連続したような地形になっており、段は全て黒色土で構成されている。畑の跡と考えられ、砂地の地山面は明瞭な段にはなっていない。この付近からは、古代から中世のも

のと思われる土師器の小片が出土している。

Ⅲ区北側の斜面は、標高差約50mを一気に駆け下りる急斜面で、その間には段や緩斜面は一切見られない。平坦面の周囲の肩部には、土盛りなどの加工の痕跡を想定していたが、北斜面に至る肩部に設定した106・112トレンチでは、古代・中世の人為的な加工は認められなかった。この付近は、伐木時の地形の改変が著しく、遺構の残存は望みにくい状況であった。

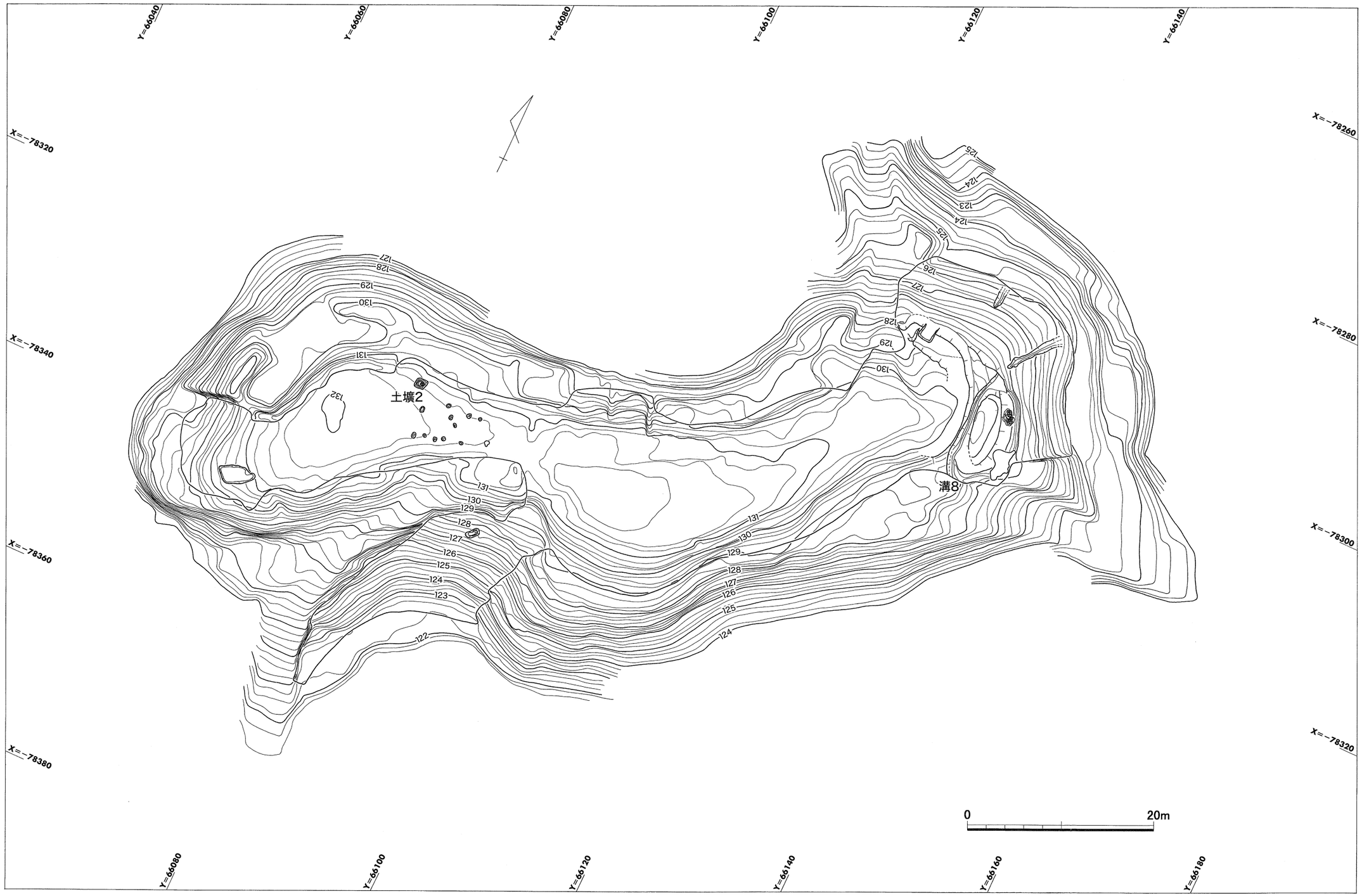
各トレンチの状況から考えると、山頂部の平坦面には、当初東西２カ所のピークが在ったものと思われるが、東側のピークはについては後世の削平が著しく、遺構は残存していない。西側のピークも削平を受けてはいるが、僅かに土壙等が見られた。また、平坦面東端部分については、比較的良好に遺構が残存している。最終的にⅢ区では、東側を中心に溝や加工段などを検出しているが、全ての遺構で、遺物を伴なっていない。これらの遺構の時期は、おおむね中世の山城に伴うものと考えており、奈良時代と考えられる遺構は見られない。

第43図には、Ⅲ区に設定したトレンチでの土層堆積状況を示した。

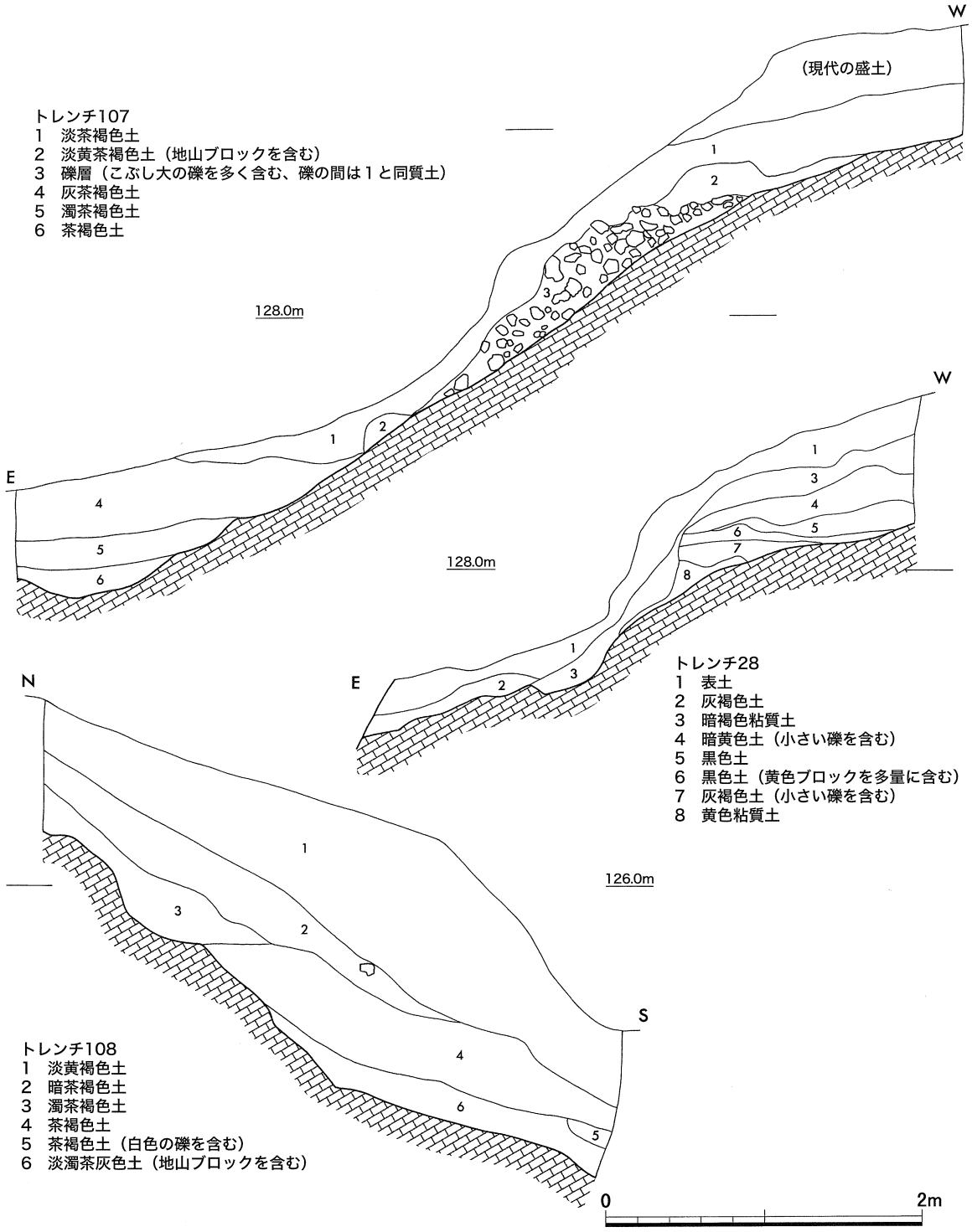
107トレンチは、東に延びる尾根に面した平坦面肩部に設定したものである。伐木の搬出時に若干の採土や、盛り土が見られるが、１淡茶褐色土などによって埋められた面が遺構面と考えられ、トレンチ上方部分の平坦面が地山を削りだして作っていることが判る。削りだして作った平坦面からほぼ連続して、３の礫層が見られる。３礫層は拳大程度の大きさの角礫によって構成される層で、明らかに人為的に盛られている。この角礫は、山頂の平坦面に見られる岩盤を割り取ったものと思われ、山頂部の平坦面を造成し、平坦面を広げるとともに、周囲の斜面を急傾斜にする意図があったものと思われる。３礫層の下に見える２淡黄茶褐色土は、地山ブロックを含んでいることから、３礫層と同様のものと思われるが、切られているように見えることから、４灰茶褐色土以下の土は、２淡黄茶褐色土より後に堆積したものと考えられる。これらの土は、108トレンチの堆積土によく似ており、後世の畑によるものと考えられる。107トレンチからは遺物は出土していない。

28トレンチは、平坦面東端からⅡ区へ続く尾根筋に向かう部分に設定したトレンチで、人為的な盛り土を検出した。この付近での地山面は、現地表面より約80cm下方にあり、50cm近い盛り土を施されているようである。３暗褐色粘質土が、盛り土全体を覆っており、旧表土であった可能性が高く、その下方に、互層になった土が10cm程度の厚みで積み重ねられている。盛り土が施された先端は、ほぼ垂直になっており、その下には、３暗褐色粘質土が落ち込んだ溝状の窪みも見える。この窪みは、完掘後（第46図）はあまり明瞭ではなかったが、その下方に続く斜面との間で明確な傾斜変換点になっている。

108トレンチは、南斜面に設定したトレンチである。地表面では、図中の標高126.2m・125.9m付近に見られるような明瞭な段が、数段見られたが、この段は下層には達していない。表土付近だけの後世の加工であり、近年の植林に伴うものである。表土から続く１淡黄褐色土の厚い堆積を取り除くと暗褐色系統の硬く締まった土層が見られ、地山面は、地表下約1.5mの位置になる。後になって、この直上の標高128m付近で、近代の埋め甕が埋置された状態で出土した。埋め甕は地山面に掘り込まれており、掘り込み面がかなり低いことから、108トレンチの堆積土のほとんどが近代以降の畑によるものと考えられる。５茶褐色土や６淡濁茶灰色土には地山ブロックを多く含んでいることから、山頂部の土を削りだして南斜面を造成したものと思われるが、その土量は膨大なものである。また、４茶褐色土からは須恵器甕片が出土しており、付近に須恵器を伴う遺構があったも



第42図　熊谷遺跡Ⅲ区地形測量図（調査後）（S＝1：400）



第43図　熊谷遺跡Ⅲ区土層断面図（S＝1：40）

のと考えられる。

山頂平坦面西側の遺構（第44図）

山頂の平坦面は、大半の部分が削平を受けており、良好に遺構が残存している部分は見られなかったが、Ⅲ区西よりの部分で、柱穴状の落ち込みと方形の土壙が検出された。

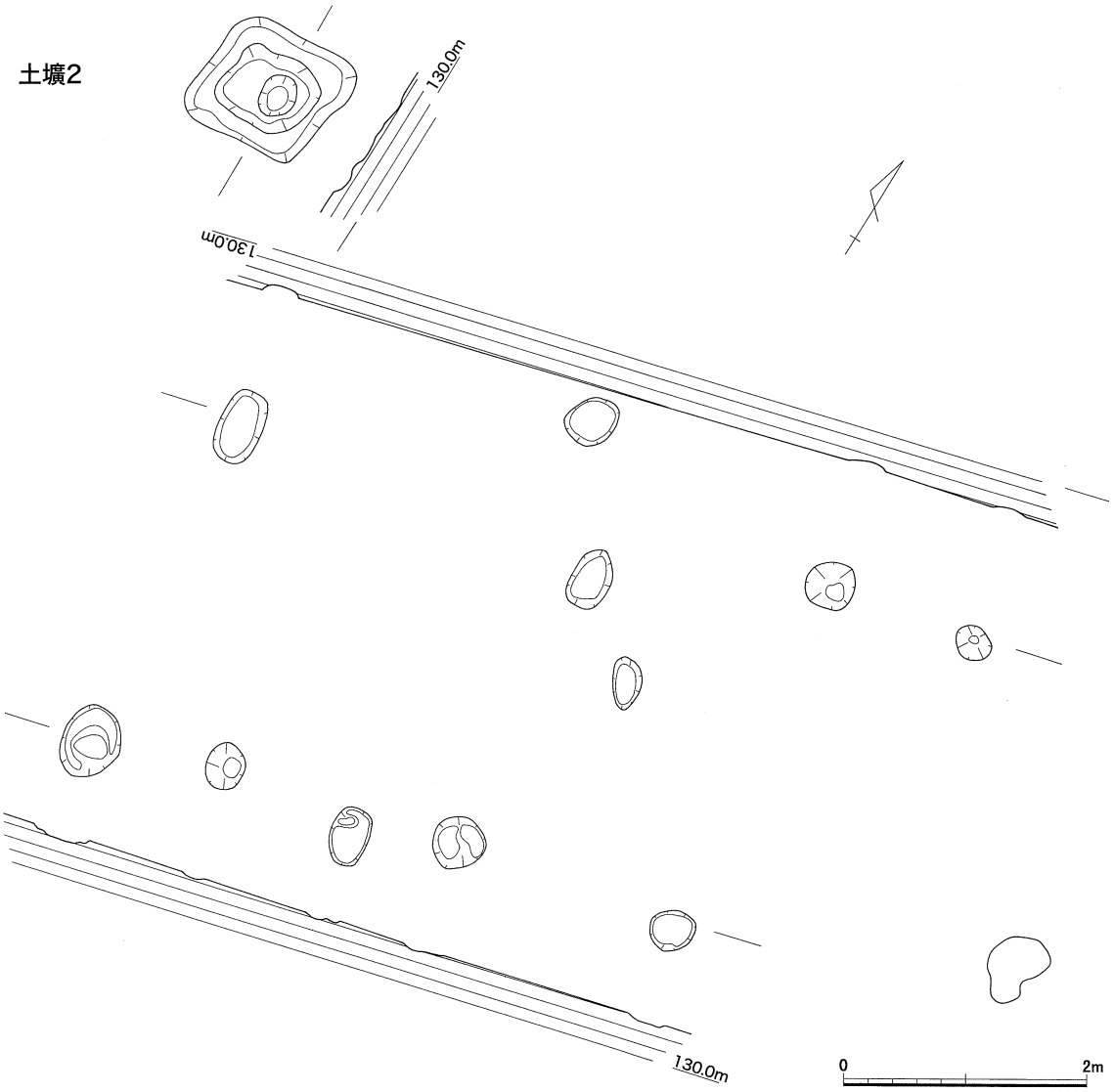
柱穴状の落ち込みは11カ所で検出した。いずれも直径30cm前後の円形のもので、非常に浅い。黄褐色砂質土を含んでいる。2～3列程度のまとまりで、直線的に並んでいる様に見え、柵列の可能性がある。

土壙２は、Ⅲ区西側の柱穴状の落ち込みが多く見られた場所の近くで検出した、ほぼ正方形の土壙である。一辺約１ｍのほぼ正方形を呈し、内側に更に２段に落ち込む形状を呈している。上面が削平されている可能性が高く、非常に浅いが、各壁面は明瞭である。柱穴状の落ち込みとほぼ同様の暗褐色砂質土で埋まっている。

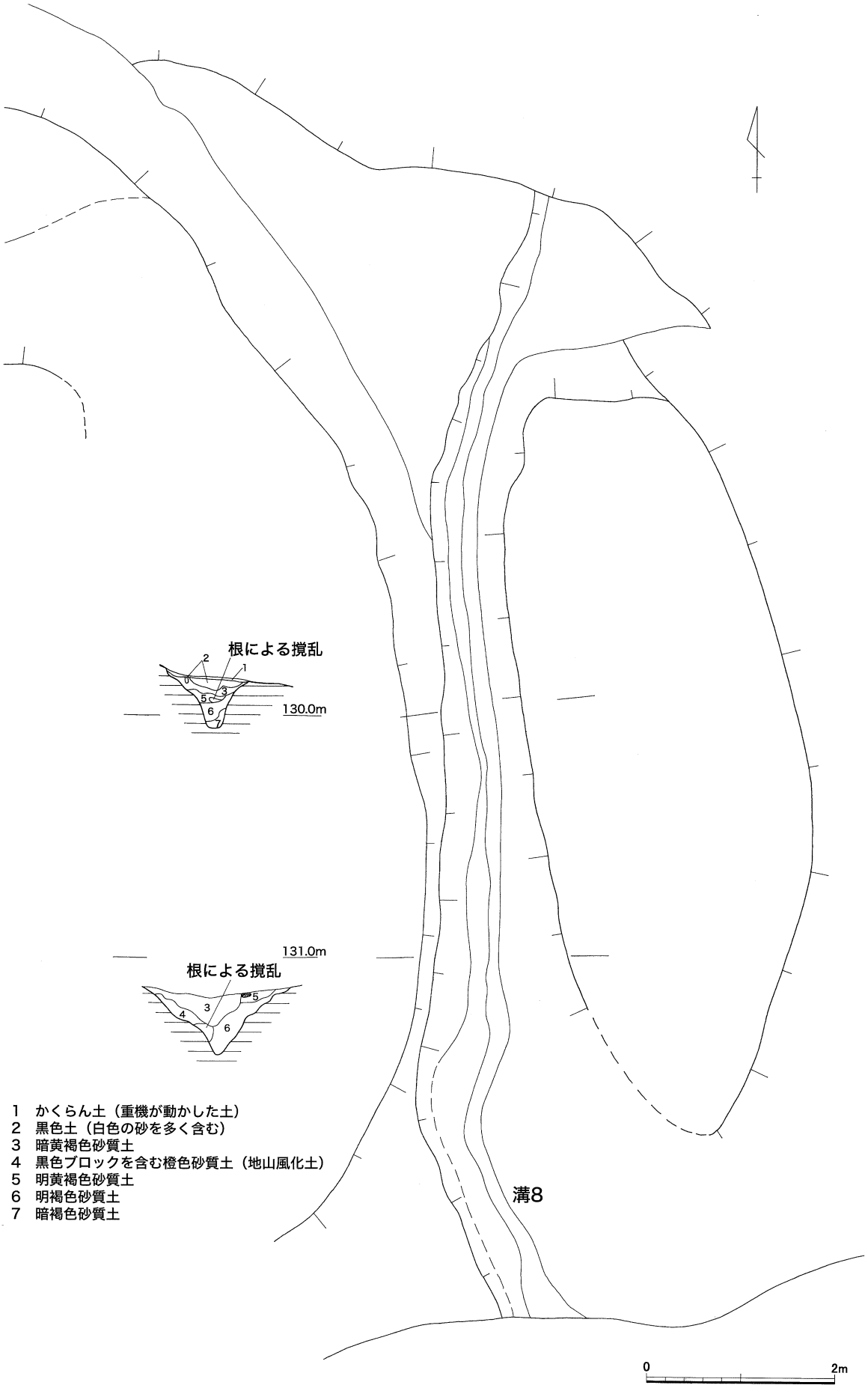
Ⅲ区東側の遺構（第45～48図）

Ⅲ区東側では、山頂部の平坦面より一段下がった位置で、溝を初めとする遺構が比較的良好な状態で検出できた。第48図に示したものは溝８付近であるが、深さ約60㎝の断面Ｖ字形の溝を12ｍに亘って検出した。この溝は、平坦面の先端を切断したもので、その東側に７×３ｍ程の小さな平坦面（平坦面２）を独立させている。この小さな平坦面は、一部で 107トレンチで検出した礫による造成を行っているほか、東斜面には、後述する石垣状遺構を備えており、この遺跡内での重要な部分にあたるものと思われる。

溝８の北西側には、28トレンチで検出した盛り土による平坦面（平坦面３）があり、更にその間にも小さな平坦面（平坦面４）を備えている。これらの遺構群の北東斜面には、縦堀と考えられる遺構２条が延びており、いずれも中世の山城の遺構と考えられる。



第44図　熊谷遺跡Ⅲ区西側実測図（Ｓ＝１：60）



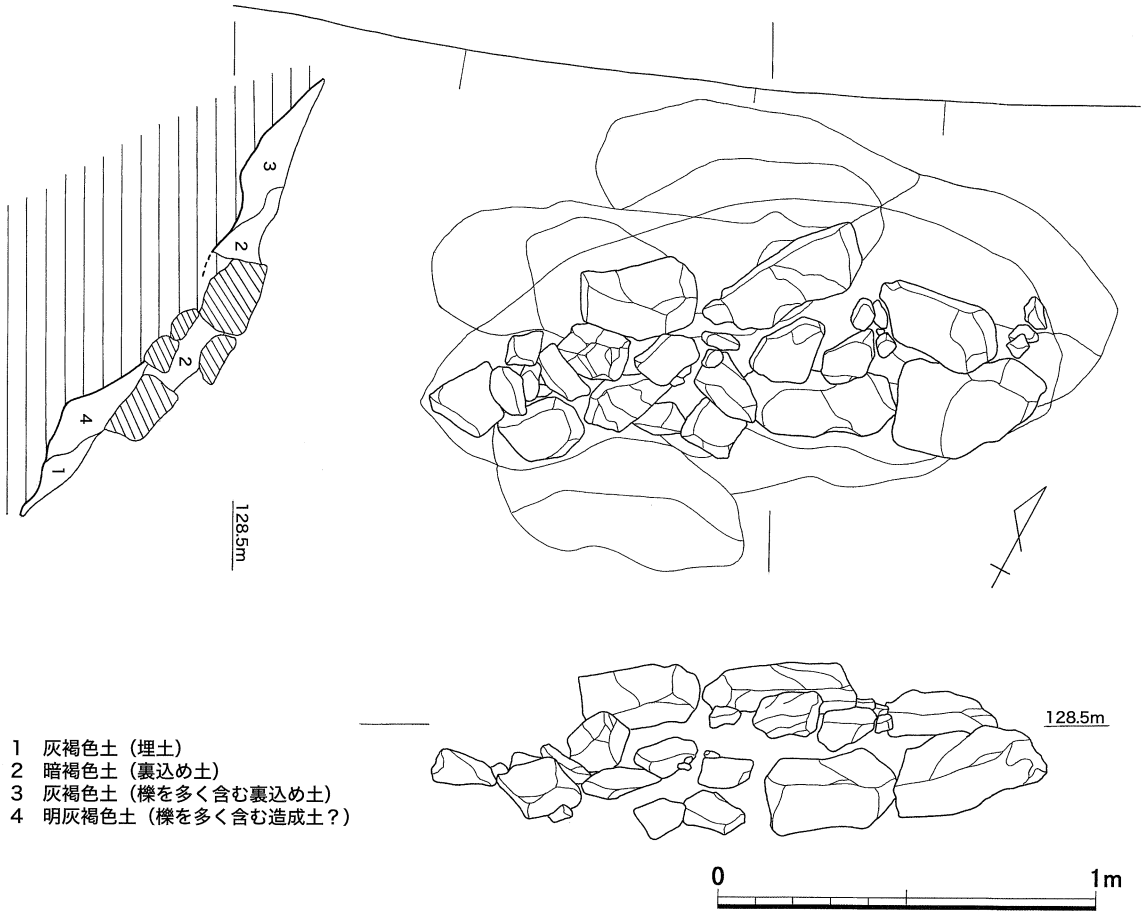
1　かくらん土（重機が動かした土）
2　黒色土（白色の砂を多く含む）
3　暗黄褐色砂質土
4　黒色ブロックを含む橙色砂質土（地山風化土）
5　明黄褐色砂質土
6　明褐色砂質土
7　暗褐色砂質土

第45図　熊谷遺跡Ⅲ区溝８実測図（S＝1：60）

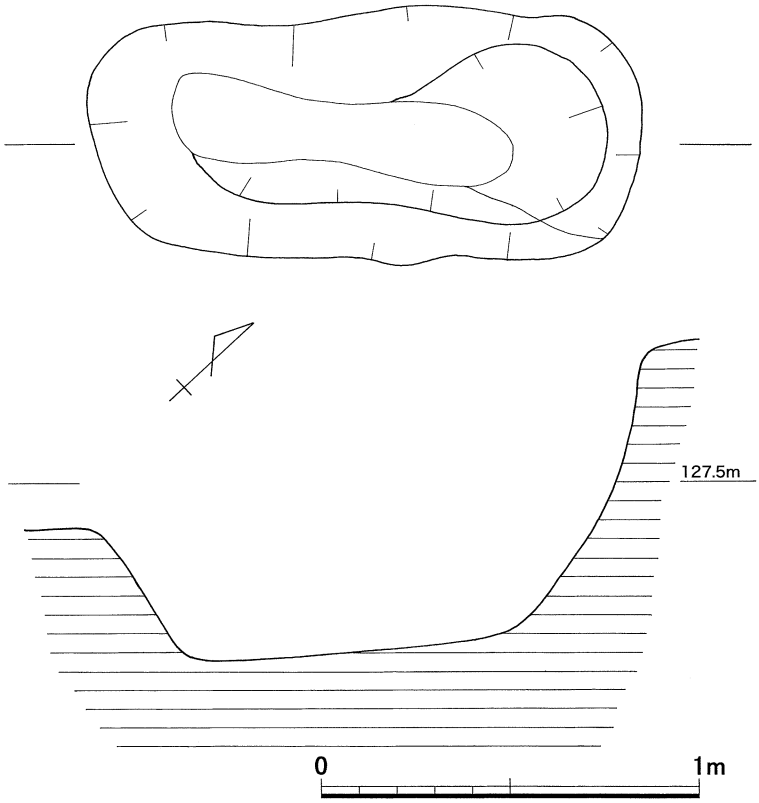
第46図　熊谷遺跡Ⅲ区東側遺構配置図（S＝1：120）

第47図　熊谷遺跡Ⅲ区加工段実測図（S＝1：60）

第48図は、平坦面２の東斜面で検出した石垣状遺構である。斜面を階段状に加工した後、４明灰褐色土で人頭大の石を置き、上方に積み重ねていったもので、大小30点あまりの石を検出した。検出した範囲は幅1.6m、奥行き１m程の狭い範囲であるが、この南側には、礫で造成した斜面もあり、当初は、この斜面全面に施された施設と考えられる。



第48図　熊谷遺跡Ⅲ区石垣状遺構実測図（S＝1：20）



第49図　熊谷遺跡Ⅲ区土壙３実測図（Ｓ＝１：20）

南斜面の遺構（第49図）

南斜面は、砂地の急斜面のため、大半の部分で遺構は見られなかったが、山頂の平坦面より僅かに下った標高128m付近で土壙１基を検出した。全長1.4m、幅0.7mを測る。傾斜地に位置しているため、掘り込み面が不明であるが、検出できた部分で、深さ約80cmである。埋土は、上層には、黒色土が流入していたが、下半は締まった暗褐色土であった。遺物を伴っていないため、時期・用途は不明であるが、周辺の黒色土中からは奈良時代の須恵器小片が出土している。

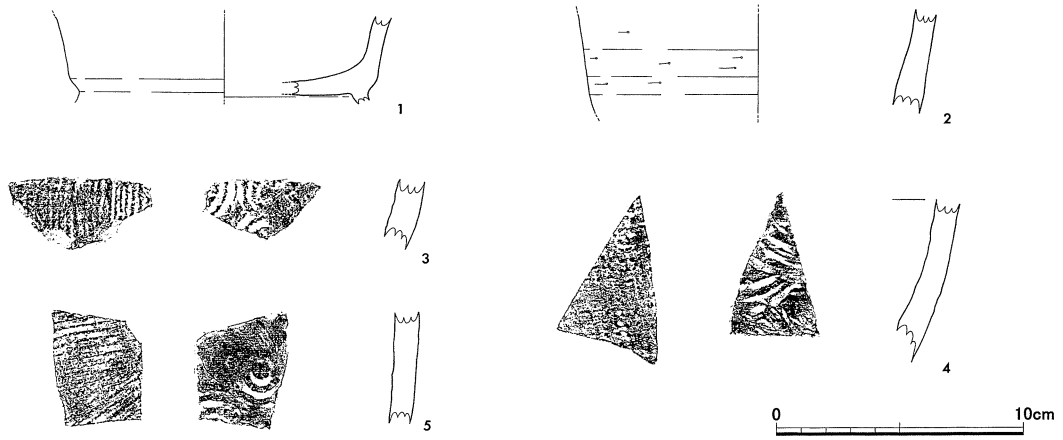
Ⅲ区出土の遺物（第50図）

Ⅲ区での出土遺物は、南斜面の黒色土中に集中している。南斜面の黒色土は、後世の畑や植林に伴うもので、遺物も遺構に伴うものではないが、高低差のある急斜面のため、平地から持って上げられたものとは考えにくく、山頂の平坦面付近に在ったものであろう。Ⅲ区からは、土師器片も僅かに出土したが、図示できたものは全て須恵器であった。

50－１は、須恵器坏である。高台が付くもので、器壁がやや厚い。体部は僅かに開き気味に、直線的に立ち上がり、底部と体部の境目近くに高台を張り付ける。淡青灰色を呈し、胎土中に砂粒をほとんど含まない。口縁部と高台の先端を欠いているが、奈良時代のものであろう。

50－２は、須恵器の壺であろうか。内面にナデ、外面に横方向のケズリを残すもので、体部下半の破片と考えられる。

50－３～５は、須恵器甕の胴部の破片と考えられるものである。いずれも外面に平行タタキを、内面に同心円文の押さえ具の痕跡を残す。



第50図　熊谷遺跡Ⅲ区出土土器実測図（Ｓ＝１：３）

第８節　Ⅳ区の調査

Ⅳ区とした部分は、東側に向かって延びる２本の尾根筋の内、北側のものである。南側の尾根筋は、後世の地形の改変が著しく、トレンチ調査においても遺構・遺物の残存が認められなかった。Ⅳ区は、Ⅱ区から枝分かれして東に延びる尾根筋が北方向に僅かに曲がった部分から、北東方向に延びる標高約96mの尾根とその南東向き斜面である。尾根筋は比較的平坦で、Ⅰ・Ⅱ区に比べると幅も広い。北西側斜面は急傾斜で、調査区外へ落ち込むが、南東斜面は、緩やかになっている。畑として開墾されていたようで、南東斜面には２～３段の大きな段が見えるほか、尾根筋にも数条の道が走っている。尾根筋は、北東へ向かって延びており、緩やかな傾斜のままで調査区外へ続いている。調査地の北東側を東西に走る国道314 号線付近では、この尾根筋にも何段かの平坦面や段があり、山城を連想させる地形になっている。しかし、それも尾根先端付近のみで、Ⅳ区付近では、明瞭な加工の痕跡はない。

トレンチ調査では、Ⅳ区付近に11箇所のトレンチを設定して掘削した。それによると、尾根筋の堆積土は比較的薄く、尾根筋を切断するように数条の道が走っている点が確かめられた。また、南東斜面の段は、畑によると思われる暗灰褐色粘質土の厚い堆積によるものであった。この時点では、明確な遺構は確認できなかったが、南東斜面の暗灰褐色粘質土からは、須恵器の小片が出土した。

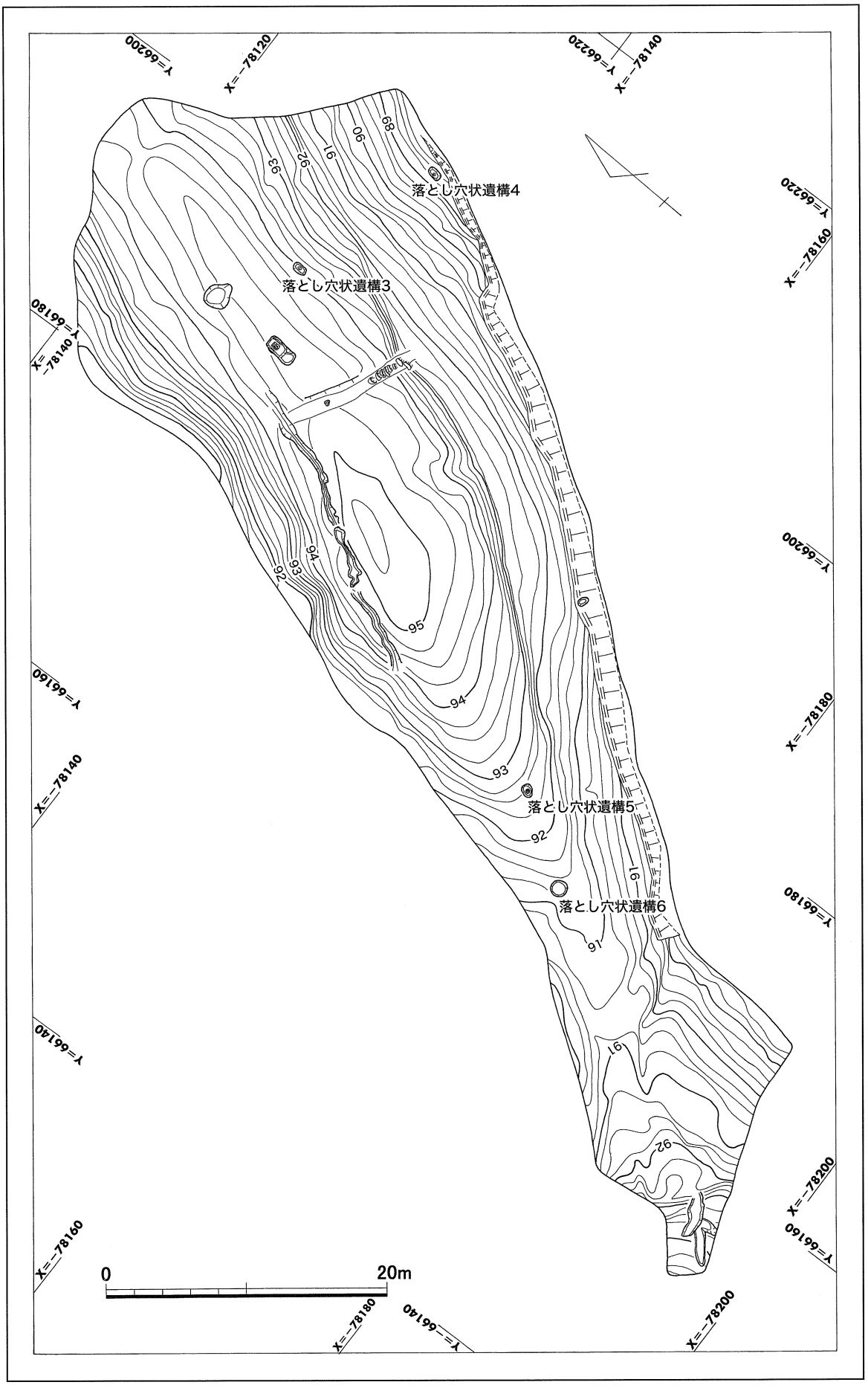
全面調査では、尾根筋とそれに直交する方向で、土層観察用の畔を残して全面掘削を行い、各畔の土層図を第52図に示した。尾根筋に設定したＡ～Ｂ間では、尾根筋に大きな高低差がなく、比較的平坦である事が判る。ほとんどの部分で表土下に５灰褐色土があり、地山に至る。地表面から地山までの深さは10～40㎝程しかなく、比較的浅い。畔南側で落ち込みがあり、複雑な堆積となっている部分が見られるが、２～４の土は、いずれも５灰褐色土より後の堆積で新しいものと考えられる。また、８炭を含んだ暗褐色土は、炭窯によるものと考えられ、近代のものと考えている。８暗褐色土が、５灰褐色土より下層にあることから、Ⅳ区付近は、近代に削平を受け、近代以前の土は尾根筋には残っていないものと考えられる。この状況は直交方向に設定したＣ～Ｄ間も同様で、地山面まで近代に、一度削られているものと考えられそれ以前の堆積土は残っていないものと考えられる。38トレンチでは、暗褐色粘質土中から須恵器小片が出土しており、尾根上に古墳がある可能性を考えていたが、その痕跡を確認することはできなかった。

全面調査では、削平を受けていることから、遺物はほとんど出土せず、遺構も少数が分散して見られるのみであった。主な遺構は、縄文時代と考えられる落とし穴状遺構で、少なくとも４基以上あったものと思われる。落とし穴状遺構は、Ⅱ区で２基を確認したほか、西側に隣接する要害遺跡でも確認されており、この丘陵に、多くの落とし穴が掘られていたものと考えられる。また、この付近には、Ⅱ・Ⅲ区との関係や、調査区外北東側の状況から中世の山城の遺構があるものと考えていたが、それを検出することはできなかった。

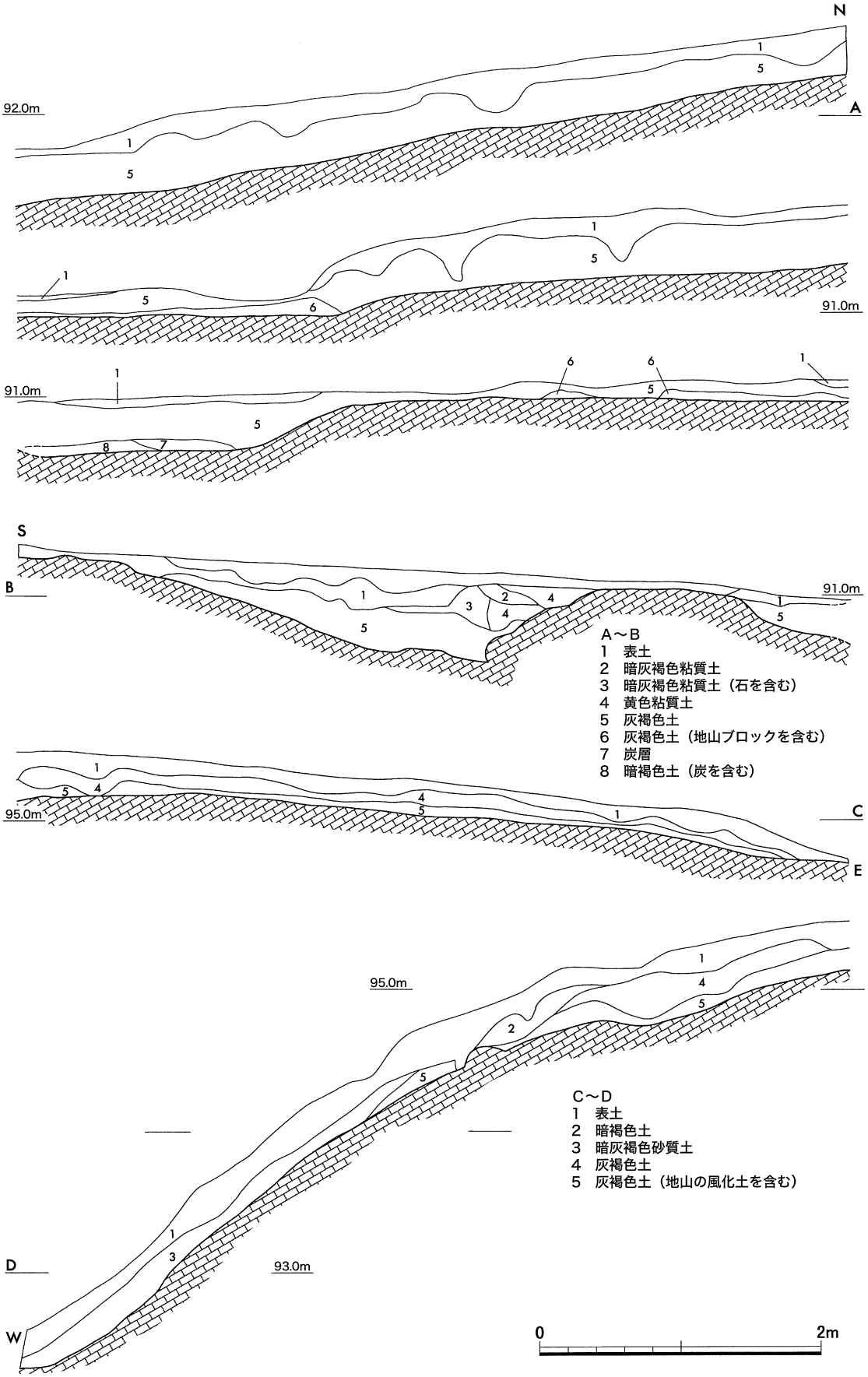
縄文時代と考えられる遺構（第53～56図）

Ⅳ区では、４基の落とし穴状遺構を検出した。この内３基は尾根上に位置しているが、他の１基は、斜面下方に位置している。

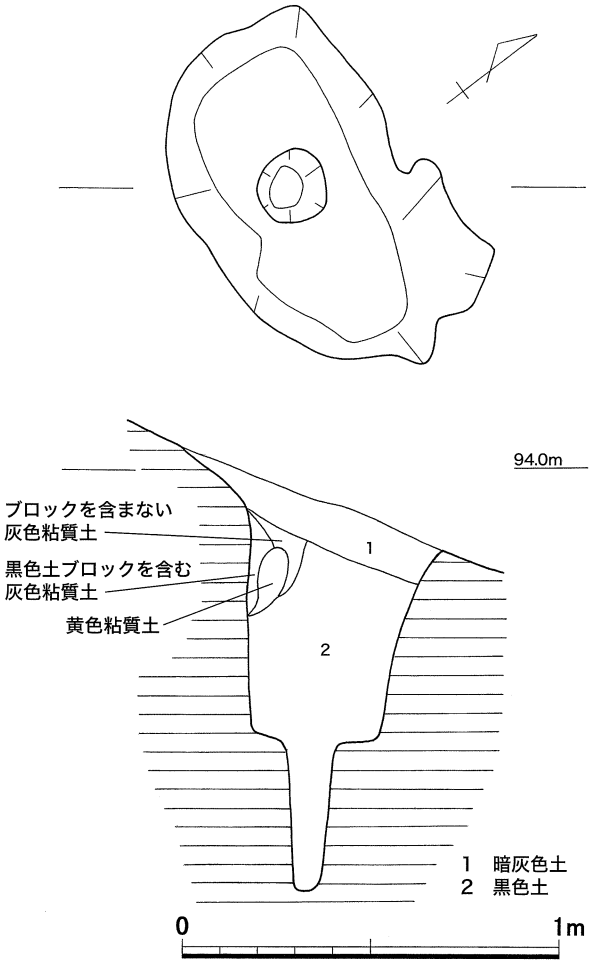
落とし穴状遺構３（第53図）は、Ⅳ区中程の標高94m付近で検出したものである。尾根筋より僅



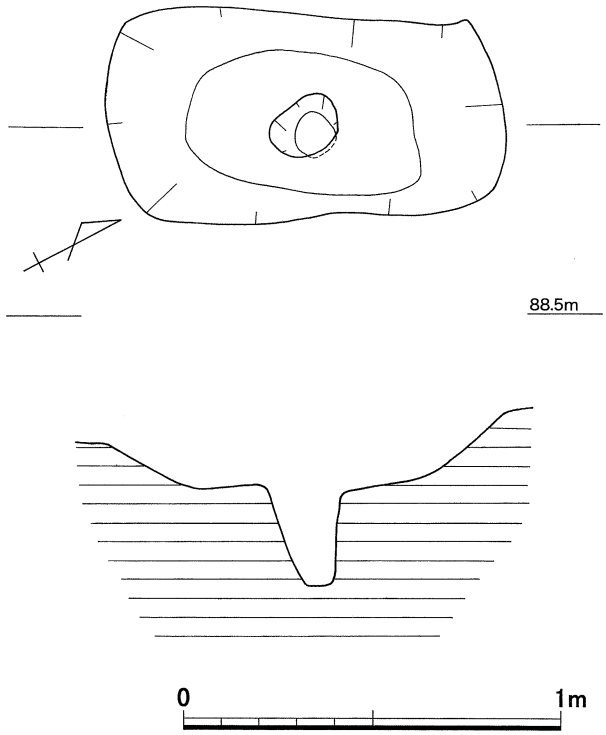
第51図　熊谷遺跡Ⅳ区地形測量図（調査後）（S＝1：400）



第52図　熊谷遺跡Ⅳ区土層断面図（S＝1：40）



第53図　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構３実測図
（S＝１：20）



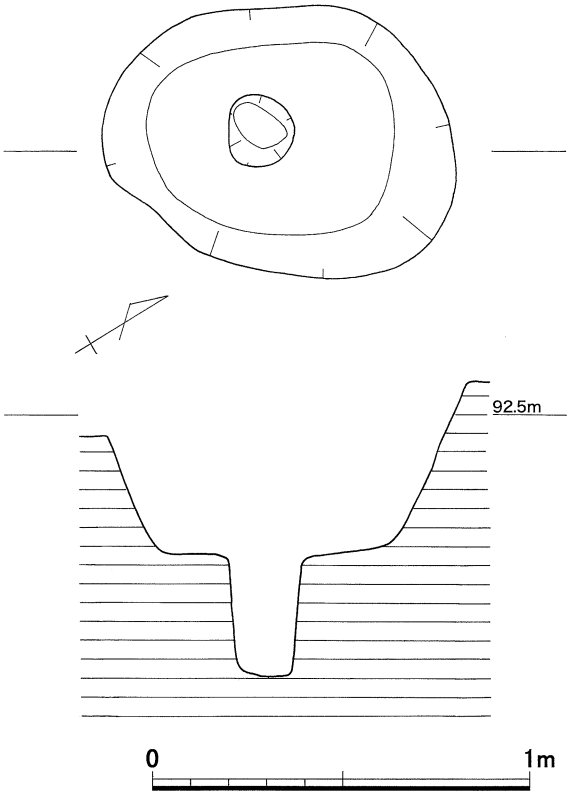
第54図　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構４実測図
（S＝１：20）

かに南に下った位置に掘られており、平面形は不整楕円形を呈している。長径約90cm、短径約60cmで、床面までの深さは約70cmである。床面中央には、ピットが掘られており、ピットの直径は床面で15cm、床面からの深さは約40cmである。検出面付近には凹凸も多く見られるが、壁面はおおむね平滑で直立気味に立ち上がっている。落とし穴状遺構には、上面に根攪乱による土層が見られるだけで、ほとんど２黒色土だけで埋没しており、ピット内でも明確な土色の違いは見られなかった。

第54図は、落とし穴状遺構４である。Ⅳ区南東端で、検出したもので、付近の標高は約88mと低い。尾根筋からは大きく外れ、谷に面した斜面に掘られている。落とし穴状遺構４の平面形は、ほぼ長方形を呈し、長軸長約１m、短軸長約50cmである。斜面下方に立地していた点や、上面が畑として開墾されていたことによって、上面がかなり削平されているようで、検出できた深さは10cm程しかない。床面は、長径約60cm、短径約40cmの楕円形で、壁面は斜めに立ち上がる。床面中央には、落とし穴状遺構３と同様にピットが設けられており、床面付近の直径は約20cm、床面からの深さは約30cmである。落とし穴状遺構４は、平面長方形であるが、尾根筋に平行に長軸を取っている。掘り込み面が検出できなかったため、上面の形状は不明であるが、斜面を横に移動する獲物に対しては有効な形状ではなく、斜面を縦方向に移動する獲物を目標とした設定に見える。落とし穴状遺構４から、真っ直ぐ斜面上方に上がっていくと、落とし穴状遺構３が、やはり尾根筋に平行に長軸を合わせて設置されていることが判り、同一の目標に対して設置されたものと思われる。

落とし穴状遺構５（第55図）は、Ⅳ区中程の尾根筋で検出したものである。付近の標高は約93mである。長径約90cm、短径約70cmの楕円形で、落とし穴状遺構３・４と同様に尾根筋に平行に長軸を取る。床面までの深さは約40cmで、床面は長径約60cm、短径約40cmの楕円形である。床面中央付近にピットがあり、床面付近での直径約20cm、深

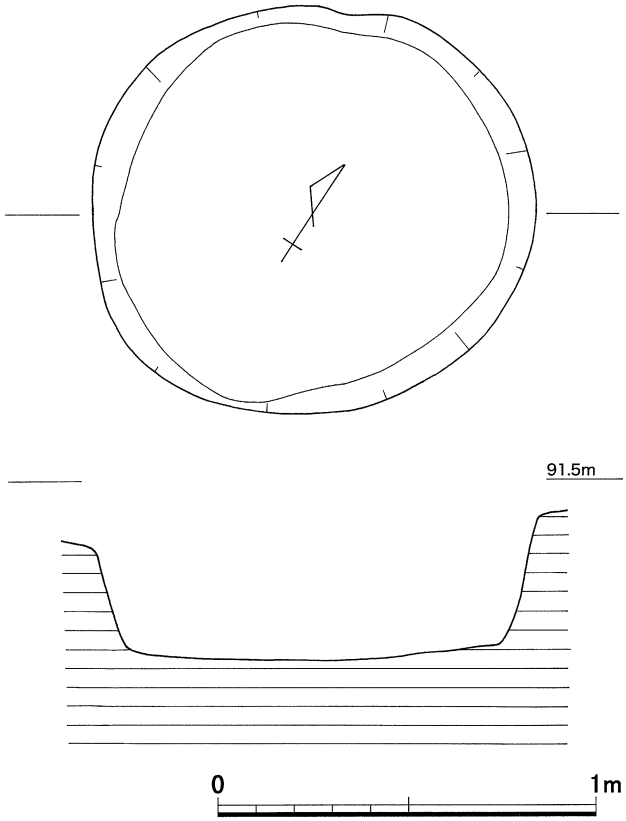
さ約30cmを測る。壁面は斜めに立ち上がっており、掘り込み面では更に大きかったものと思われる。第56図は、落とし穴状遺構６である。落とし穴状遺構５から標高差にして１m程南に下った標高約91m付近で検出した。平面形は、直径約1.2mの円形を呈すもので、床面も直径約１mの円形である。床面は平坦でピットは見られない。上面が大きく削平されていると考えられ、検出できた深さは約40cmであった。落とし穴状遺構３～５とは形状が異なり、Ⅱ区で検出した落とし穴状遺構１・２と同様のものと考えられる。



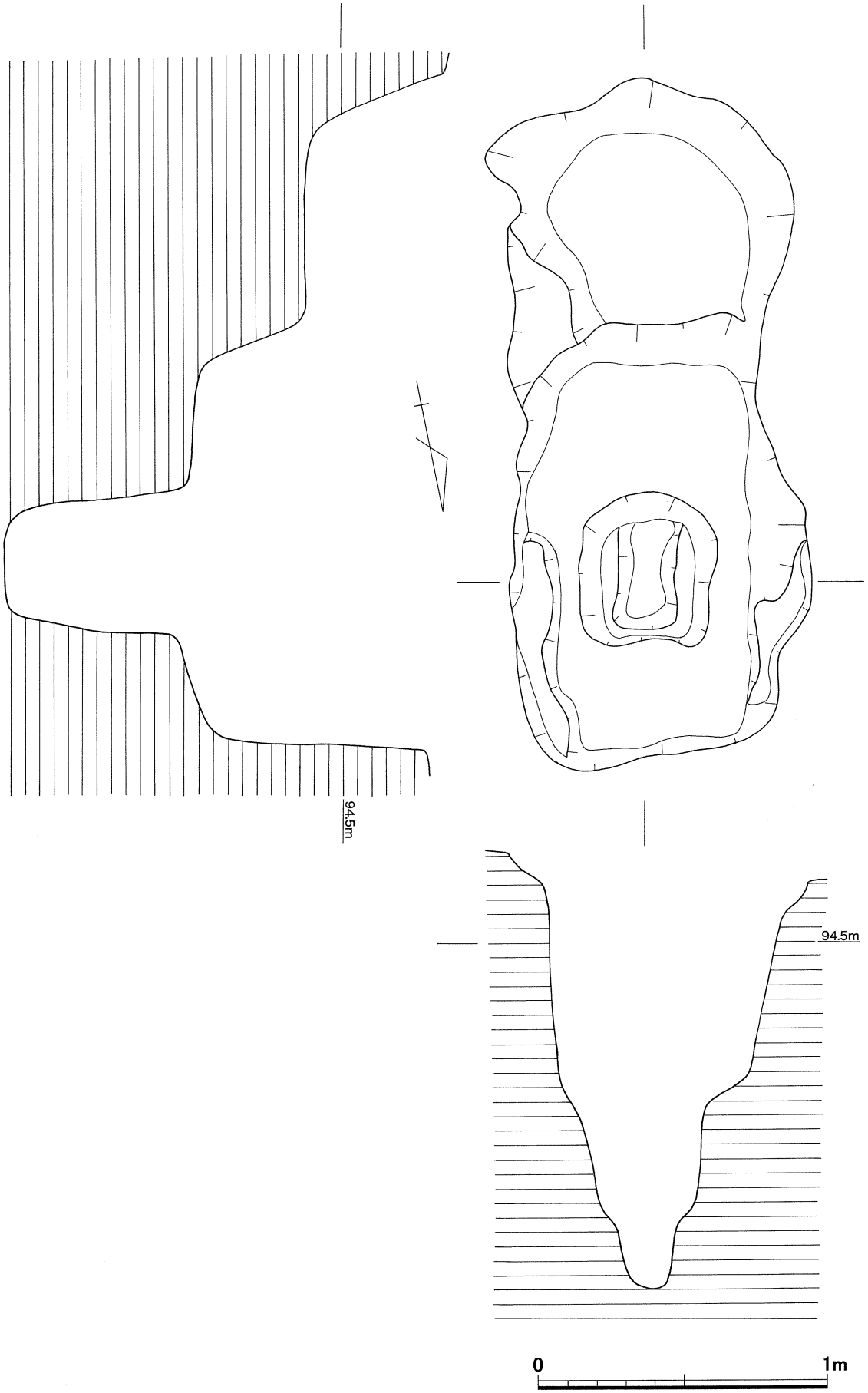
第55図　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構５実測図（S＝１：20）

時期不明の遺構（第57～60図）

第57図に図示したものは、尾根上の標高95m付近で検出した土壙４である。平面形は長方形で、長さ約2.3m、幅約0.9m、深さは約1.5mにもなる。主軸の方向は尾根筋にほぼ一致し、およそ南北方向を取る。特徴的なのはその形態で、４段階に落ち込んだ形状になっている。第１段は、検出面より約50cm下がった位置で、遺構の北端に60cm四方の平坦面を削りだしている。第２段は、検出面より約90cm下方で、長さ約1.2m、幅約70cmの平坦面を持つ。第１段との関係は、あたかも第２段に降りるためのステップのような位置関係になっている。第３段は、第２段中央に柱穴状に落ち込む部分で、落ち込みの上面は、40cm四方の平方形になっており、その40cm下方に「コ」字形のステップを持っている。この「コ」字形のステップは北側が抜けており、南側には僅かに平坦面が残る。検出面からの深さは約1.3mの位置にあたる。最底面は、長さ30cm、幅10cmの長方形で、床面は平坦である。各段は、内側に傾いて検出されたが、いずれも土砂の流出によるものと考えられ、当初はそれぞれ水平であったと思われる。各壁面は、ほぼ直立するが、第２段の東西壁面は、凹凸が多く見られる。土壙４からは遺物が出土



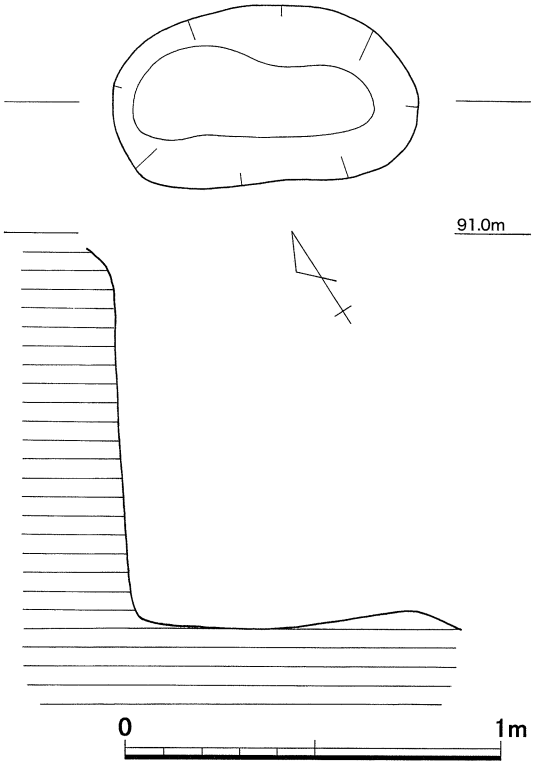
第56図　熊谷遺跡Ⅳ区落とし穴状遺構６実測図（S=1:20）



第57図　熊谷遺跡Ⅳ区土壙４実測図（Ｓ＝１：20）

しなかったため、作られた時期は不明である。遺構の性格も不明であるが、段階的に下方に掘り下げている点や、最深部の位置に対して平面的に長さを取って掘られている点から、非常に高い柱状のものを建てたものと思われる。

第58図に図示したものは、南東斜面下方で検出した性格不明の掘り込みである。畑によって削り出された崖面で検出したため、崖面に立つ浅い掘り込みの形状で検出したが、当初は、深い土壙であったものと思われる。検出面での平面形は長径約80㎝、短径約40㎝の楕円形となる。北側の検出上面と南側の検出面肩部との高低差は約１ｍにもなり、全体としては、断面「Ｌ」字形の浅い掘り込みなっている。遺物が出土しておらず、時期も不明である。

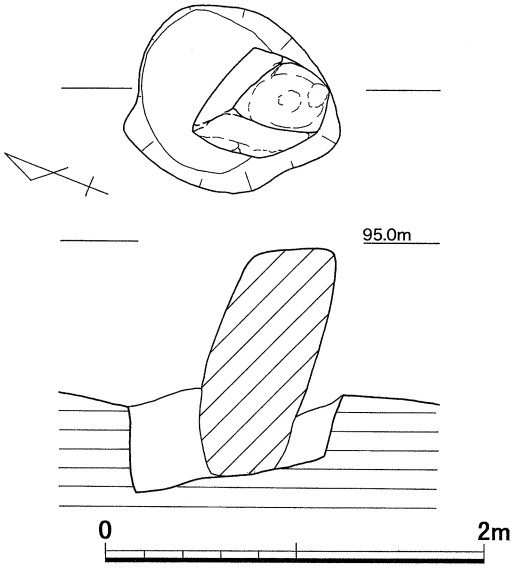


第58図　熊谷遺跡Ⅳ区不明遺構１実測図
（Ｓ＝１：20）

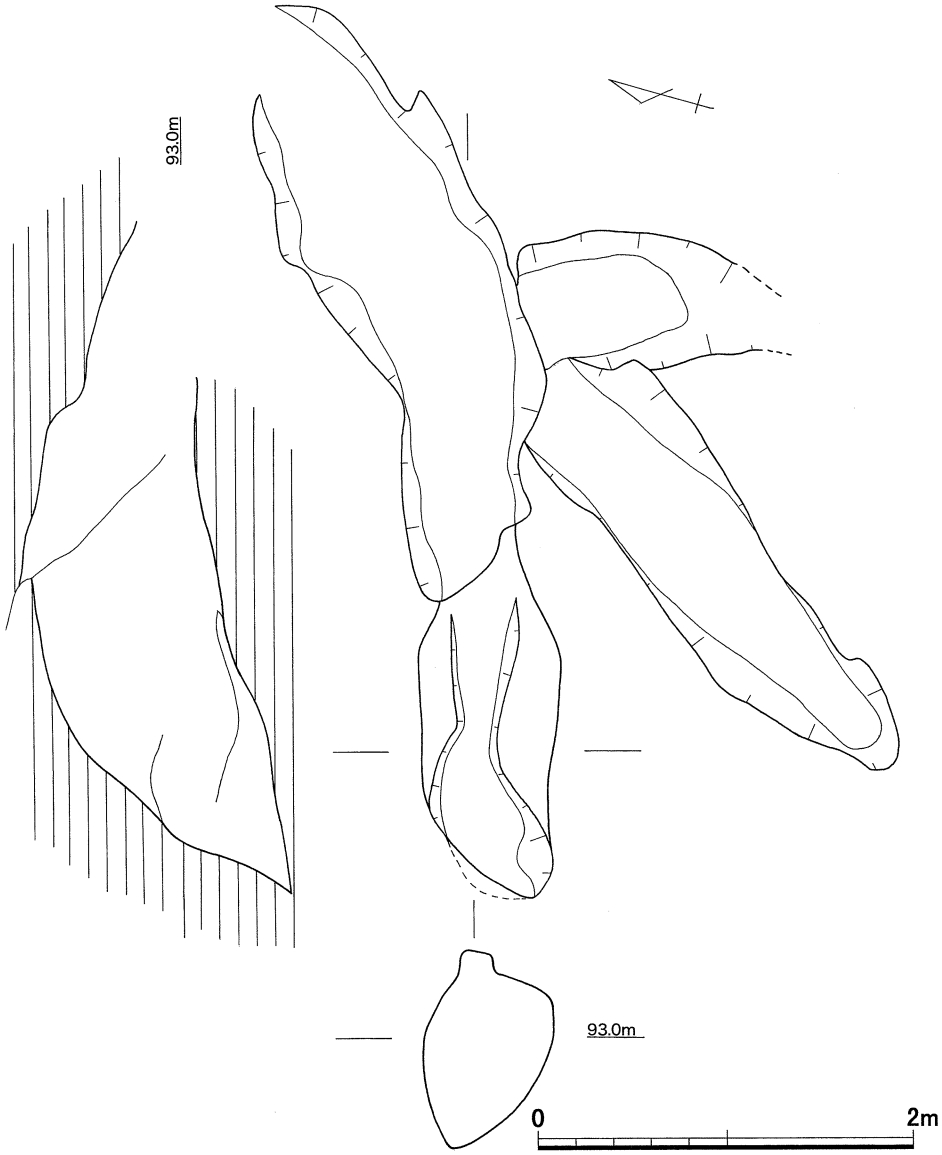
第59図に図示したものは、尾根筋の標高95ｍ付近で検出した、ピットに石を建てた遺構である。直径約20㎝、深さ約10㎝のピットを掘り、その中心付近に長さ約30㎝、太さ約10㎝の自然石を建てている。この遺構のある位置は、尾根筋を横断する道のピークに位置しており、何らかの境界を示すために埋置されたものと思われる。

第60図に図示したものは、Ⅳ区西端で検出した不整形な横穴が集中したものである。東西方向に中心的な横穴が掘られた後、南東側に更に２穴が追加して掘られているもので、それぞれ、床面は平坦なものの、壁面や天井は凹凸が多く見られる。ほぼ東西方向に延びる中心的な横穴は、全長約５ｍあり、西側約２ｍの範囲で、天井が残っている。天井のない東半部分では、床面は水平に延びるが、天井のある西側では、奥へ向かって大きく傾斜している。天井がある部分では、横断面卵形を呈し、縦断面では楔形になって終わっている。床面の幅は、最も狭いところで、約15㎝である。天井の無い東半部分は、緩やかに湾曲して続いており、両壁面は垂直に近い角度で直線的に立ち上がっている。床面の幅は約70㎝あり、壁は東へ向かうほど低くなる。

この部分の南壁から更に２穴が掘られている。いずれも床面が一段高くなっており、中心的な穴よりも床面で10㎝程高い。北東側の穴は長さ1.2ｍに亘って検出し、更に、南へ延びている。検出した部分では天井はなく、現状からは南側にも天井があるとは思えない。壁は、内湾気味に立ち上がっている。南西側のものは、長さ約2.8ｍに亘って検出した。



第59図　熊谷遺跡Ⅳ区不明遺構２実測図
（Ｓ＝１：40）



第60図　熊谷遺跡Ⅳ区坑道状遺構（S＝1：40）

壁面の状況から天井があったものと思われるが、検出時には完全に崩落しており、残っていない。床面は、北端が最も広く、約40cmあるが、奥へ向かうほど狭くなり、南端近くでは約20cm程の幅しかない。

この遺構の埋土は、地山崩落土と思われる橙色砂質土で、天井がある部分の床面直上に水によるものと考えられる薄い砂の堆積が見られた。腐食土等の堆積は見られず、遺物等も一切見られなかった。

Ⅳ区出土遺物

Ⅳ区の調査では、トレンチ調査時に須恵器甕の小片が出土しているが、全面調査中にはほとんど遺物が出土しなかった。須恵器が伴うと考えられる遺構も見られず、後世の削平により遺物が残存しなかった可能性が考えられる。須恵器甕は、破片が小さかったため図示しなかった。

Ⅳ区は、他の調査区に比べ遺構・遺物の検出が少なかった。その理由としては、後世の削平の影響が大きいものと思われるが、それとは別の理由として、この付近が木次町側と三刀屋町側を繋ぐ通路としての性格が強く、元々遺構が少なかったものと思われる。

第９節　小結

熊谷遺跡の調査では、当初予想された「出雲国風土記」記載の熊谷軍団に関わる遺構を検出することはできなかったが、縄文から中世に至る多くの資料を得ることができた。以下、時期毎に列挙し、小結とする。

縄文時代と考えられる遺構・遺物

熊谷遺跡Ⅰ区の遺物包含層中からは、少量の縄文土器が出土したほか、Ⅱ・Ⅳ区では、縄文時代と考えられる。落とし穴状遺構を検出している。Ⅰ区から出土した縄文土器は、後期前葉と晩期の、およそ２時期に集中しているものと考えられる一方、落とし穴状遺構についても形態で２種類が見られた。落とし穴状遺構は尾根筋で隣接する要害遺跡でも検出しており、この丘陵一帯で見られることが判った。落とし穴状遺構の時期を判断する材料には乏しいが、少なくとも縄文時代から、この丘陵が人々の活動の場であったことを示している。

弥生時代の遺物

Ⅰ区包含層中からは、弥生土器が出土しており、時期の解るものに関しては、中期後半から後期初頭のものと考えた。出土状況から、尾根上で使用されたものが転落して堆積したものと考えられたが、尾根上には、弥生時代の遺構は見られない。隣接する要害遺跡では尾根を切断する深い溝を検出しているが、そこから出土した土器は前期末頃と考えられており、熊谷遺跡のものとは時期が大きく異なっている。しかし、いずれも生活の場としては不便と考えられる尾根上での活動が想定される事から、両者は全く無関係に成立したとは考えにくい。第５章で説明する要害遺跡の溝についてもその用途が判明しなかったが、弥生前期末から後期初頭に掛けての長期間に亘って、この丘陵が使用されていたものと考えられる。

三刀屋熊谷１・２号墳

熊谷遺跡Ⅰ区の尾根先端では、三刀屋熊谷１・２号墳を検出したほか、付近に前期古墳が、また、Ⅱ区には中期の古墳があったことが推定できた。

三刀屋熊谷１・２号墳には土器が伴っていないが、主体部内で検出した金属器から前期末～中期頃の古墳と推定される。また、三刀屋熊谷１号墳のやや上方では、古墳時代前期の土器が出土している他、三刀屋熊谷２号墳下方でも古墳と考えられる尾根筋の加工が見られた。以上のことから、尾根上に前期古墳があり、時期が下るにつれて、尾根先端に向け次々と古墳を造っていった様子が想像された。木次町の斐伊中山古墳群（註１）には、溝で尾根を切断した、三刀屋熊谷１・２号墳と同様の古墳が尾根筋に見られ、同様の様相を呈している、両古墳群は、時期的にも一致するほか、お互いを見通すことができる位置関係になっている。三刀屋町には、前期の大型前方後方墳である松本１・４号墳（註２）があり、平野を南に見る位置に立地している。三刀屋熊谷１・２号墳は、平野を北に見下ろす立地で、古墳の規模も小さいことから、それらに次ぐ地位にあった集団の墓域として築かれたものと考えられる。

奈良時代の遺物

墨書土器が採取されたことから、熊谷軍団に関わる遺構の確認が期待されたが、それを検出することはできなかった。「軍団」について具体的な遺構が確認された例は無く、何があれば軍団と言えるのかも判らない状態での調査であったため、見逃した点もあったかもしれない。しかし、Ⅰ・Ⅲ区からは奈良時代の土器が出土しており、この内、遺跡最高所であるⅢ区から奈良時代の土器が出土している点は注意されるものである。通常、比高差のある丘陵上に奈良時代の集落があることは考えにくく、同様の立地の遺跡には、木次町妙見山遺跡など祭祀関係と考えられる遺跡が大半である。祭祀遺跡の出土遺物には、祭祀に関わると考えられる特殊な遺物や灯明痕跡のある土器など通常の集落と異なる遺物が多く含まれるが、熊谷遺跡の場合は須恵器坏・壺であり、特殊な遺物は含まれなかった。比高差のある山上に通常の集落が在った可能性が低いことから、熊谷軍団との関連を考えさせるものである。僅かな遺物で遺跡の性格を特定するのは困難であるが、仮に熊谷軍団が熊谷遺跡付近に存在した場合、通信機能を持つ施設が山上に在ったのではないだろうか。

中世の山城について

中世の遺物はほとんど出土していないが、Ⅲ区で見られた加工は戦国時代の城跡（註３）と考えられるものであった。隣接する要害遺跡にも山城によると考えられる削平が認められる他、熊谷遺跡Ⅰ区にも同様の削平が認められ、臨時的な山城としての平坦面等は広範囲に広がっていたようである。斐伊川・三刀屋川を眼下に見下ろしていることから、山城としては最適の立地と思われたが、複雑な構造を持つ施設は意外なほど少なく、基本的には削平面のみで構成されている。Ⅱ区の加工段からⅢ区東側の縦堀や石垣状遺構など、中心部と思われる部位には若干の加工が見られるものの、基本的には天険に依存した臨時的・短期的な山城と考えられる。

熊谷遺跡付近のことを指す確実な文献は知られていないが、『陰徳太平記』『雲陽軍実記』などの「軍記物」には記載が見られる。それによると1542（天文11）年10～11月（？）には大内義隆が三刀屋に進軍しており、『雲陽軍実記』では「地王の峯の要害」に陣を張ったとされている。また、同じく『雲陽軍実記』には1563（永禄６）年に地王峯（熊谷遺跡西側の地王砦付近か？）で合戦があり多くの死者を出したとされている。

前述の通り、検出した遺構に大規模で複雑な構造を持つものは見られなかったが、Ⅲ区東端では縦堀や山陽地方で一般的に見られる石垣状遺構を検出している。石垣状遺構は、県内ではまれな施設で、山陽地方との関係が伺われるものである。

註１　『斐伊中山古墳群－西支群－』木次町教育委員会　1993年

註２　『松本古墳調査報告』島根県教育委員会　1963年

『古代の出雲を考える７　松本古墳群－斐伊川流域の前期古墳をめぐって－』出雲考古学研究会　1991年

註３　山城に関する遺構の考え方については、㈶広島県埋蔵文化財調査センター松村昌彦氏の御教授を得た。

また、文献等の記載については古代文化研究センター佐伯徳哉氏、当センター目次謙一の指導を得た。

第４章　要害遺跡の調査

第１節　調査区の設定とトレンチ調査の概要

本遺跡は三刀屋川の南岸に位置する標高約90～100m前後の丘陵に位置する。調査地は樹木伐採の際に重機によりかなりの攪乱を受けており、トレンチ調査による基本層序の結果も併せて調査区は熊谷遺跡に続く尾根筋から丘陵の突端までとした（第61図）。

第１トレンチ（第63図）は熊谷遺跡からのびる尾根筋から丘陵先端部にかけての急斜面に設定して基本層序の確認を行った。表土直下は花崗岩の風化した砂層である暗黄褐色砂質土・褐色砂質土で構成されている。調査区の大半の基本層序はこれと似た傾向であったが、第２トレンチ（第63図）を設定した丘陵先端の西側斜面では表土直下に暗茶褐色砂質土・濁茶褐色砂質土が堆積しており、地山も尾根筋や丘陵先端の花崗岩層と違って締まりの良い黄褐色砂質土・淡灰茶褐色砂質土・淡黄褐色砂質土を呈しており、この斜面はかなり古い段階から深い谷状地形を成していたと考えられる。なお、第２トレンチの表土直下の土層からは弥生土器片２点が検出された。これは後述する丘陵上から転落したものと思われる。

第２節　丘陵先端部の調査

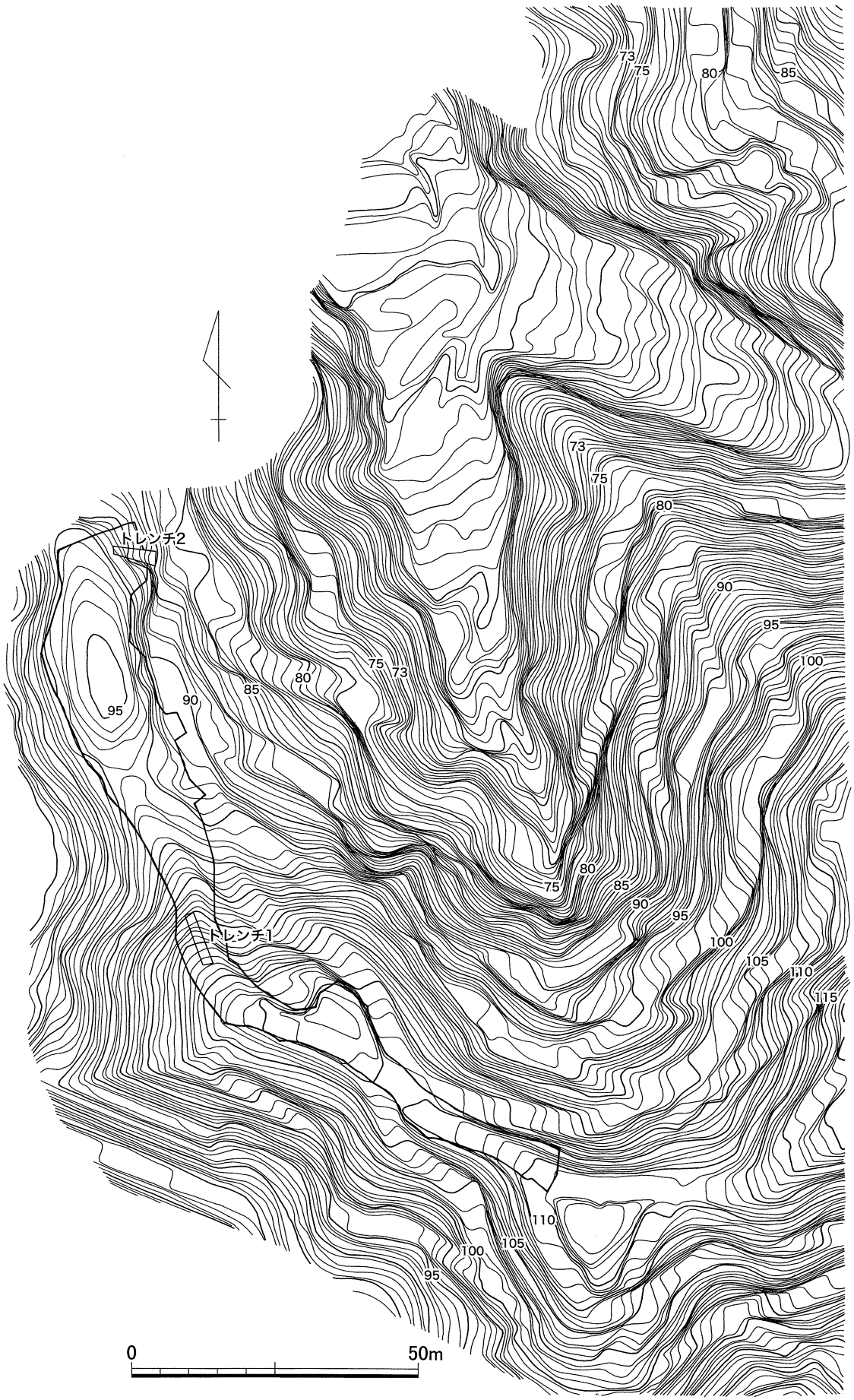
丘陵先端上の調査に関しては、ここが緩やかなマウンド状を呈しており、古墳等の墳墓が存在する可能性も否定できないことから十字方向に延びるセクション（第62図）Ａ～Ｂ間（第64図）とＣ～Ｄ間（第65図）を設定して調査を行うことにした。丘陵先端上の基本土層は表土直下に花崗岩の風化した地山ブロック土を含む暗褐色砂質土や白色砂粒を含む黒色砂質土でが地山に堆積している状況が基本で、一部に地山が赤色の粘土であることから暗紫褐色粘質土が見られたり、同じく地山の花崗岩風化が著しい粗砂を多く含んだ暗褐色砂質土が見られる。なお、丘陵先端部の東西斜面は急斜面になっており黒褐色系の砂質土が多く堆積し、第２トレンチの調査と同じく弥生土器片を14点検出した。

丘陵先端部上は、ほぼ平らな地形を呈しており、検出した遺構は、上部をほとんど失ったような落とし穴１つ（第67図）のみであった。このことから、丘陵先端部上は後世の削平等を受けている可能性も考えられ、第２トレンチの表土直下や丘陵先端部の東西斜面から検出した弥生土器も本来、丘陵上部にあった可能性がある。つまり、これは後述する弥生時代の溝と関連するが、丘陵先端上には弥生時代の遺構があった可能性も考えられる。

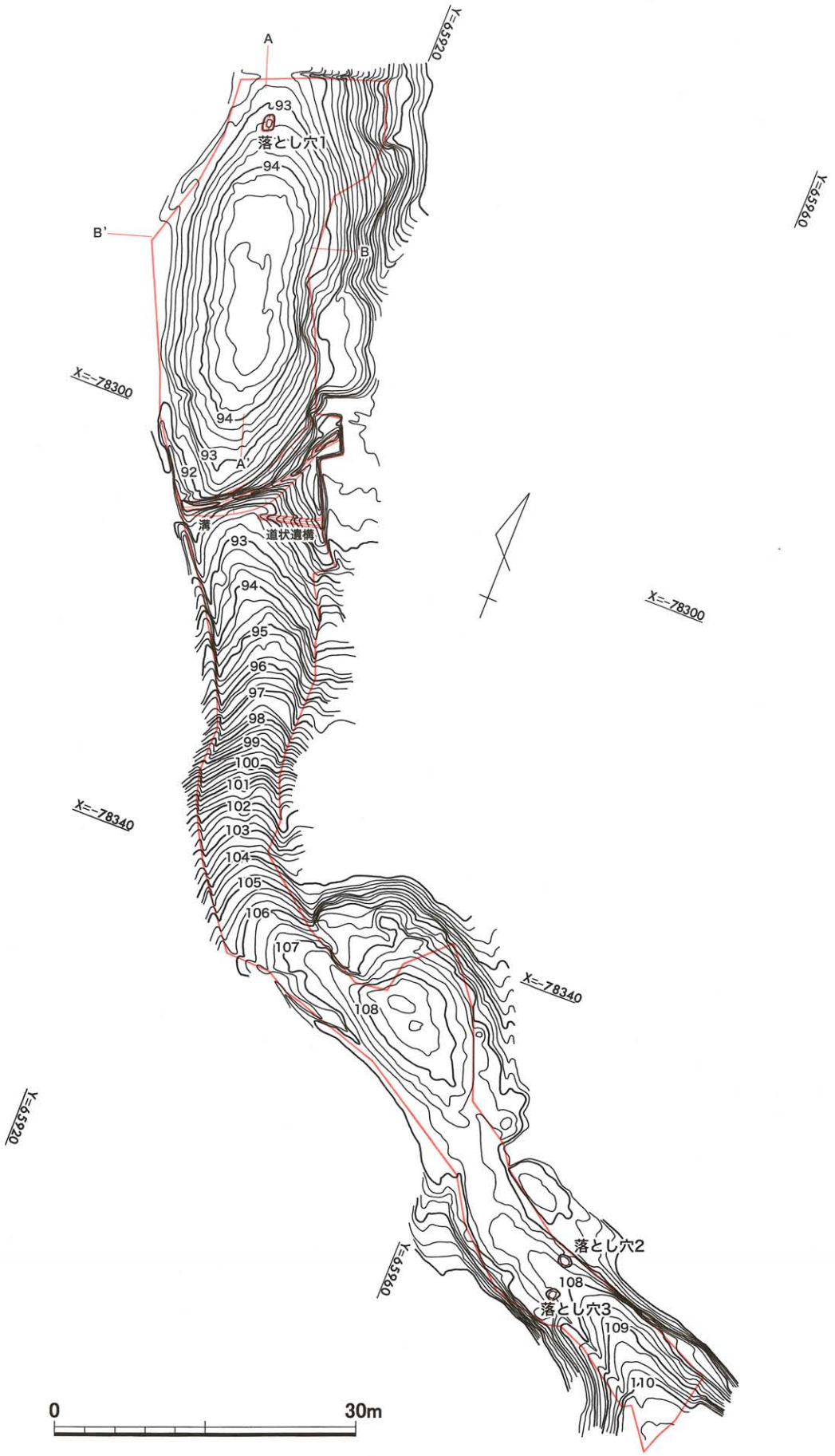
以上の基本土層の確認を行って調査を遂行した結果、丘陵先端部と尾根筋を東西に分断する溝、溝の南側に道状遺構、丘陵先端上に落とし穴１つ、そして調査区南側の尾根筋に落とし穴２つを検出するに至った。（第67図）

第３節　溝の調査

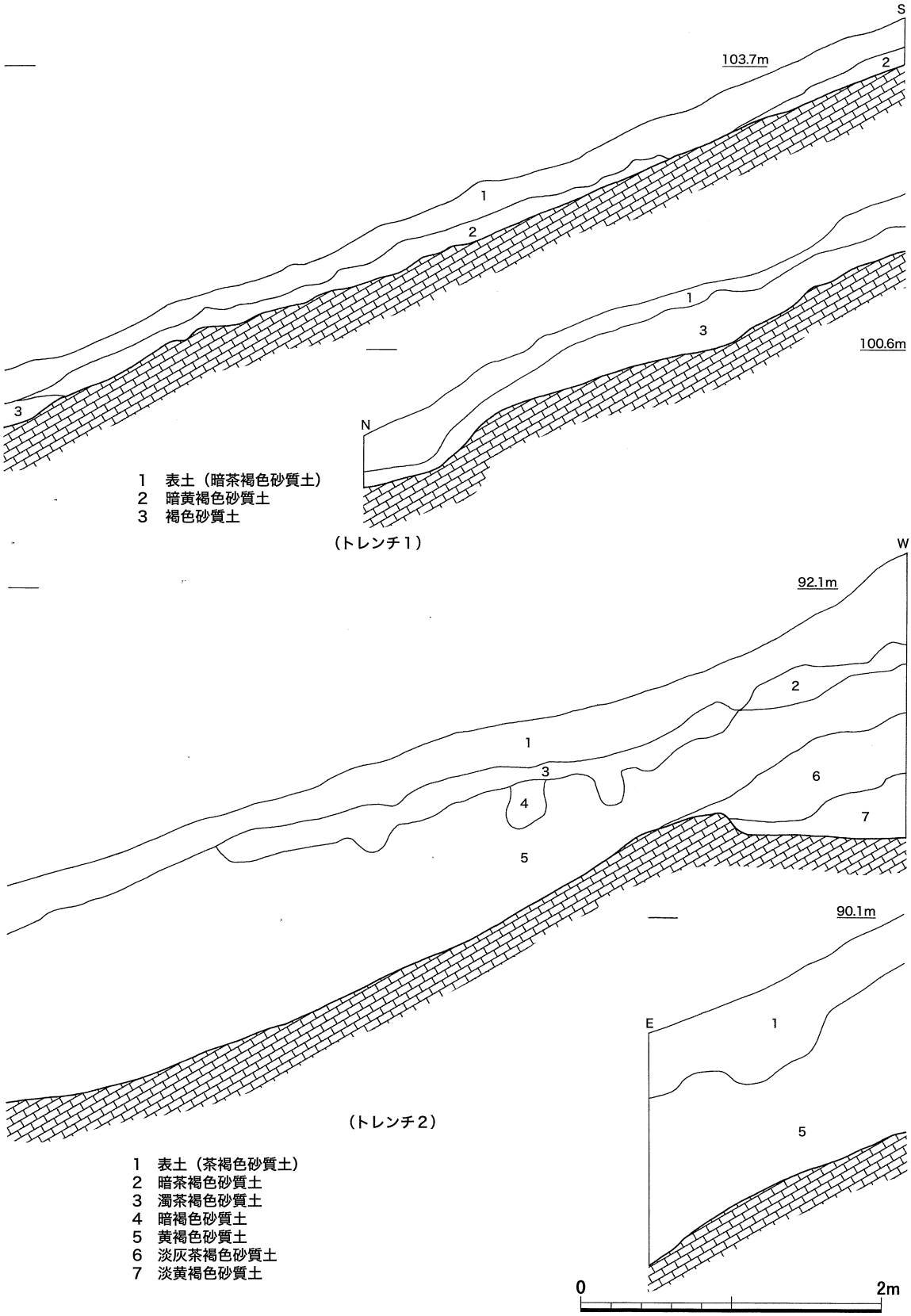
尾根筋から丘陵先端部に至る部分の現地形は、緩やかにくびれており、幾分浅く窪んでいた。本調査前より、ここに溝等の遺構がある可能性が高いという認識からサブトレンチを設定して前述の基本土層も考慮して丘陵先端部から尾根筋までの表土除去と精査を進めた結果、表土直下に帯状に広がった黒色土が東



第61図　要害遺跡調査区位置図（調査前）（S＝1：1,000）



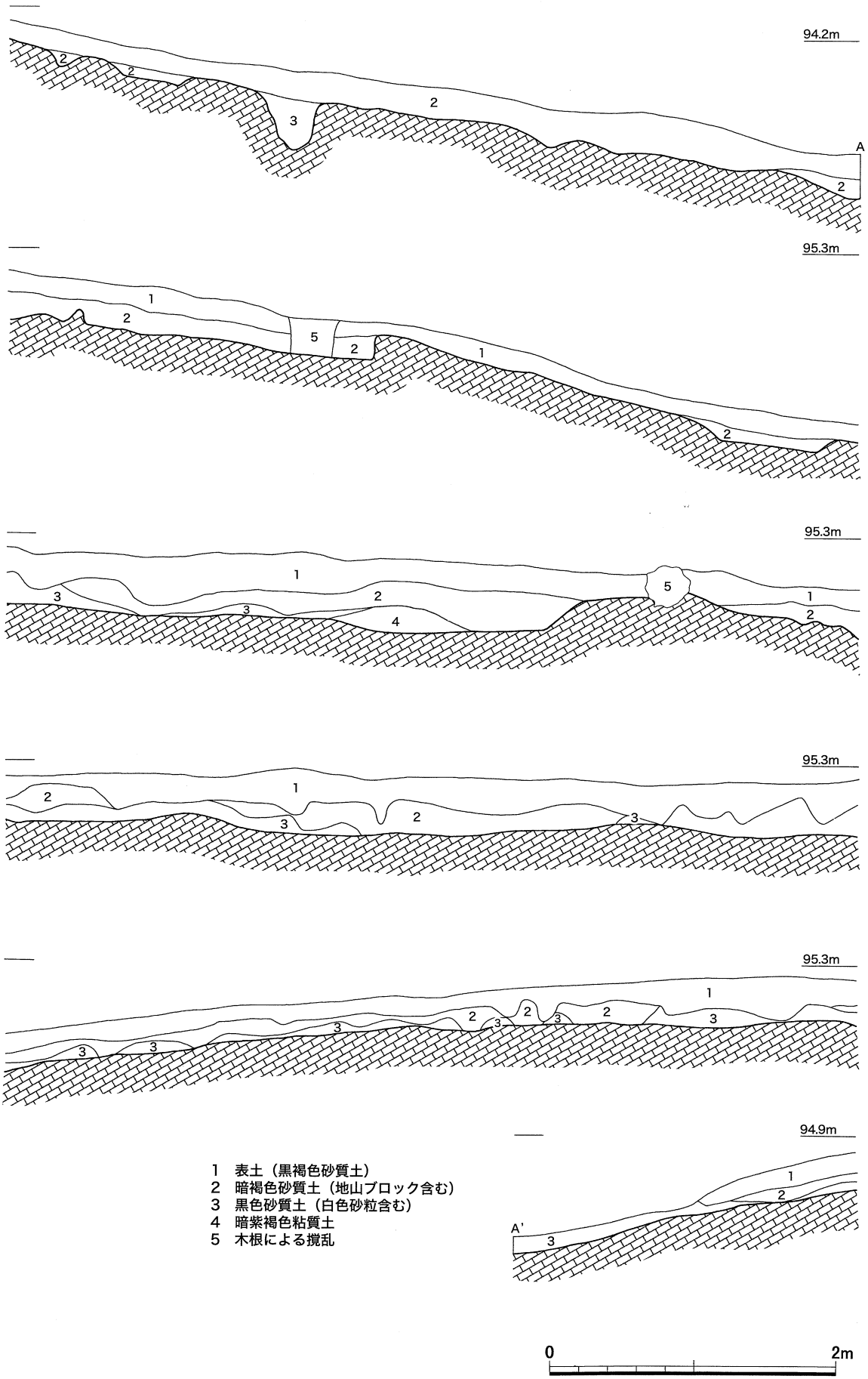
第62図　要害遺跡遺構配置図（調査後　S＝1：600）



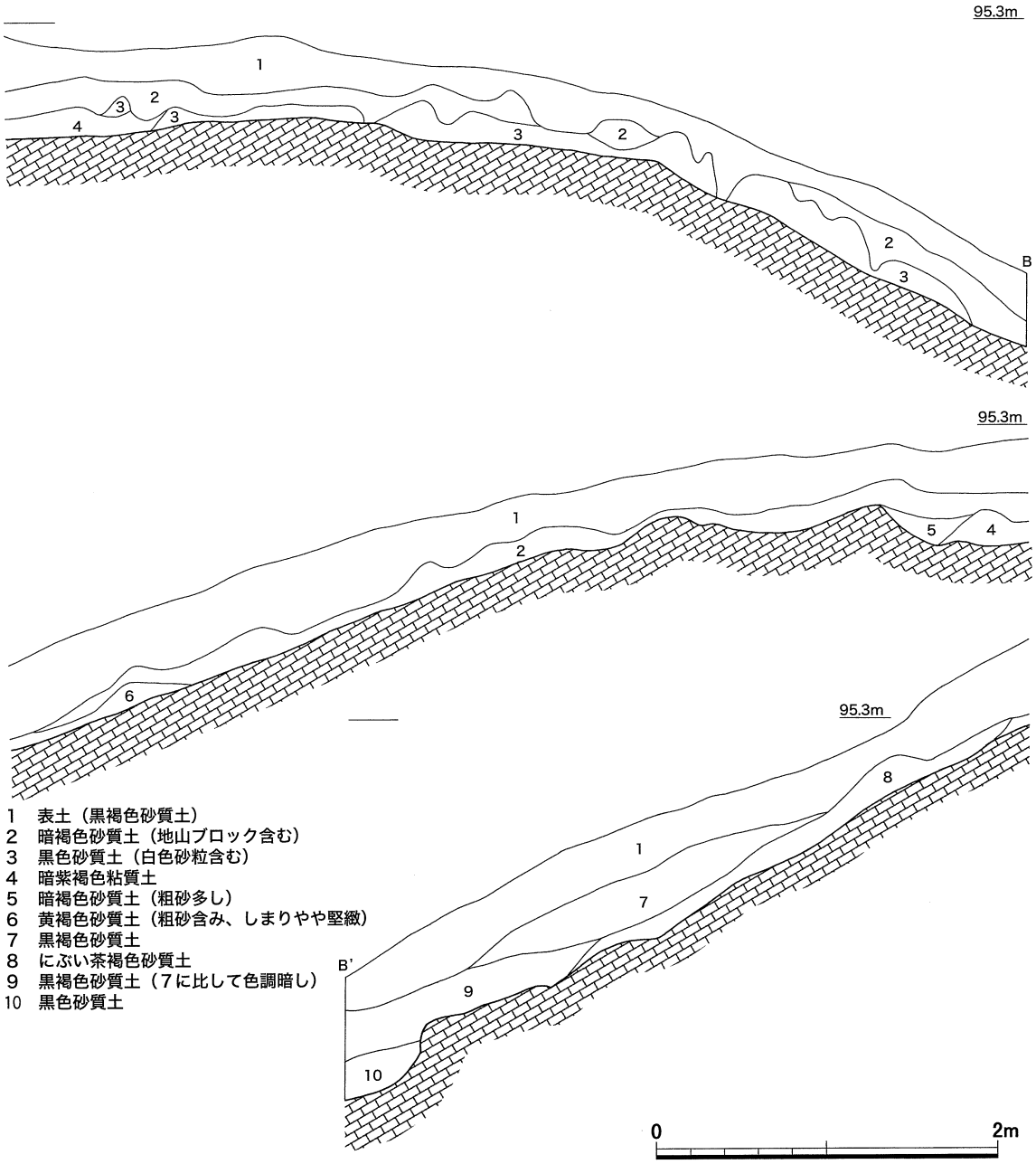
第63図　要害遺跡土層断面図(1)（S＝1：40）

西に延びているのを確認した。この黒色土の帯は調査区外まで延びており、調査区東側で扇状に広がって必ずしも明瞭ではなかったが、溝中央部から調査区西側にかけては一本の帯が明瞭に延びていた。

黒色土の広がりに主に３っっつのセクション（第68・69・71図）を設けて、掘削を行った。その結果、溝には大別して３段階の堆積があったことが判明した。順次に上層の堆積から詳述すると、まず、第69図

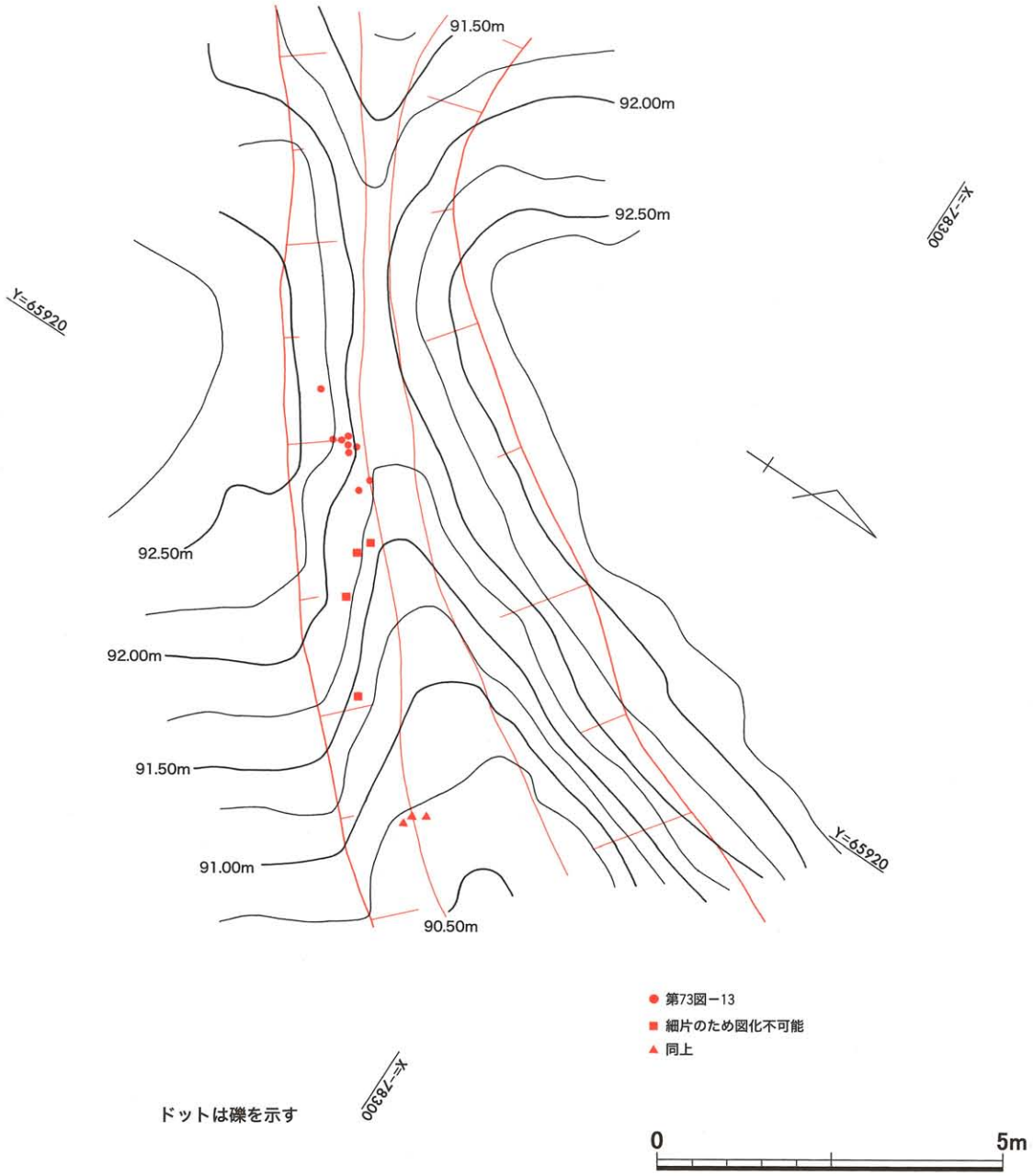


第64図　要害遺跡土層断面図(2)（S＝1：40）



第65図　要害遺跡土層断面図(3)（S＝1：40）

の5・6・7・12層と第71図の6・5・4層に見られる黒色砂質土（締まり悪し）・黒褐色砂質土・黒褐色砂質土（暗黄色褐色土少量含む）・黒灰褐色砂質土で構成された層位がある。この層位は若干いびつな形を呈していることから、自然堆積というより人為的な掘削等の改変により生じた新しい溝に堆積した可能性が考えられる。これは、検出当初に黒色土の帯が扇状に広がっていた調査区東側のセクション（第70図）の2層（黒色砂質土）が、箱堀状の堆積を呈していることからも伺える。また、これらの層位からは2～3の礫と弥生土器片（細片のため図化不可能）・時期不明の鉄器片が検出された。溝を検出した尾根筋の最高所には戦国時代の山城（熊谷遺跡）が存在し、丘陵先端上は平坦でほとんど遺構がなかったこと、黒色土の堆積が、後述する完掘後の溝と違い直線的に尾根筋を分断していることから、丘陵先端部を含めた周辺部は山城の一部として機能していた可能性も考えられる。ただし、戦国期に伴う明確な遺物を検出していないので、この堆積も弥生時代に、或いは自然に構成された可能性も十分に残る。

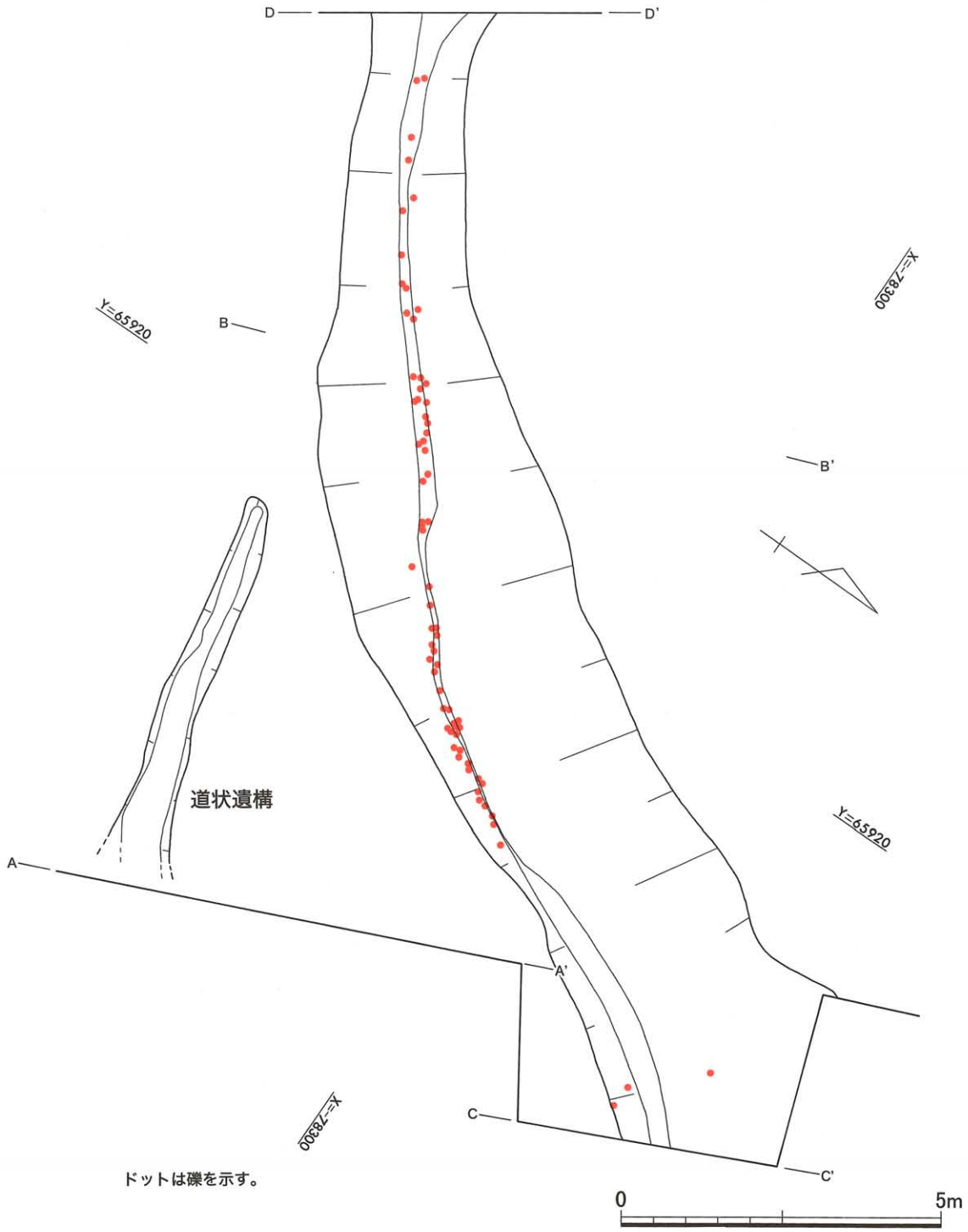


第66図　第２次遺物検出面平面図（S＝1：100）

次に、３個体分の弥生土器片と礫を検出した堆積が現れた（第66図）。調査時点では礫の出土位置の確認を行わなかったため個体数ともに明言できないが、40個強の礫を確認している。この層位は第69図の13層と第71図の７層に見られる暗灰黄色褐色土（白色砂粒を含み、締まり良し）の堆積で、この面は土器の様相から弥生時代の中期前葉の遺構面であると認識される。

そして、最下層である溝底部から２個体分の弥生土器片と70個に及ぶ礫が検出された。すなわち、第68図の５層、第69図の23層、第71図の14層に見られるにぶい黄灰色砂質土中及び溝の底部に土器片・礫が検出されたのである。検出されたこれらの遺物は、少なくとも溝が掘削されてから埋まり始める前の期間に人為的あるいは自然に落ち込んだものであろう。溝は、後述する溝底部出土の土器の様相から弥生時代の前期末頃に掘削されたと考えられる。

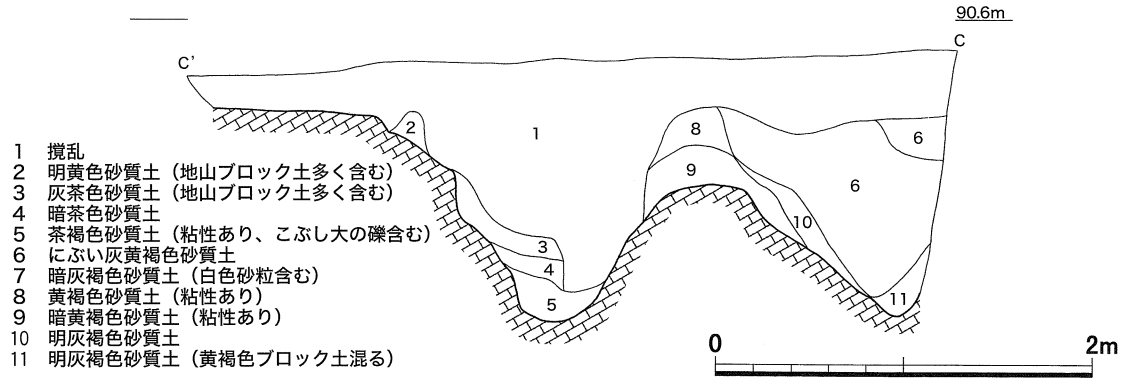
この弥生時代前期末頃に掘削された溝は、調査区内においてはほとんどが地山を掘削して形成さ



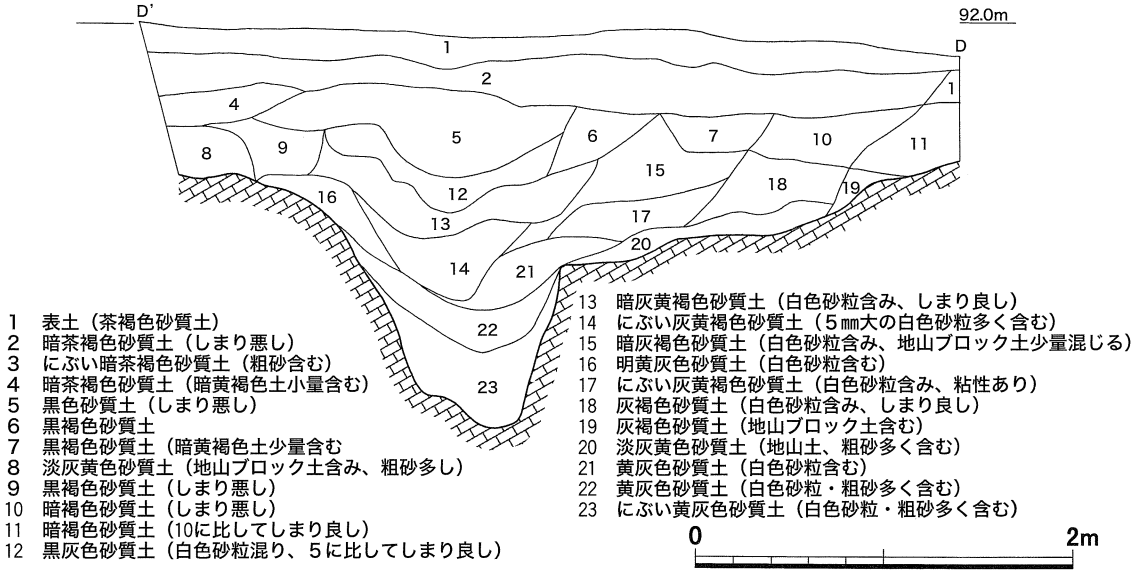
第67図　溝完掘及び溝底部の礫検出状況（S＝1：100）

れているが、溝の東南部の南肩に一部盛り土が施されており注目される。第68図の８・９層に見られる共に粘性のある黄褐色砂質土・暗黄褐色砂質土層がそれである。地山掘削時における排土を地山が低くなる部分（溝東南部の南肩）に50㎝程度盛り土して溝の肩部を形成している。10・11層はこの盛り土が流失した土層だと考えられる。

完掘した溝の上端最大幅は3.5m、深さは1.2m～1.7mを測る。なお、溝を完掘した段階で溝の中央部から東側にかけて、溝北側の肩が長さ約６mにわたって地崩れを起こしていることが判明した。溝は東側に行くほど北方向に延びていくが、その後、丘陵先端部に対してどの方向に伸びているのは不明である。



第68図　溝東端壁土層断面図（S＝1：40）



第69図　溝西端壁土層断面図（S＝1：40）

第４節　その他の遺構

道状遺構（第67図）

溝の南側に尾根筋を横断するような道状の遺構が検出された。これも同じく地山を掘削したものであるが、遺物を伴わないため時期等は不明であるが、溝に近接する関係から溝とほぼ同時期に掘削され、機能したものである可能性がある。現存長で幅60～80㎝、長さ６ｍを測る。

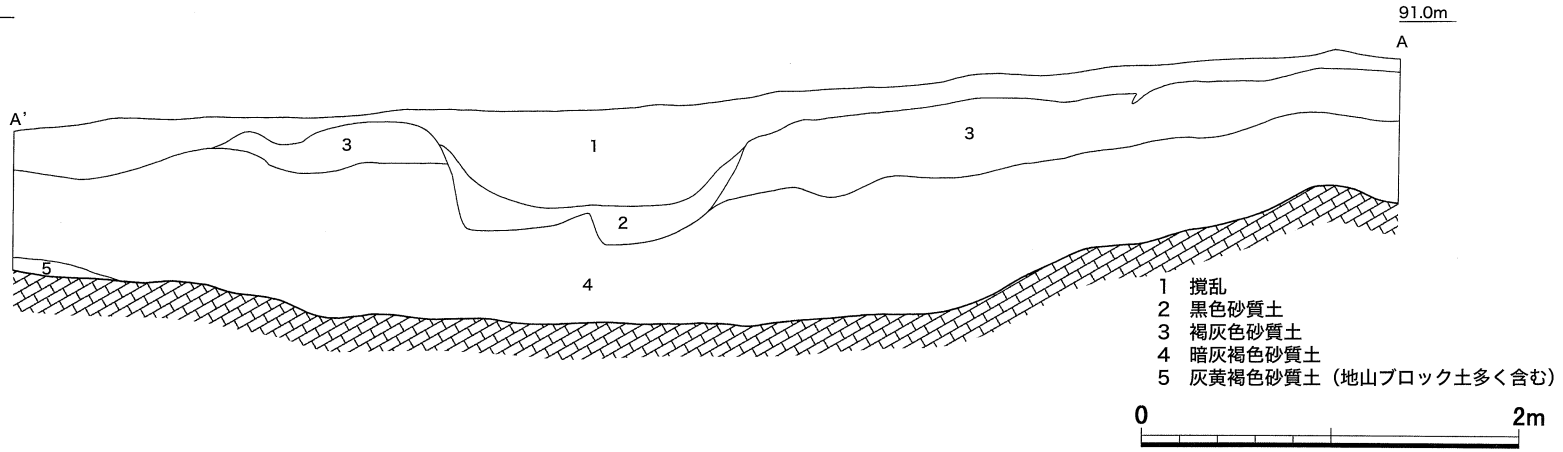
落とし穴１（第72図）

丘陵突端に位置し、地山を掘り込んで作られている。上部は削平を受けている可能性がある。平面プランは長辺1.6m・短辺１ｍのややいびつな方形を呈しており、中央部に杭を据えられるような径20㎝のピットが掘られている。深さは現存長で1.3mを測る。

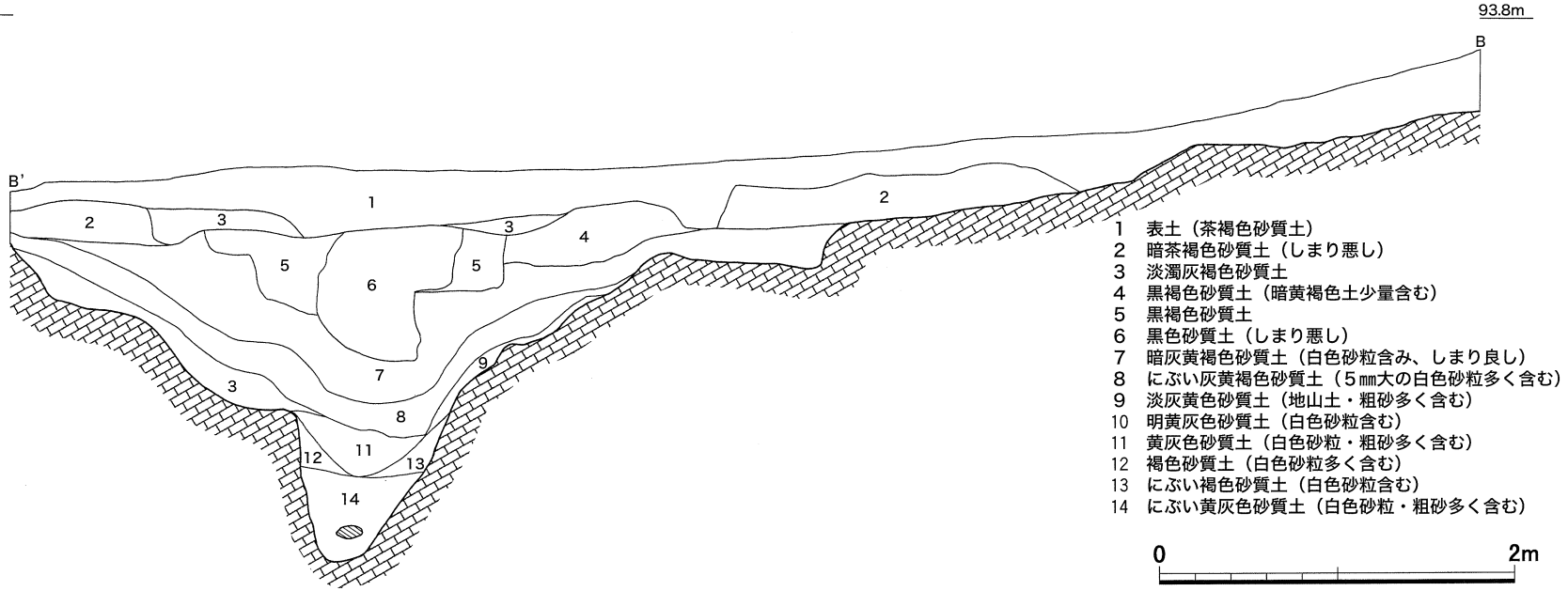
落とし穴２・３（第72図）

調査区南側の尾根筋に位置し地山を掘り込んで作られている。落とし穴２は尾根筋東側に、落とし穴３は尾根筋西側に対になるかのように並んでいる。この２つの落とし穴が、同時代の所産であるという証拠は調査では得られなかったが、おそらく尾根筋を横断する獣を確実に捕獲しようとする意図が、対という位置関係に現れているものと考えられる。

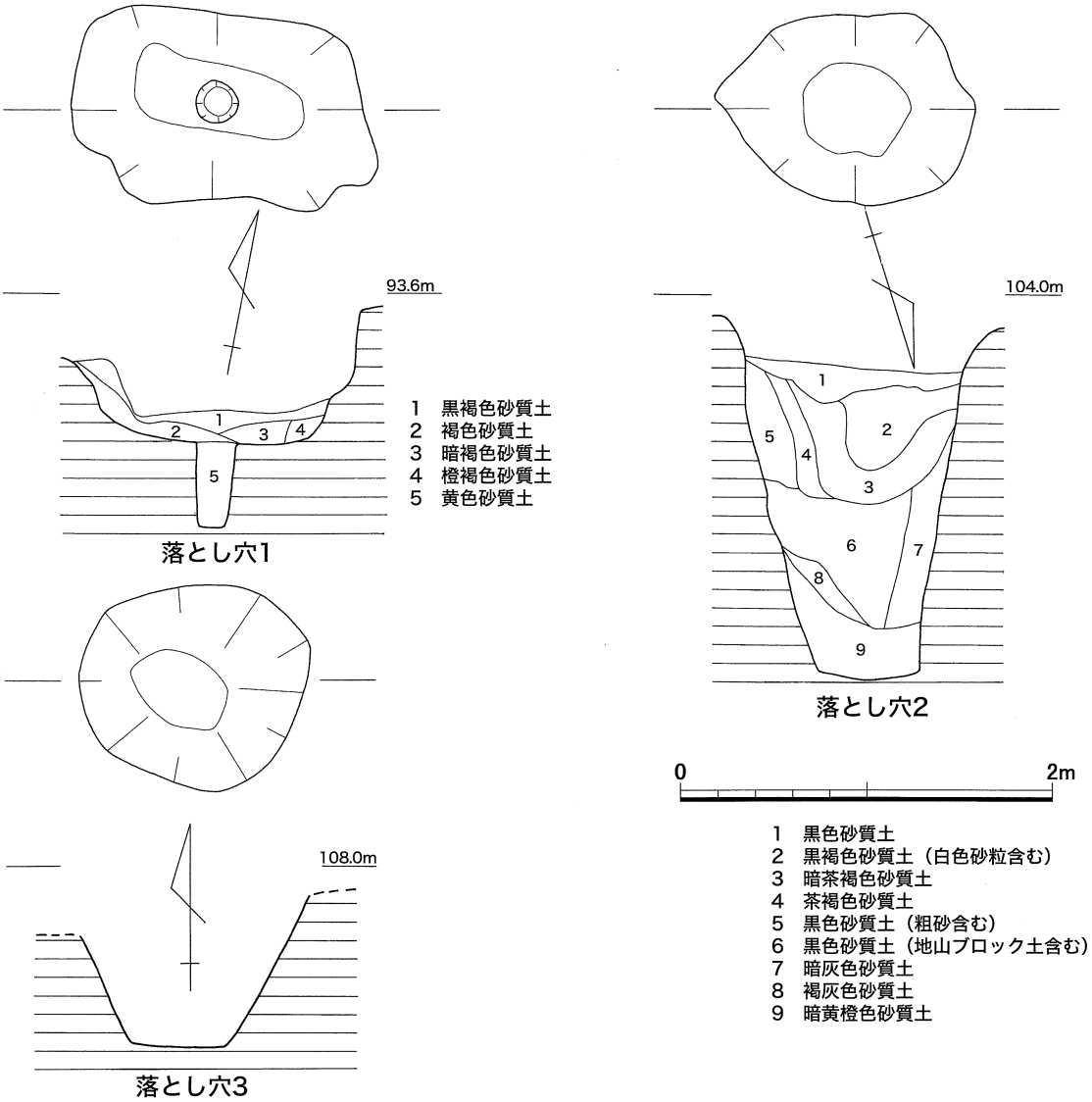
落とし穴２の平面プランは長径1.4m・短径１ｍのいびつな円形で、深さは現存長２ｍを測る。底部にピット状の遺構は検出されなかった。落とし穴３の平面プランは径1.2mの円形で、深さは現存長で80㎝を測る。底部にピット状の遺構は検出されなかった。



第70図　調査区東端壁土層断面図（S＝1：40）



第71図　溝中央部土層断面図（S＝1：40）



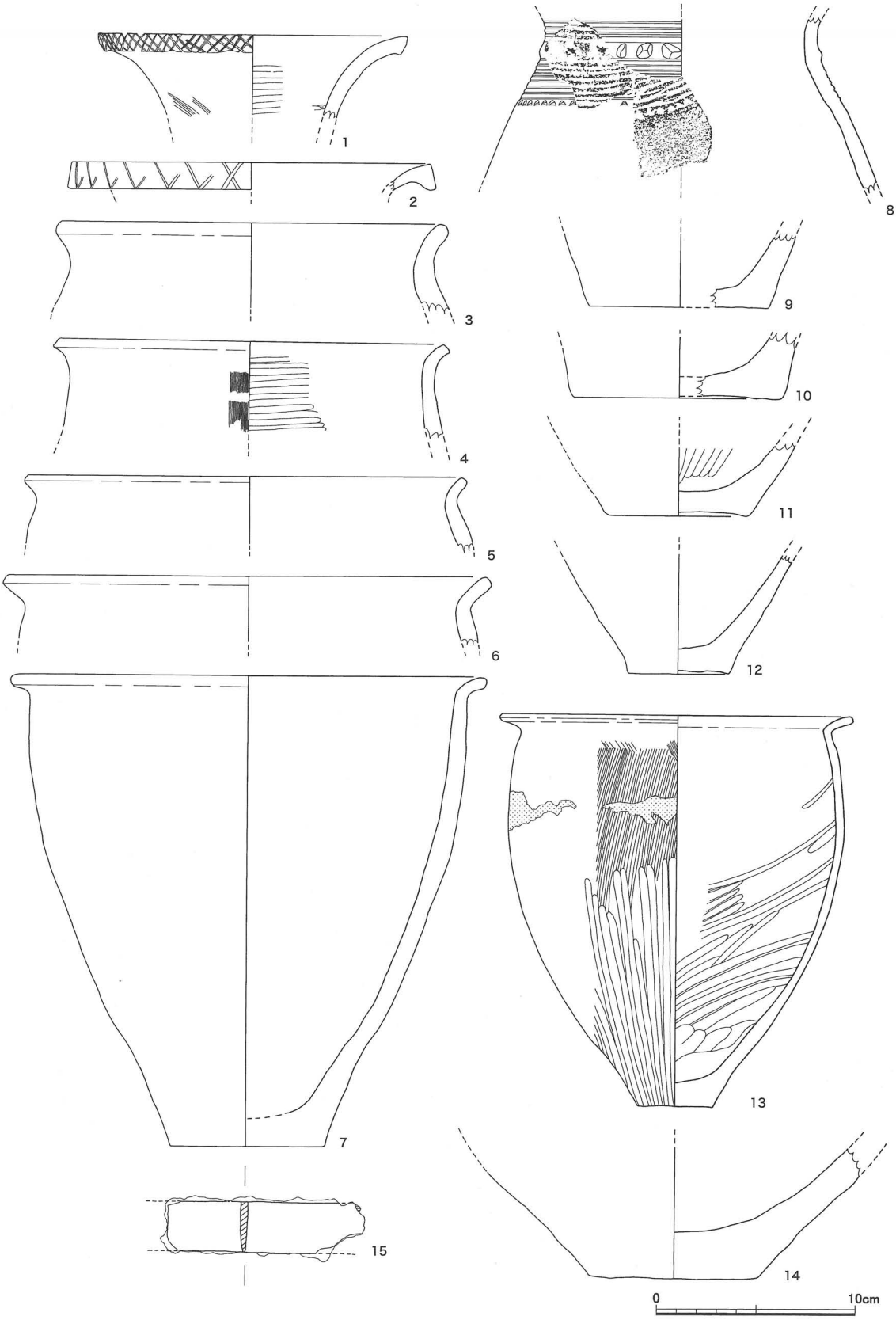
第72図　落とし穴実測図（S＝1：40）

第５節　出土遺物（第73図・第１表・第２表・第３表）

出土した弥生土器片は点数も少ない上に細片のため図化できるものが少ない。ここでは、図化可能な14個体の弥生土器と鉄製品１点を報告する。溝で画された丘陵上及び斜面の包含層より出土した弥生土器は第73図の１～12である。そのうち、第２トレンチより検出された弥生土器は第73図の３と９である。15の鉄製品は溝の黒色土層より検出した。また、溝第２次堆積面検出の弥生土器３個体のうち第73図の14以外は少量の細片のため図化は不可能であったが、２個体は壺の胴部にあたるものと考えられる。

また、溝底部検出の弥生土器２個体のうち１個体は細片のため、第73図の15の１個体のみしか図化できなかった。

１は広口壺である。口縁部に斜格子状の刻み目が巡る。２は広口壺である。口縁部に斜格子状の施文が巡る。口縁の張り出し部は胴部に粘土を継ぎ足して成形されている。３は口縁部が歪んでいる。４は甕である。焼成は良好であるが、器壁の一部に黒班が見られる。６は口縁部の内面に黒班が見られる。７は口縁部直下に炭化物の付着が若干認められる。８は広口壺である。焼成は良好であるが、器壁の中心部は灰色を呈している。頸部の浮文の上に３条の、同じく下に９条の沈線が施され、その下に三角形の刺突文が巡る。９～11は甕の底部である。９は甕である。製作するにあ



1～12　調査区包含層出土遺物
13　溝第２次堆積面出土遺物
14　溝底部出土遺物
15　溝黒色土層出土遺物

炭化物付着の範囲

第73図　要害遺跡出土遺物実測図（S＝1：3）

たり、底部から器壁に向けて粘土を引き延ばした痕跡が見られる。11は焼成は全体的に良好であるが、外面の一部に黒班が見られる。12は壺の底部である。焼成は良好であるが、底部外面に黒班が見られる。13は内面の下半と外面に著しい黒班が見られる。外面の上半部に著しい炭化物が付着している。14は壺底部である。

15は鉄製品である。片刃であることから鉄刀か刀子の一部だと考えられる。残存長9.9cm、幅2.5cm、僅かながら一部に木質痕跡が認められる。

上述の14個体の弥生土器の時期に関しては、次のような土器の特徴や出土状況を勘案して決定した。１は口縁部に斜格子状の刻みが巡るなど装飾的要素が強く見られ、松本編年のＩ－４様式に該当するものと思われる。同じく８もヘラ描直線文や浮文、三角形刺突文など装飾的要素が強いことからＩ－４様式に該当するものと思われる。３・５・７・は胎土が粗いことや口縁部が緩く外反すことなどの特徴からＩ－４様式に該当するものと思われる。９・10・11は底部であるが胎土が粗く、１～12の出土地点が同じ丘陵上や斜面の包含層であることから、Ｉ－４様式に該当するものと考えられる。これに対して４は口縁部がやや短く外反し、胎土が密で内面にミガキがあることからⅡ－１様式に該当するものと思われる。同じく６・12も胎土が密で、12はミガキが施されることからⅡ－１～Ⅲ－１に該当するものと思われる。２は口縁端部が下方へ屈折し、斜格子文が施されるなどの装飾性に富み、胎土が密であることからⅢ－１様式に該当するものと思われる。13は口縁部が「く」字状に屈折し、外面に丁寧なタテハケとミガキが施され、内面にも丁寧なミガキが施されていることからⅢ－１様式に該当するものと思われる。１４は胎土が粗い。溝の底部から検出されたものであるが、層位的に見ても溝２次遺構面検出の13より古いものである。Ｉ－４様式に該当するもの思われる。最後に、松本編年の様式区分を弥生時代の時代区分に対応させると、１・３・５・７・８・９・10・11・14が松本編年のＩ－４（前期末）、４がⅡ－１（中期前葉）、６・12がⅡ－１～Ⅲ－１（中期前葉～中期中葉）、２・13がⅢ－１（中期中葉）に相当するものと思われる（註１）。

挿図番号	器　種	口　径 (cm)	器　高 (cm)	底　径 (cm)	形態・文様の特徴	調　　整	色　調	備　　考
1	広口壺	15.6			口縁端部に斜格子文	ヨコヘラミガキ	淡黄褐色	
2	広口壺	18.6			口縁端部に山形文		淡赤褐色	
3	広口壺	19.0					淡黄褐色	
4	甕	20.0				タテハケ ヨコヘラミガキ	淡赤褐色	
5	甕	21.2					淡赤褐色	
6	甕	24.0					淡黄褐色	
7	甕	24.0	23.6	7.8			赤橙褐色	口縁部下に炭化物
8	広口壺				３条と９条の沈線 三角形の刺突文 浮文を貼る		淡黄褐色	
9	甕底部			9.0			淡褐色	
10	甕底部			10.6			淡橙褐色	
11	甕底部			7.0		タテヘラミガキ	橙褐色	
12	甕底部			5.0			橙褐色	
13	甕	17.8	19.7	4.0		タテハケ ヘラミガキ	淡褐色	体部上半に炭化物
14	壺底部			8.6			橙褐色	

第２表　要害遺跡出土土器観察表

礫については第２表にその法量と形状をまとめた。傾向として、円形を呈するものが90％を占め、一部にすり石・すり皿かと思われるようなものも見られた。表中の「№」がついているものは溝底部および最終層位で検出されたものである。なお、備考欄の「№」は遺跡調査システム“ＳＩＴＥ”による取り上げ番号である。それ以外は溝上層の黒色土層と第２次遺構面で検出されたものである。重量の傾向から見れば（第３表）、全体として0.5kg～1.5kgのものが大半を占めている。

№	重量（kg）	長径（cm）	短径（cm）	形状	備　考
1	0.4	12	4	円	№13
2	0.4	8	5	円	№52
3	0.55	10	6	円	№65
4	0.55	8	5	円	№108
5	0.65	10	6.5	円	№102
6	0.7	10	5	円	№9
7	0.7	10	6	円	№64
8	0.7	12	5	円	№73
9	0.7	10	7	円	№81
10	0.7	11	5	円	№87
11	0.75	10	7	円	№45
12	0.75	10	7	円	№97
13	0.8	11	6	円	№66
14	0.8	11	5	円	№68
15	0.8	12	6	円	№72
16	0.8	10	6	円	№103
17	0.85	11	6.5	円	№44
18	0.85	12	6	円	№57
19	0.9	12	6	円	№60
20	0.9	13	6	円	№61
21	0.9	11	8	円	№62
22	0.9	12	7	円	№78
23	0.9	10	7	円	№88
24	0.9	11	8	円	№93
25	0.95	11	6	円	№99
26	1	12	6	円	№56
27	1	11	6	円	№80
28	1	13	7	円	№85
29	1	11	5	円	№100すり石？
30	1.05	11	7	角	№43
31	1.05	11	9	円	№58
32	1.1	10	7	円	№39
33	1.1	11	8	円	№63
34	1.1	12	5	円	№83すり石？
35	1.1	12	6	円	№96
36	1.1	15.5	7.5	円	№105
37	1.15	10	7	円	№36
38	1.2	13	7	円	№42
39	1.2	13	5	円	№54
40	1.2	13	7	円	№59
41	1.2	10	8	円	№77
42	1.25	12	8	円	№82
43	1.25	15	6	円	№106
44	1.3	12	6	円	№37
45	1.3	12	9	円	№53
46	1.3	17	7	角	№75
47	1.35	15	7	円	№14
48	1.35	15	6	円	№46
49	1.35	15	7	円	№50
50	1.4	12	8	円	№55
51	1.4	13	8	円	№91
52	1.4	16	10	円	№95
53	1.4	10	8	円	№98
54	1.5	13	8	円	№51
55	1.5	12	8	円	№86
56	1.5	14	6	円	№89
57	1.6	15	8	円	№79
58	1.7	15	9	角？	№84
59	1.7	15	10	円	№90
60	1.8	21	8	角	№101
61	1.9	15	9	円	№41
62	1.9	13	9	円	№94
63	1.95	18	8	？	№47すり皿？
64	2	13	9	角	№107
65	2.5	16.5	11	円	№38
66	2.5	16	10	円	№48
67	2.8	21	9	円	№49
68	2.8	16	13.5	円	№92
平均値	1.17	12	6.9		

	0.6	12	4	円	すり石？
	0.6	9	6	円	
	0.6	10	5	円	
	0.6	9	6	円	
	0.65	11	5	円	
	0.7	11	5	円	
	0.7	11	5	円	
	0.8	11	5.5	円	
	0.85	11	5	円	
	0.9	9	7	円	
	1	11	6	円	
	1.1	13	7	円	
	1.1	12	6	円	
	1.2	12	7	円	
	1.2	16	6	円	
	1.25	13	8	円	
	1.3	14	7	円	
	1.4	14	7	円	
	1.5	14	6	円	
	1.5	16	6	円	
	1.5	14	8	円	
	1.5	10	8	円	
	1.5	15	8	円	
	1.5	15	6	円	
	1.65	15	8	円	
	1.8	13	8	円	
	1.85	15	7	円	
	1.85	14	8	円	
	1.9	15	8	円	
	2	16	7	円	
	2.2	18	9	円	
	2.2	15	8	円	
	2.3	13	10	円	
	2.6	17	10	円	
	3	18	10	円	
	5	24	10	円	
平均値	1.48	13.5	7.1	円	

第３表　礫計測表

第６節　小結

要害遺跡で検出された遺構は弥生時代前期末頃に掘削された溝とそれに伴うと見られる道状遺構、時期不明の落とし穴３つである。中世の山城に伴う遺構及び遺物は検出されなかったが、当遺跡の尾根続きに存在する山城遺構や弥生溝の上層に見られる箱堀状の堆積および、溝で区切られた丘陵先端の削平状況から当遺跡の丘陵先端部を中心とする箇所が中世山城の一部として機能していた可能性も考えられる。しかし、中世に伴う遺物の検出を見なかったことから、これはあくまでも可能性の域を越えないものである。

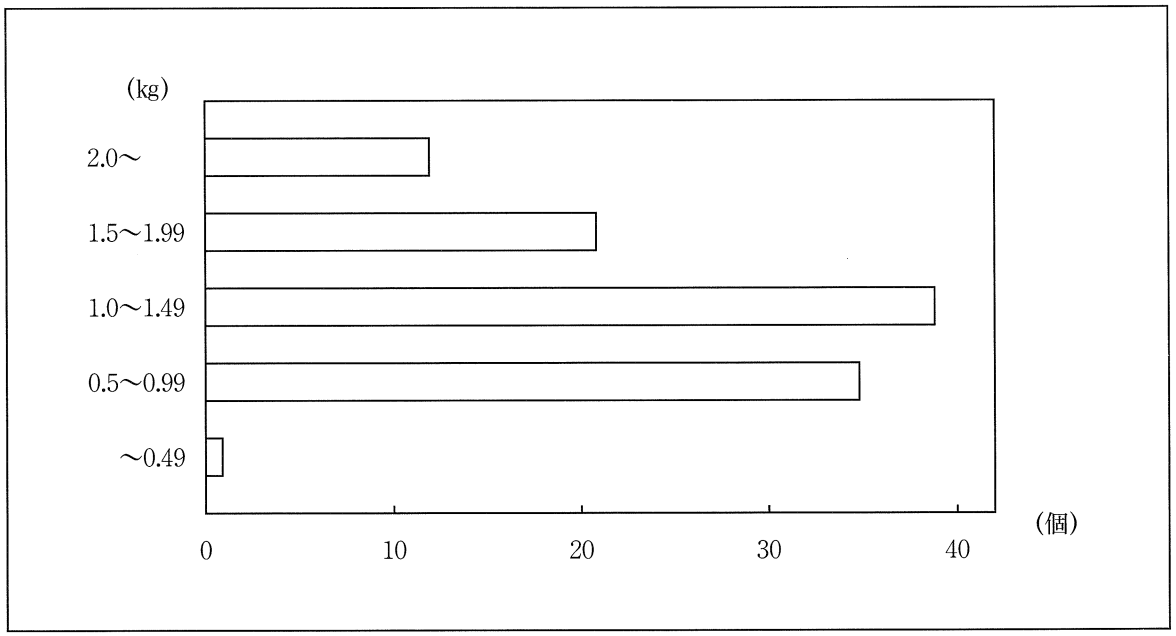
当遺跡の中心を成す弥生時代の溝に関しては、丘陵先端という小規模な範囲をV字形に掘った溝で尾根筋から区画するものであり、出雲内陸部では管見のところその類例を見ない。また、溝の遺物検出面から見て、少なくとも溝は弥生時代前期末から中期にかけて２回機能していたことが推定できる。注目すべきは、それらの遺構面から礫が検出されたと言うことである。これらの礫は当遺跡のある尾根筋には見られないもので、遺跡外からもたらされた河原石である。礫の使用は弥生時代に遡ると指摘されていたが（註２）、近年の弥生時代の高地性集落や環壕集落、中世山城などの調査で検出された礫の集積の存在から、これを遠距離武器として積極的に評価する考えが出されている（註３）。

何をもって礫とするかという一つの指標に、本来遺跡には存在しない石材であると言う点が挙げられる（註４）。すなわち、搬入や遺跡や遺構の外から投げ込まれた人的行為の結果に認識される遺物といえよう。ただし、遺跡内で採取できる石材が集石として認識できる類例（鳥取県米子市所在の清水谷遺跡）もある（註５）。

集石というのは人為的に礫が集まった所産である。集石には大別して二つのパターンがある。ひとつは、地面に積み置くものである。今ひとつは溝、環濠などで多数の礫が検出されるものである。現在、前者のパターンには中世の城に伴う類例が多く、後者には弥生時代の高地性集落・環壕集落などに伴う例が多い。中国地方を中心に見た場合、弥生時代における前者の類例には鳥取県米子市所在の尾高浅山遺跡（中期後半から後期）（註６）・鳥取県淀江町所在の妻木＝晩田遺跡群洞ノ原地区（中期末～後期中葉）（註７）、後者の類例には当遺跡を含め、島根県松江市所在の田和山遺跡（前期末から中期後半）（註８）・島根県江津市所在の古八幡付近遺跡（中期後半）（註９）・鳥取県西伯町所在の清水谷遺跡（前期末から中期前半）（註10）・鳥取県名和町所在の大塚岩田遺跡（前期後葉）（註11）・大分県玖珠町所在の白岩遺跡（後期前半から中頃）（註12）、両者のパターンを有する兵庫県和田山町所在の大盛山遺跡（後期初頭）（註13）の９例が管見に上る。

これらの集石を検出した弥生時代の遺跡はいずれも環壕（溝）を伴っており防御的な機能を有していたものと考えられる。礫を遠距離武器とした場合、集石は戦闘行為の所産と見ることもできるが、当遺跡に関すれば礫は溝の中からしか検出されなかった。ここから戦闘行為を想定すれば、守り手は攻め手が溝に侵入したときになって初めて礫を投げることになる。また、反対に攻め手が礫を使用したとすれば、溝めがけて投げていたことになる。あるいは、戦闘行為の後に礫を溝に廃棄した結果、集石となったことも想定でき、集石や礫の解釈は難しい。

最後に当遺跡を立地から見れば、溝で尾根筋と区画した丘陵先端部は尾根筋頂部の眼下にあり、守り手にとっては防ぐのには適していない立地である。残念ながら、当遺跡の溝で区画された丘陵先端部からは落とし穴以外の遺構が検出されていないので、その性格は不明であるが、三刀屋川に面した山陽・山陰両方面へ向かう要所的な地域に立地し、三刀屋川を中心とする平野部を一望できることから、丘陵先端部は見張り台のような機能を有していた可能性を考えておきたい。



第４表　要害遺跡検出礫

註１　松本岩雄1992「出雲・隠岐地域」『弥生土器の様式と編年　山陽・山陰編』木耳社

註２　八幡一郎1982「つぶて」『弾談義』八幡一郎編、六興出版

註３　佐原真1999「日本・世界の戦争の起源」『人類にとって戦いとは１　戦いの進化と国家の生成』福井勝義・春成秀爾編、東洋書林、58～100頁

千田嘉博1996ａ「弥生の戦いと中世の戦い」国立歴史民俗博物館『倭国乱る』展示図録、朝日新聞社、184～189頁

1996ｂ「日本とヨーロッパの城と戦い」『考古学研究』第四三巻二号、36～48頁

註４　時枝克安・村上久和・染矢和徳1997「白岩遺跡」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』六、69～72頁、大分県教育委員会

註５　松本1992『清水谷遺跡』西伯町埋蔵文化財調査報告書　第３集、西伯町教育委員会

註６　小原貴樹1998『尾高浅山遺跡』米子市文化財ガイド二、米子市教育委員会

註７　鳥取県教育委員会1999『むきばんだ』妻木晩田遺跡発掘調査の概要

註８　松江市教育委員会1998『田和山遺跡発掘調査現地説明会資料』

註９　東森晋・池田哲也2000『神主城跡・室崎商店裏遺跡・古八幡付近遺跡・横路古墓』―一般国道９号江津道路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書３―、島根県教育委員会

註10　註４に同じ

註11　大塚岩田遺跡については鳥取県教育文化財団の岡野雅則氏のご教示による。

註12　註３に同じ

註13　和田山町教育委員会1994『シンポジュウム大盛山遺跡のなぞ』シンポジュウム資料集

第５章　まとめにかえて

第１節　出雲地方出土の古墳時代の鎌について

三刀屋熊谷１・２号墳からは、鉄鎌が出土している。三刀屋熊谷１号墳から出土したものは、直刃鎌・曲刃鎌と言う従来からある分類に、当てはめにくい形状を呈している。また、２号墳のものも直線的な造りになっており、一般的な曲刃鎌とは、若干印象を異にしている。そこで、県内出土の古墳時代の鎌と形状を比較することで、三刀屋熊谷１・２号墳出土鎌の位置付けを検討してみたい。

知りうる限りでは、島根県内で古墳時代の鎌は約40本が出土しており、その一覧が第５表である。一応、全県的に出土しているが、割合で言えば、出雲部が圧倒的となる。また、鎌の種類は曲刃のものが多く、出土遺構としては古墳・横穴墓が多い。

分類の基準には、前述の直刃・曲刃と言った平面形態、全長・幅・厚さによる大きさ、基部の折り返し位置や折り返し方向などである。なお、着柄角度の問題は、その鎌の機能を特定する上で最も重要な点と思われるが、基部の折り曲げ角度と着柄角度とは必ずしも一致しない（註１）と言う見解があり、また、松廻１号横穴墓出土鎌（15）の木質残存状況と折り曲げ角度の関係は説明し難いことから、分類基準に加えなかった。

平面形態については、直刃、曲刃、その他とした。直刃としたものは、刃部が直線的で、基部から刃先までほぼ同じ幅で続くものとし、刃先が狭まる平面台形のものも含んでいる。曲刃としたものは、先端部が尖って、刃部が内湾するものとした。これは、蕪の間に刃部を刺し入れやすくするための工夫と、対象に対して、刃部を斜めに当てて引き切る場合の、対象物が滑らないようにするための工夫が施されているものと考えた。この分類基準に当てはめると、三刀屋熊谷１号墳のものは、刃部が湾曲していても曲刃には含まれず、２号墳のものは、背の形状が直線的であっても曲刃と判断される。

鎌の大きさは、小型鎌が全長12cm以下で、刃幅が概して２cm以下のもの、中型鎌が全長12～18cm、刃幅が３cm前後のもの、大型鎌が全長20cm以上で、刃幅が３cm以上のものとする分類（註２）に従った。三刀屋熊谷１・２号墳のものは、いずれも中型鎌と言うことになる。

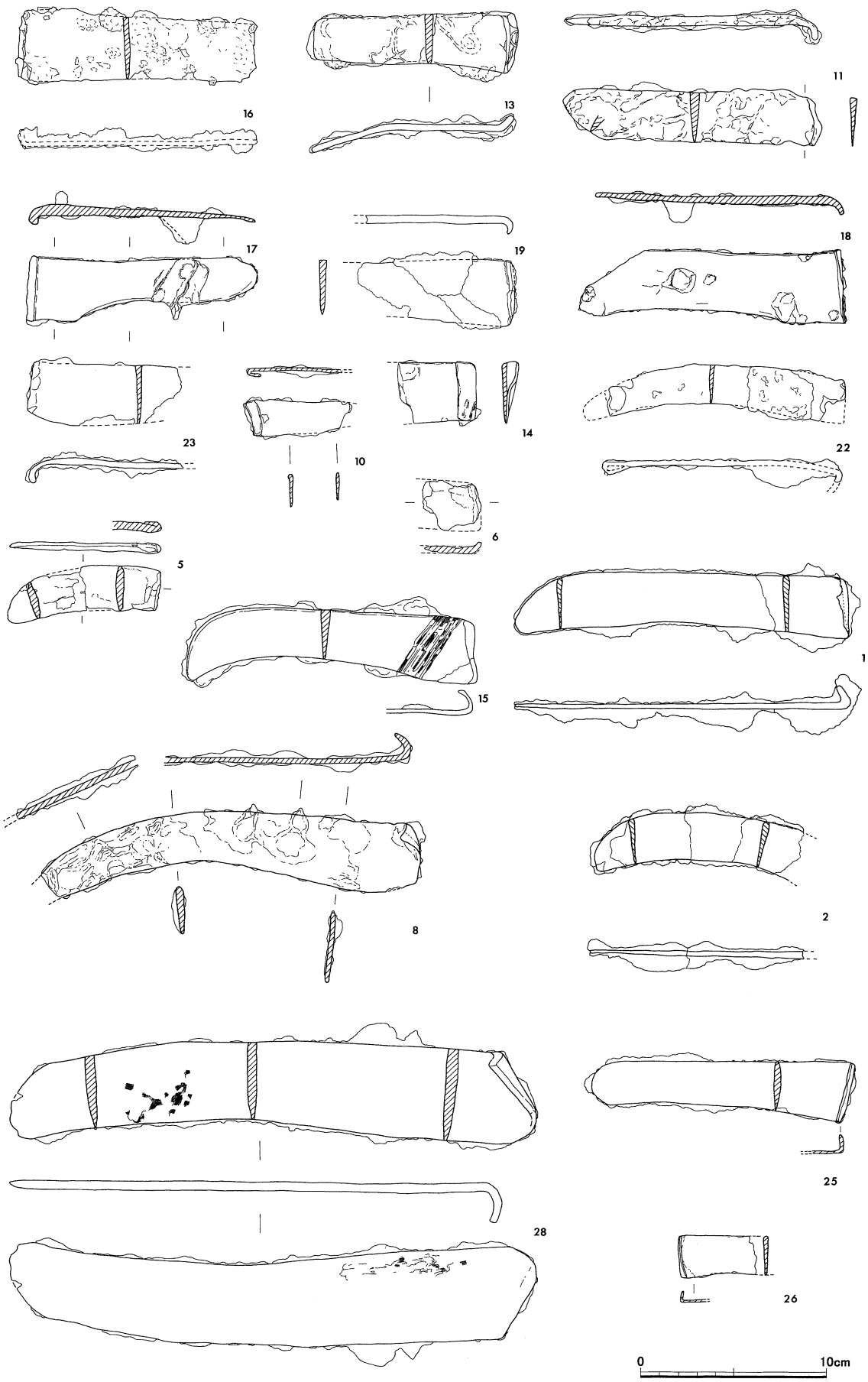
基部の折り返しは、基部全体を折り曲げるものと、基部の上端を斜めに折り曲げるものがある。また、折り曲げる方向は、刃部方向から見て基部をどちらの側に折り曲げているかを示している。

大型鎌で直刃のものは、県内では、神原神社古墳(20)しか知られていない。柄の木質が残っており、柄に対して鈍角に刃部が延びる。刃幅は狭いが、厚く造られており、工具に近い機能を持つもの（註３）ではないだろうか。

直刃のものの内、中型鎌に相当すするのは斐伊中山２号墳から出土している。斐伊中山２号墳の鎌（16）は基部の折り曲げ方向が左である。先端を欠くため形状が不明であるが、地王砦跡出土(19）も含まれる可能性が高い。

道仙３号墳（13）からは直刃の小型鎌が出土している。斐伊中山２号墳のものとは、基部の折り曲げ方向以外に大きな差は見られないが、一回りほど小さい。

大型鎌の内、曲刃のものは、前立山遺跡（28)、兵庫遺跡（29・32)、物井横穴墓群７号横穴墓（38）か



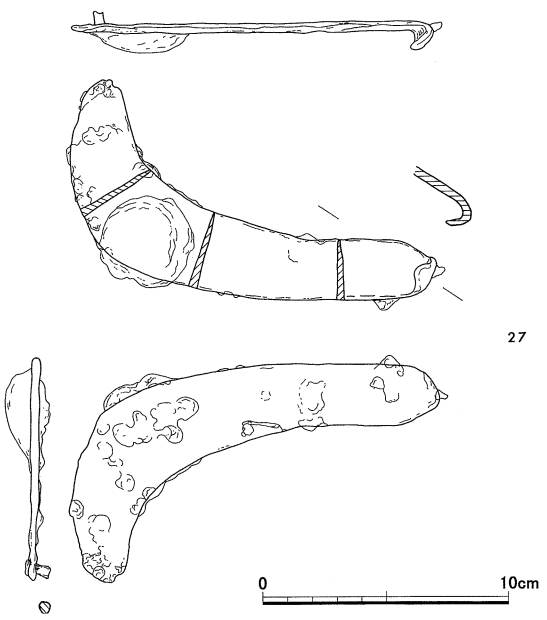
第74図　出雲・石見地方出土の古墳時代の鎌（S＝1：3）

ら出土しているが、出雲部では現在まで知られていない。物井横穴墓群７号横穴墓出土の物（38）は、他の鎌と比べ、明らかに形態が異なるもので、漁労具と想像されるものである。

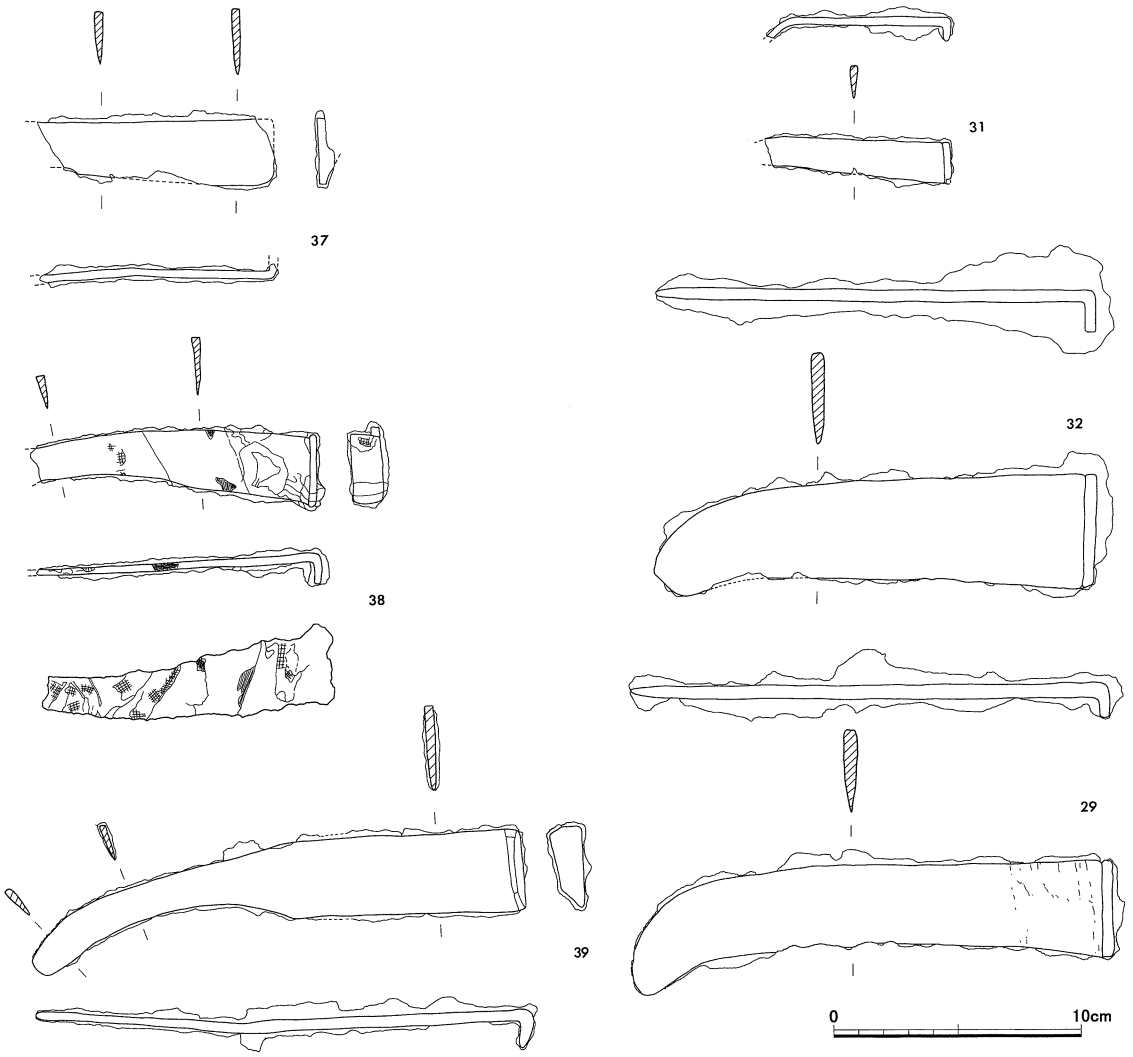
曲刃を呈す中型鎌は座王７号墳(1)、岩屋口遺跡（8)、奥才12号墳（11)、松廻１号横穴墓(15)、兵庫遺跡（29・31）などで出土しており、一般的な器種と言える。ただし、この中で、奥才12号墳(11)は、先端を尖らせているものの、対象物が滑らないようにする刃部の工夫が見られず、一般的な曲刃鎌とは言い難い。

曲刃の小型鎌は高広遺跡（5)、島田池遺跡(10)、兵庫遺跡（31）で出土している。

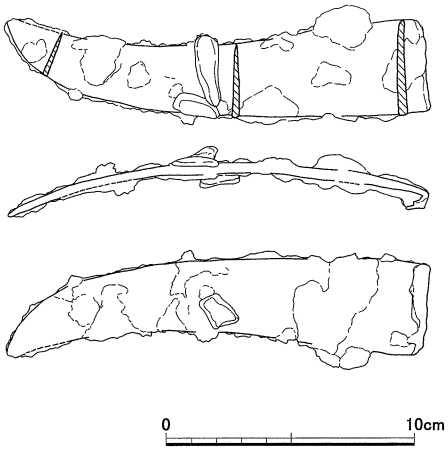
その他の鎌とした物には、上塩冶横穴群34



第75図　小才１号墳出土鎌（S＝1：3）



第76図　隠岐地方出土の古墳時代の鎌（S＝1：3）



第77図　御津中の井古墳出土鎌
（S＝1：3）

支群４号穴（24）や小才１号墳（27）のものが含まれている。刃幅が広く、全体に非常に強く湾曲したもので現在の鉈鎌に近い形状のものである。小才１号墳は、７世紀代の築造と考えられる。

前期古墳出土の鎌の内、中型のものは、斐伊中山２号墳のもの（16）と奥才12号墳のもの（11）がある。(16)は直刃で、基部の折り曲げ方向は左となっている。(11)は、刃部の内湾がなく曲刃とは言い難いものであるが、基部の折り曲げ方向は右である。道仙３号墳の直刃鎌(13)は小型鎌に分類されるものであるが、形態は（16）と大差ないように思われる。(13)の基部の折り曲げ方向は右である。これらの鎌は、神原神社古墳（20）や前立山遺跡（28）のものとは大きさの点で、決定的な差があり、大型鎌と中・小型鎌とは機能が異なるものと考えられる。奥才12号墳（11）のものにも対象物を滑り難くする工夫が見られないことから、古墳時代前期の中・小型鎌は基本的に直刃で、基部の折り曲げ方向は右が多いと考えられる。

古墳時代中期については、時期を限定できる資料が少ないため、この時期の形態は不明である。勝負遺跡出土のものは先端を欠くため形状は不明であるが、刃部が内湾した形状になった、中型鎌と考えられるもので、基部を右に折り曲げている。地王砦跡出土の鎌（19）は、中期頃と考えられるが、この鎌は、中型の直刃鎌である可能性が高い。基部の折り曲げ方向は右である。御津中の津古墳は、土器が出土していないために断定しがたいが、石棺の特徴から５世紀代の築造と考えられる古墳である。御津中の津古墳からは、典型的と言える曲刃鎌（第77図）が出土している。

古墳時代後期のものでは山巻古墳出土のもの（14）がある。刃部の形態は不明であるが、中型鎌で、基部の折り曲げ方向は左である。森遺跡出土のもの（21）は住居跡内からの出土で、曲刃の大型鎌である。基部の折り曲げ方向は右である。横穴墓出土の鎌は、形態が解っているものについては、いずれも曲刃鎌で、直刃のものは見られない。横穴墓を構築する時期には曲刃鎌が一般的になっていると思われる。後期の鎌の基部の折り曲げ方向は、５割近い割合で左のものが見られる。上塩冶横穴群（24）や小才１号墳（27）など刃部が大きく湾曲した特殊な形態の鎌が出土しているが、これらが見られるのは６世紀から７世紀の事と考えられる。

県内出土の鎌を見ると、基部の折り曲げ方向に関しては、左に曲げるものが増えると言う傾向はありそうだが、規則性や画期は見いだせない。時期を特定できる資料の内、県内最古の左鎌は斐伊中山２号墳（16）であるので、古墳時代前期末以降は、両者が共存するものと思われる。

刃部の形態は、後期には曲刃に集約されていく傾向が見られる。森遺跡出土鎌（21）を見ると大型鎌も同様の変化をするものと考えられる。また、前期の曲刃は、奥才12号墳（11）のものが一般的な曲刃と言い難いことから確実なものは存在しないことになり、今のところ、山巻古墳出土のもの（14）などが曲刃の最古級とせざるを得ない。中期には時期を特定できる資料が極端に少ないが、両者が見られる可能性がある。この中で、御津中の津古墳のものが、最古の曲刃鎌と考えられるもので、全国的に見ても５世紀前半を境に一般的な曲刃鎌が出現する（註４）ものと考えられる。

県内出土の鎌を概観した結果、三刀屋熊谷１・２号墳出土鎌と似た形態のものは見られなかった

No.	遺　跡　名	所在地	鎌の種類	折返し方向	折返し位置	長さ	幅	刃部長	厚さ	時　　期
1	座王７号墳	伯太町	曲刃	左	全体	17.8	3.1	17.3	0.3	後期
2			曲刃	不明	不明	不明	2.4	不明	0.3	後期
3	上天馬山古墳群	伯太町								
4	出土地不明	広瀬町	曲刃							
5	高広遺跡Ⅳ区	安来市	曲刃	右	全体	8.5	2.3	7.8	0.4	後期
6			不明	右	全体	不明	2.7	不明	0.4	後期
7	中山古墳	安来市								
8	岩屋口Ⅳ区	安来市	曲刃	右	上端	不明	3.7	不明	0.4	
9	勝負遺跡	東出雲町	不明	右	全体	不明	2.9		0.3	大谷１～２期
10	島田池遺跡６区	東出雲町	曲刃？	左	全体	不明	1.9	不明	0.2	大谷４～５期
11	奥才12号墳	鹿島町	曲刃	右	全体	13.4	2.3	13.2	0.5	前期
12	御津中の井	鹿島町	曲刃	右	全体	16.7	3.8	16.3	0.4	中期？
13	道仙３号墳	松江市	直刃	右	全体	10.8	3	9.9	0.5	前期
14	山巻古墳	松江市	不明	左	全体	不明	3	不明	0.3	
15	松廻１号横穴墓	八雲村	曲刃	右	全体	15.5	3.3	12.7	0.5	後期
16	斐伊中山２号墳	木次町	直刃	左	全体	12.5	3.8	12	0.3	前期末
17	三刀屋熊谷１号墳	三刀屋町	その他	左	全体	12.1	3.3	9.9	0.6	前期末～中期
18	三刀屋熊谷２号墳	三刀屋町	曲刃	右	全体	14.1	3.7	10.9	0.5	中期？
19	地王砦跡	三刀屋町	直刃	右	全体	不明	3.6	不明	0.5	
20	神原神社古墳	加茂町	直刃	右	上端	20	2.9	18.8		前期
21	森遺跡	頓原町	曲刃	右	全体	19.8	4	19.2	0.2	大谷５期
22	渋谷遺跡Ｂ区	横田町	曲刃	右	上端	不明	2.3	不明	0.3	大谷４～５期
23	下大仙子遺跡	横田町	不明	左	全体	不明	3.3	不明	0.3	
24	上塩冶横穴群34支群４号穴	出雲市	その他	目釘	無し	不明	2.5	不明	0.4	後期
25	諸友大師山Ⅱ支群	大田市	不明	左	全体	不明	2.2	不明	0.2	後期
26			その他	右	全体	14	2.6	12.3	0.3	後期
27	小才１号墳	旭町	その他	左	上端	15.9	3.5	14.5	0.4	７世紀代
28	前立山遺跡	六日市町	曲刃？	右	上端	28.2	4.8	26	0.5	前期
29	兵庫遺跡	西ノ島町	曲刃	右	全体	19.4	3.9	18.2	0.6	後期
30			不明	左	全体	不明	3.4	不明		後期
31			曲刃？	右	全体	不明	1.6	不明		後期
32			曲刃	右	全体	17.8	4.6	16	0.5	後期
33			曲刃	不明	不明	不明	3	不明		後期
34			直刃	右	全体	17.4	3.3		0.3	後期
35			直刃	左	全体	16.5	2.7			後期
36			直刃	右		16.2	2.3			後期
37	物井８号	西ノ島町	不明	不明	不明	不明	2.5	不明	0.3	後期
38	物井７号	西ノ島町	曲刃	右	全体	不明	2.7	不明	0.3	後期
39			不明	左	全体	不明	2.8	不明	0.4	後期

第５表　県内出土の古墳時代の鎌

が、鎌の形態については、５世紀代に大きな変化があるものと推定できる。三刀屋熊谷１・２号墳出土のもの（17・18）は、先端部の形状などから曲刃鎌へ移行する際の形態とも想像されることから、斐伊中山２号墳の直刃鎌より後出し、御津中の津古墳などの中期の曲刃鎌に先行するものと想像される。

第２節　三刀屋熊谷２号墳出土の重圏文鏡について

三刀屋熊谷２号墳第１主体部からは重圏文鏡が出土している。内区に２重の圏線を持ち、外区に櫛歯文を施したもので、同様の鏡式としては全国で80例あまりが知られている。宮城県から宮崎県まで全国各地に分布するが、近畿地方や九州には意外に少ないことが注意される。弥生終末から古墳時代後期まで含まれる時期幅を持つが、その中心は前期後半と考えられる。

県内での出土例（第６表）では、安来市五反田１号墳があるほか、三刀屋町馬場遺跡で出土した鏡片も、この鏡式のものと思われる。馬場遺跡鏡は、遺物包含層中の出土のため時期は不明であるが、五反田１号墳は竪穴式石槨を持つ前期末頃の古墳と考えられるもので、直径25m程の円墳ではあるが、地域の有力者の墓と考えられる。その他のものとしては、東出雲町鳥越山遺跡での採集品が復元直径４㎝程の小型鏡で、２重の圏線が巡り他の文様が見られないという点で、重圏文鏡としての要素を備えるものである。ところが、鳥越山遺跡鏡は、圏線が突線ではなく沈線で表現されるものである。鳥越山遺跡では、弥生末から古墳前期の土器と須恵器が採集されている。また、石見町の大峠山古墳群の箱式石棺から出土した鏡は櫛歯文鏡として紹介されているが、写真を見る限り重圏文鏡の可能性もある。大峠山古墳群には７基の古墳が知られているが、鏡の出土古墳は明確ではなく、時期は不明である。

小型和鏡については、鏡種よりも鏡径に重要な意味があったと考えられ、ランクの低さは別として、小さいながらもそれなりの権威のシンボルとして副葬されたとする説（註５）がある。三刀屋熊谷２号墳に近い時期の鏡を副葬する古墳について見ると、同町内に松本１号墳が、斐伊川を挟んだ木次町には斐伊中山２号墳が知られているほか、宍道町の上野１号墳や出雲市の山地古墳もほぼ同時期の古墳と考えられる。松本１号墳は粘土槨を中心主体とする全長50mの前方後方墳で、鏡径13㎝の斜縁獣帯鏡を副葬していた。斐伊中山２号墳は尾根上の高所に立地するという点で、三刀屋熊谷２号墳に近い要素を持っている。斐伊中山２号墳は一辺約15mで、粘土槨を中心主体部とする。鏡径12.1㎝の細線式鳥文鏡を副葬している。宍道町の上野１号墳は長径40mの楕円形墳で全長約７mの長大な粘土槨を持つもので、鏡径17.5㎝の斜縁神獣鏡を副葬していた。山地古墳は長径24mの楕円形墳で、箱式石棺から鏡径12.6cmの二神二獣鏡、鏡径８㎝の珠文鏡の２面が出土している。三刀屋熊谷２号墳を合わせた５古墳で、墳丘の規模と鏡径の関係は一致すると言えそうである。安来市の五反田１号墳は直径25mの円墳で、竪穴式石槨を中心主体に持つ古墳であるが、出土した鏡は直径 5.4㎝の重圏文鏡となっている。五反田１号墳の場合は、盗掘を受けており、他に墳丘や主体部にふさわしい鏡が存在した可能性は否定できない。

三刀屋熊谷２号墳は、小規模の古墳であったが、小さいとは言え権威の象徴としての鏡を保持しており、他の鏡を副葬しない古墳に対しては権威を誇示し得たものと考えられる。奈良時代には「熊谷軍団」が置かれる丘陵ではあるが、郡名を冠さない「軍団」は全国的にも珍しく、飯石郡における熊谷地区の存在の特殊性を示すものと思われる。その前代に、熊谷遺跡の丘陵にこうした勢力が存在し得たことが確認されたことを見ても、この地域の重要性や特殊性を更に際だたせるものと言え、地域の歴史を考える上で重要な資料を提供したと言える。

	遺　跡　名	市町村	鏡　種	直　径
1	五反田１号墳	安来市	重圏文鏡	5.4cm
2	造山１号墳		三角縁三神三獣獣帯鏡	24cm
3			方角規矩鏡	17.4cm
4			方角規矩四神鏡	19cm
5	造山３号墳		斜縁二神二獣鏡	15.4cm
6	大成古墳		三角縁唐草文帯二神二獣鏡	23.4cm
7	鷺ノ湯病院横穴		珠文鏡	7.7cm
8	小谷土壙墓		内行花文鏡	8.2cm
9	今若峠１号墳		内行花文鏡	面径不明
10	小馬木２号墳		珠文鏡	7cm
11	月坂放レ山５号墳		乳文鏡	7.9cm
12	古城山古墳	東出雲町	位至三公銘内行花文鏡	16.3cm
13	鳥越山遺跡		鏡種不明	4cm
14	寺床１号墳		斜縁二神二獣鏡	13cm
15	八日山１号墳	松江市	三角縁波文帯四神二重鏡	21.85cm
16	月迫番外３号墳		盤竜鏡	10.5cm
17	客山１号墳		九乳文鏡	9.2cm
18	金崎１号墳		内行花文鏡	6.9cm
19	薬師山古墳		四乳鏡	9.5cm
20	御崎山古墳		珠文鏡	8.2cm
21	社日２号墳		珠文鏡	6.4cm
22	岡田山１号墳		長宜子孫銘内行花文鏡	10.6cm
23	古天神古墳		変形五獣鏡	13.6cm
24	北小原３号墳		珠文鏡	9cm
25	釜代１号墳		内行花文鏡	11.4cm
26	奥才14号墳	鹿島町	内行花文鏡	18cm
27			方角文鏡	11cm
28	奥才34号墳		捩文鏡	7.8cm
29	奥才12号墳		珠文鏡	6.7cm
30	小屋谷３号墳	八雲村	四チ文鏡	9.5cm
31	築山古墳	玉湯町	位至三公銘双竜鏡	8.0cm
32	上野１号墳	宍道町	鏡種不明	17.5cm
33	上島古墳	平田市	五鈴鏡	10cm
34	斐伊中山２号墳	木次町	細線式鳥獣鏡	12.1cm
35	神代古墳	大東町	小型獣形鏡	7.2cm
36	神原神社古墳	加茂町	景初三年銘陳是作重列式三角縁神獣鏡	23cm
37	土井・砂１号墳		破砕鏡（舶載内行花文鏡）	面径不明
38	松本１号墳	三刀屋町	斜縁獣帯鏡	13cm
39	三刀屋熊谷２号墳		重圏文鏡	4.7cm
40	馬場遺跡		重圏文鏡	面径不明
41	山地古墳	出雲市	二神二獣鏡	12.6cm
42			珠文鏡	8.0cm
43	大念寺古墳		鏡種不明	面径不明
44	明神古墳	仁摩町	鏡種不明	面径不明
45	大峠山古墳群	石見町	櫛歯文鏡	面径不明
46	めんぐろ古墳	浜田市	乳文鏡	面径不明
47	周布川河原		内行花文鏡	7.6cm
48	四塚山古墳群	益田市	三角縁神獣鏡	21.8cm
49	小丸山古墳		珠文鏡	7.3cm
50	鵜ノ鼻50号墳		乳文鏡	面径不明
51	苗代田東方丘陵南	五箇村	乳文鏡	10.5cm
52	丸山１号墳		鏡種不明	8.0cm

第６表　県内出土の古墳時代の鏡

註１　松井和幸「農耕具」『季刊考古学　第28号』雄山閣出版　1989年

註２　寺沢薫「収穫と貯蔵」『古墳時代の研究　第４巻』雄山閣出版　1991年

註３　古瀬清秀「農耕具」『古墳時代の研究　第８巻』雄山閣出版　1991年

註４　松井和幸「農耕具」『季刊考古学　第28号』雄山閣出版　1989年

　　都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』岩波書店　1989年

註５　今井堯「中・四国地方古墳出土素文・重圏文・珠文鏡」『古代吉備　第13集』　1991年

挿図の出典及び表作成に使用及び参考にした文献

『岩屋谷古墳群他発掘調査』伯太町教育委員会　1981年

『高広遺跡発掘調査報告書』島根県教育委員会　1984年

『岩屋口南遺跡』島根県教育委員会　1996年

『勝負遺跡・堂床古墳』島根県教育委員会　1998年

『島田池遺跡・鶏貫遺跡』島根県教育委員会

『奥才古墳群』鹿島町教育委員会　1985年

『島根県埋蔵文化財調査報告書第Ｘ集』島根県教育委員会　1983年

『島根県埋蔵文化財調査報告書　第ＸⅢ集』島根県教育委員会　1987年

『八雲村の遺跡』八雲村教育委員会　1978年

『斐伊中山古墳群－西支群－』木次町教育委員会　1993年

『要害の首塚・地王砦跡発掘調査報告書』三刀屋町教育委員会　1989年

『古代出雲文化展展示図録』島根県教育委員会　1998年

『森遺跡・板屋Ⅰ遺跡・森脇山城跡・阿丹谷辻堂跡』島根県教育委員会　1994年

『沢田宅裏・鑓免大池・渋谷遺跡調査報告』横田町教育委員会　1982年

『下大仙子遺跡発掘調査報告書』横田町教育委員会　1985年

『諸友大師山横穴群』大田市教育委員会　1983年

『中国横断自動車道広島浜田線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ』島根県教育委員会　1992年

『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会　1980年

『兵庫遺跡』西ノ島町教育委員会　1996年

『物井横穴墓群』島前教育委員会　1995年

『御津中の津古墳発掘調査報告書』鹿島町教育委員会　1985年

林原利明「弥生時代終末～古墳時代前期の小型仿製鏡について」『東国史論第５号』1990年

今井堯「中・四国地方古墳出土素文・重圏文・珠文鏡」『古代吉備　第13集』　1991年

藤田孝司「重圏文（仿製）鏡小考」『財団法人君津郡市文化財センター研究紀要Ｖ』財団法人君津郡市文化財センター　1991年

林原利明「東日本の初期銅鏡」『季刊考古学第43号』雄山閣出版　1993年

高倉洋彰「倭鏡の製作」『季刊考古学第43号』雄山閣出版　1993年

森下章司「仿製鏡の変遷」『季刊考古学第43号』雄山閣出版　1993年

『中央自動車道長野線埋蔵文化財発掘調査報告書16』長野県教育委員会　1997年

森下章司「古墳時代仿製鏡の変遷とその特質」『史林74-6』京都大学　1991年

『国立歴史民俗博物館研究報告　第56集』国立歴史民俗博物館　1994年

『釜代１号墳外発掘調査報告書Ⅰ』松江市教育委員会　1994年

第５表の作成には当センター角田徳之の指導を得た。

熊谷遺跡調査前近景（Ⅰ区付近・南から）

熊谷遺跡調査前近景（Ⅱ区付近・南から）

図版２

三刀屋熊谷１号墳主体部検出状況（西から）

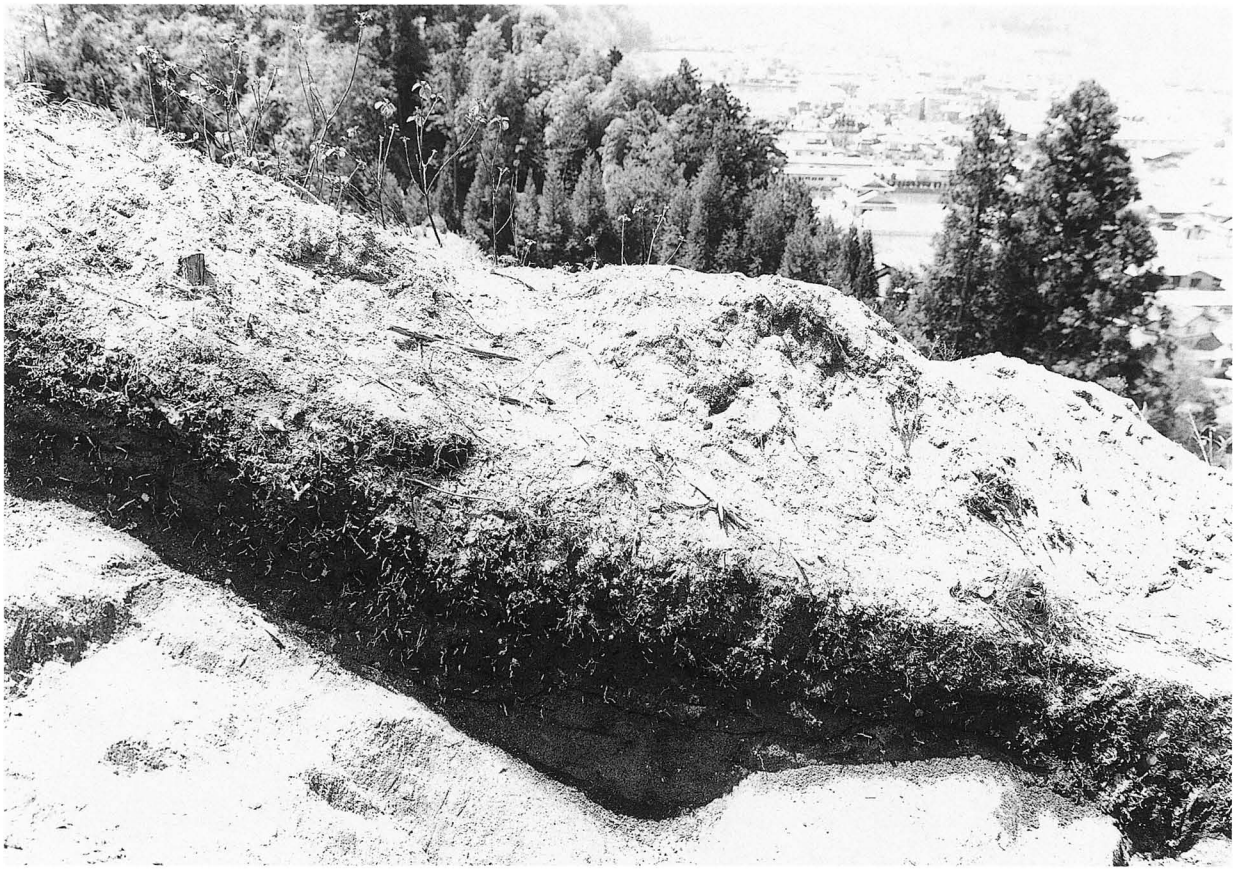
三刀屋熊谷１号墳主体部土層断面（東から）

三刀屋熊谷１号墳主体部遺物出土状況（南から）

三刀屋熊谷１号墳主体部完掘状況（北から）

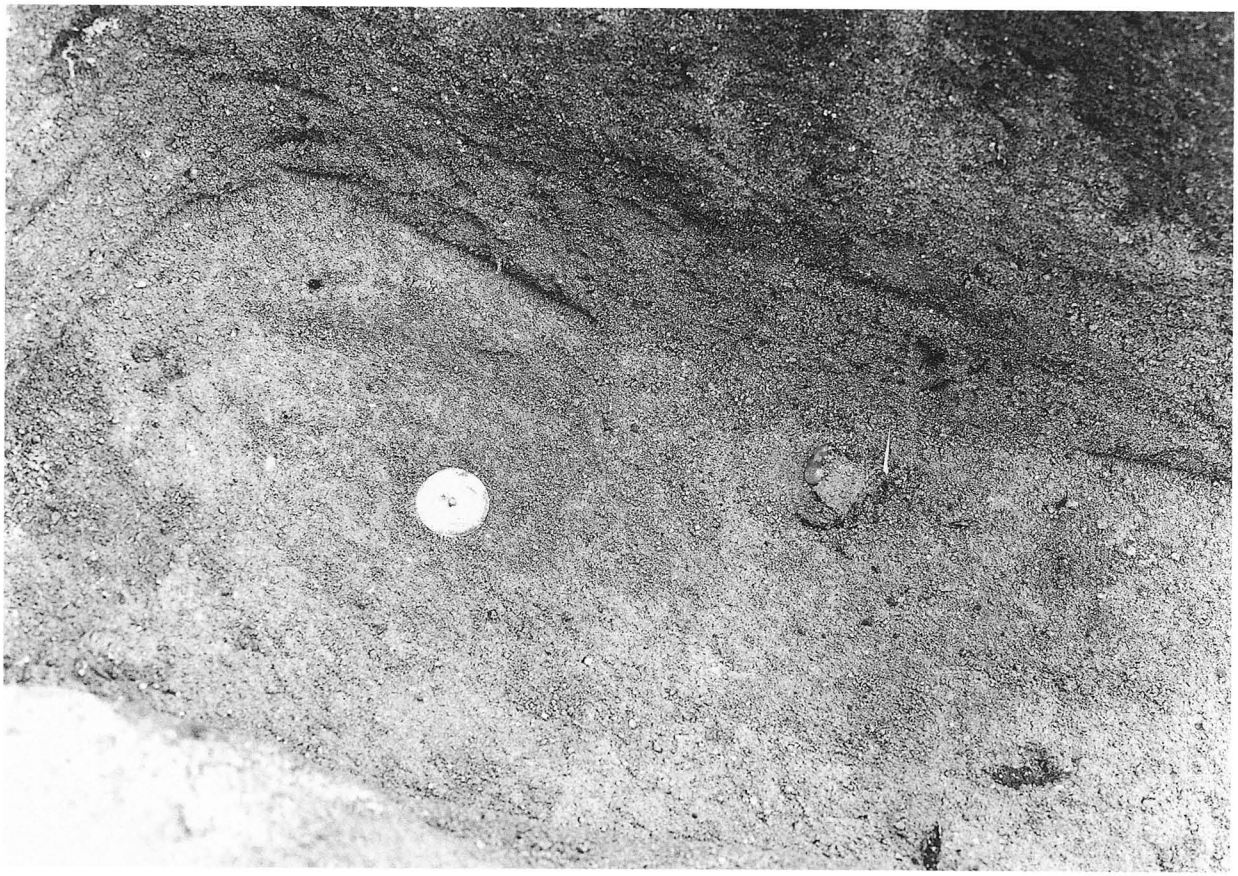
図版４

三刀屋熊谷１号墳主体部完掘状況（北東から）



熊谷遺跡Ⅰ区トレンチ２土層断面（東から）

熊谷遺跡Ⅰ区トレンチ２土層断面（東から）



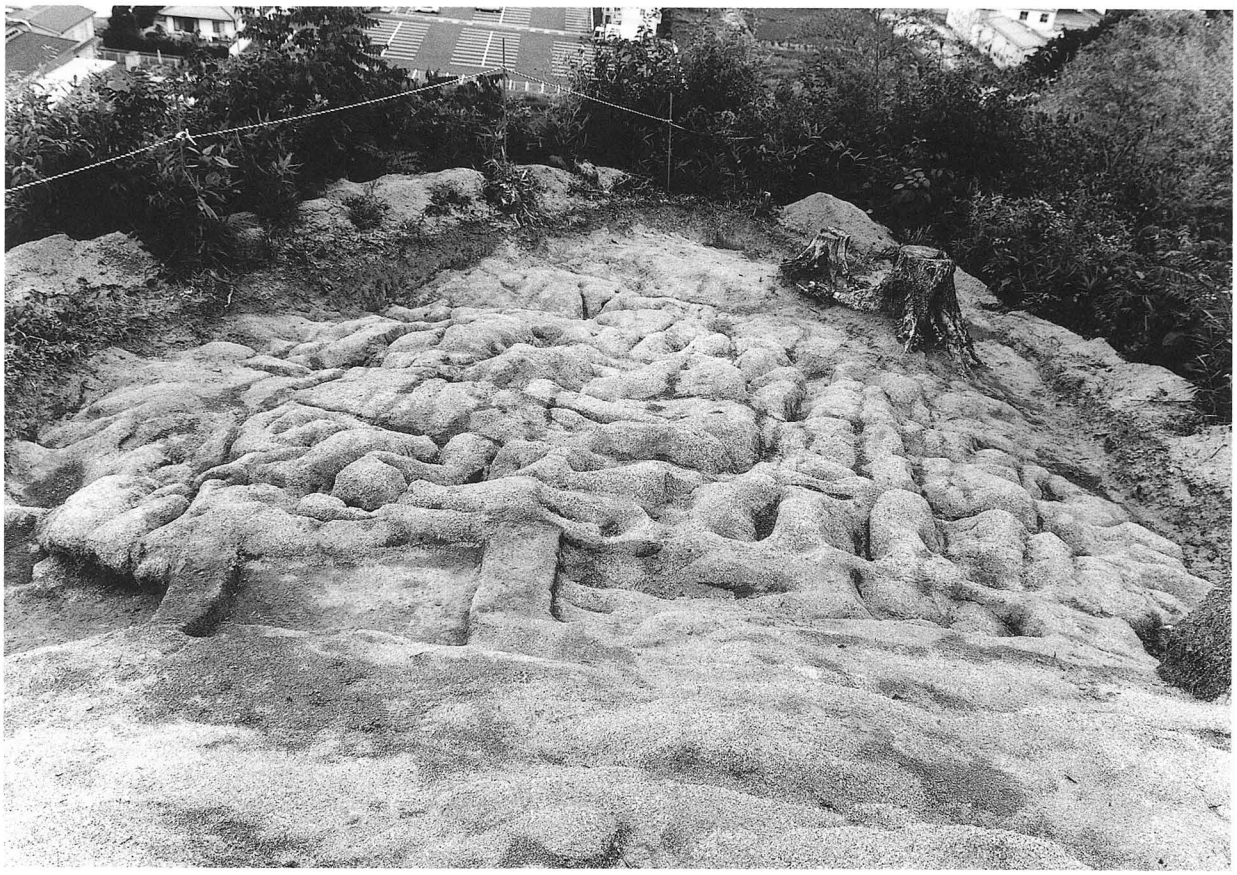
三刀屋熊谷２号墳第１主体部遺物出土状況（北東から）

図版６

三刀屋熊谷２号墳第２主体部遺物出土状況（東から）

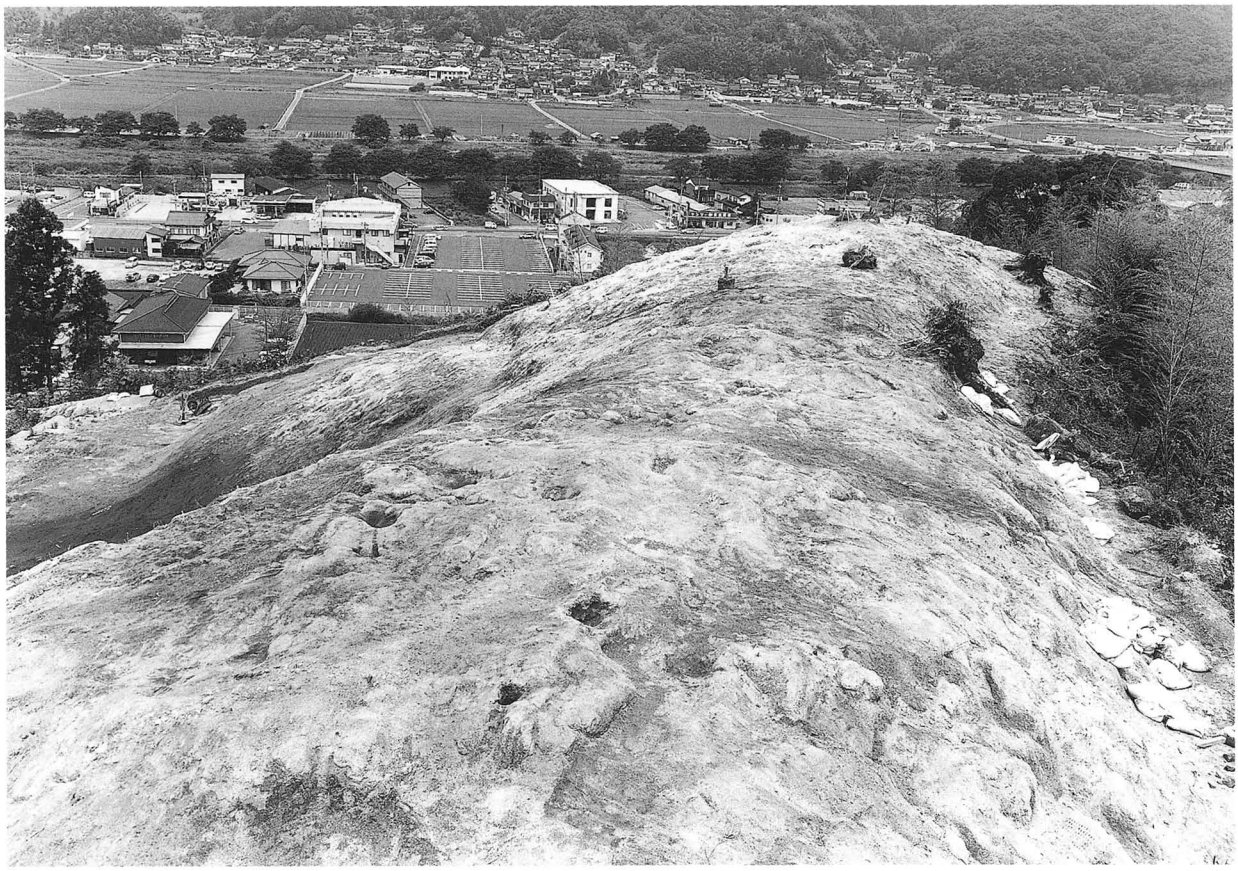
三刀屋熊谷２号墳完掘状況（北から）

三刀屋熊谷２号墳完掘状況（南から）



熊谷遺跡Ⅰ区溝５付近検出状況（南から）

図版８



熊谷遺跡Ⅰ区頂部完掘状況（南から）

熊谷遺跡Ⅰ区完掘状況（南から）

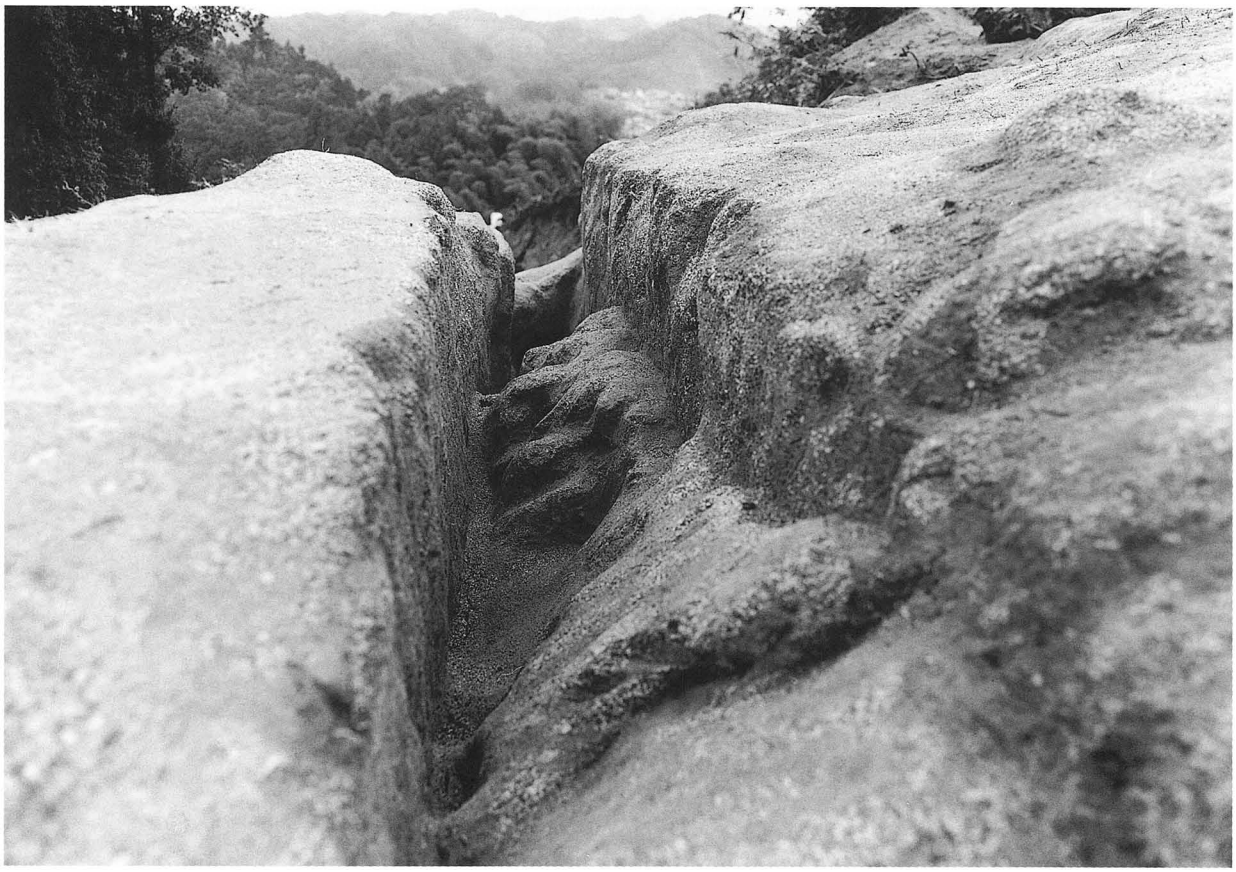
熊谷遺跡Ⅱ区落とし穴状遺構２完掘状況（北西から）

熊谷遺跡Ⅱ区落とし穴状遺構１完掘状況（北から）

図版10

熊谷遺跡Ⅱ区土壙１完掘状況（北西から）

熊谷遺跡Ⅱ区溝７土層断面（西から）



熊谷遺跡Ⅱ区溝７完掘状況（西から）

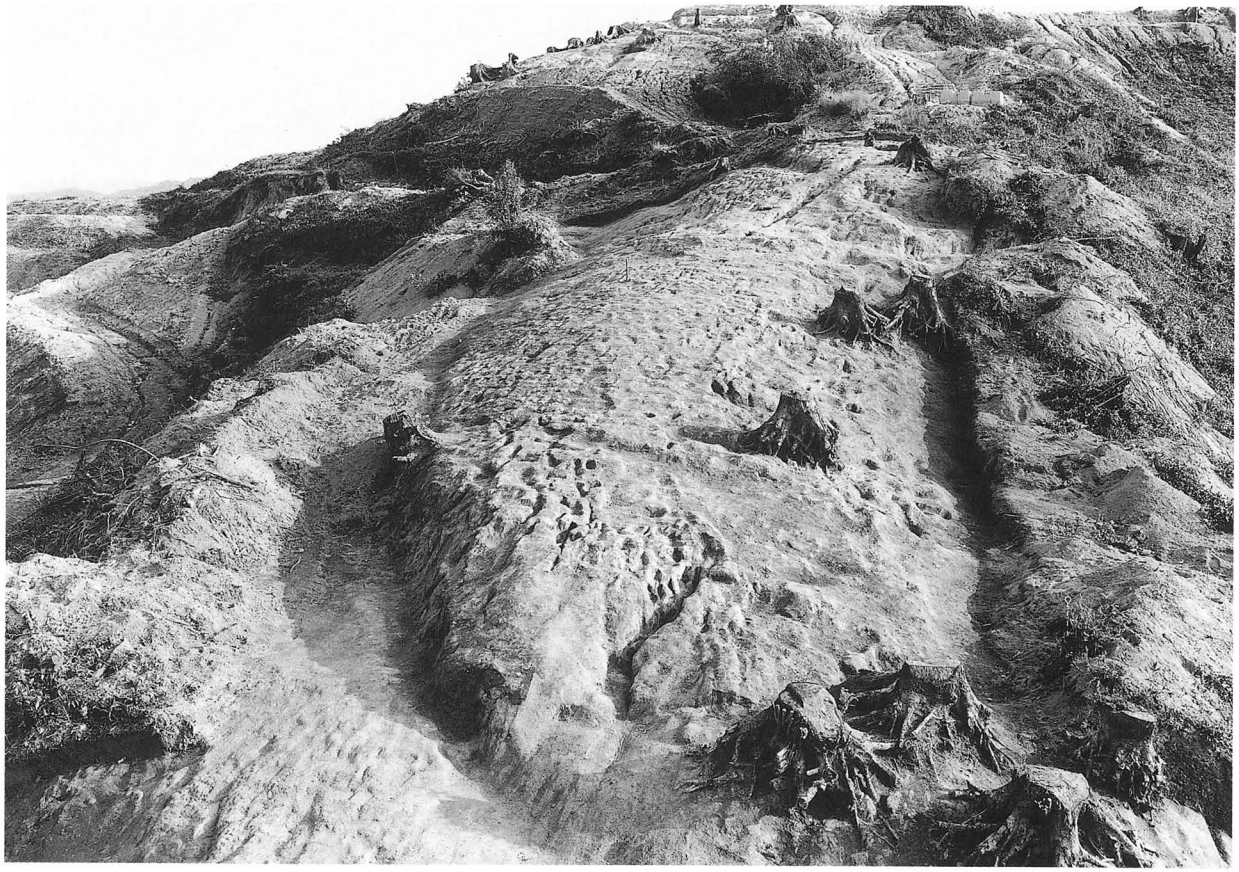
熊谷遺跡Ⅱ区溝７完掘状況（北から）

図版12

熊谷遺跡Ⅱ区加工段完掘状況（北から）

熊谷遺跡Ⅱ区北側完掘状況（南から）

熊谷遺跡Ⅱ区加工段付近完掘状況（北から）



熊谷遺跡Ⅱ区南側完掘状況（北から）

熊谷遺跡Ⅲ区西側・遺構検出状況（東から）

熊谷遺跡Ⅲ区西側・完掘検出状況（東から）

熊谷遺跡Ⅲ区トレンチ28土層断面（北から）

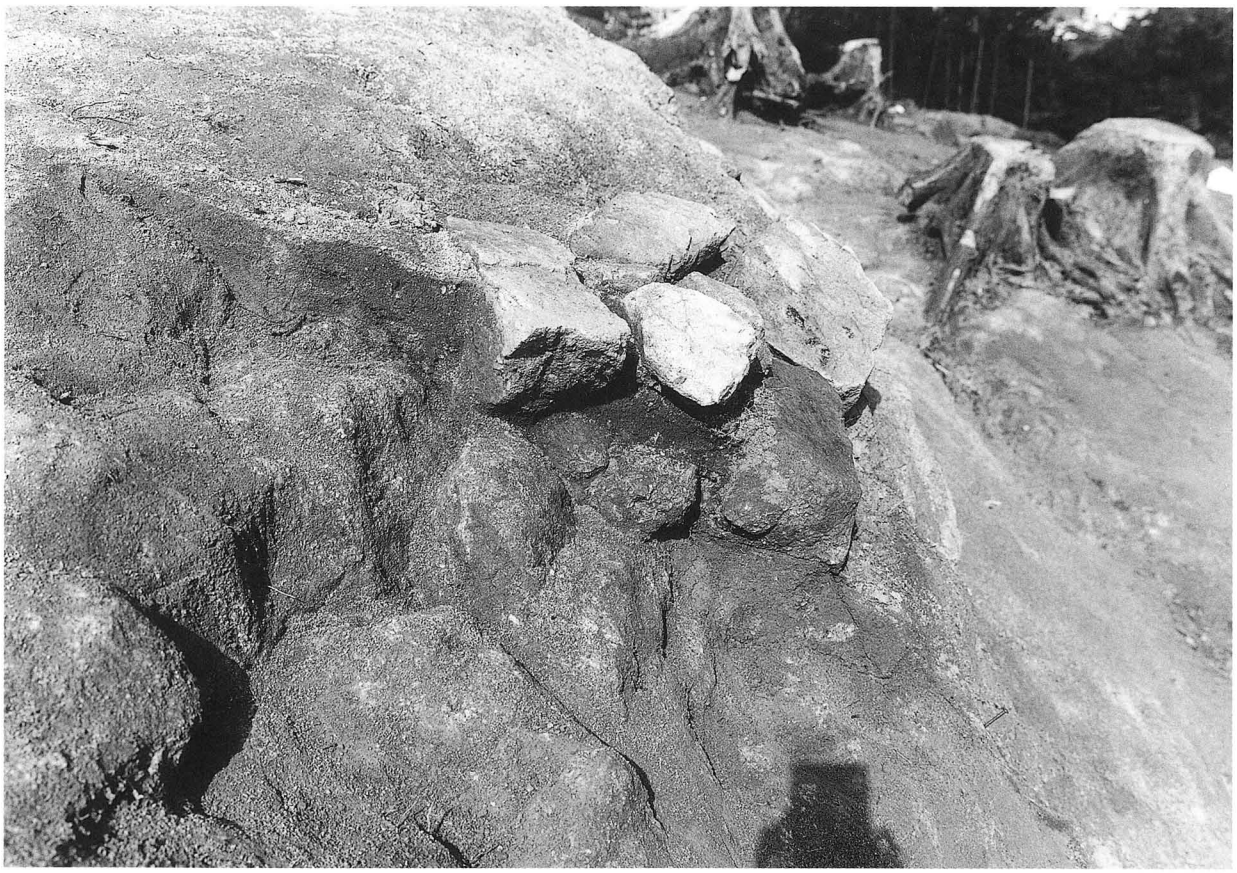
熊谷遺跡Ⅲ区トレンチ107土層断面（北から）

図版16

熊谷遺跡Ⅲ区溝８付近完掘状況（西から）

熊谷遺跡Ⅲ区溝８土層断面（南から）

熊谷遺跡Ⅲ区溝８土層断面（南から）



熊谷遺跡Ⅲ区石垣状遺構検出状況（南から）